

令和2年度

宮城県遺跡調査成果資料集

令和2年12月
宮城県考古学会

刊行にあたって

このたびの猛威を振るう新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため、総会・大会に続き、遺跡調査成果報告会までも中止となりました。本会の主要となる活動が中止となったことは、大変残念な思いです。

その一方で、県内各機関による埋蔵文化財調査は粛々と進められており、様々な成果がありました。上記の様な状況を踏まえ、今年度の報告会は中止としましたが、それらの成果については誌上で報告するという形といたしました。

また、毎年、報告会に参加して頂いていた会員外の方々のため、今年度に限り、本資料集をインターネットで公開することにいたしました。この件につきまして、ご承諾頂いた各機関・個人の皆様に厚く御礼申し上げます。

現在もなお、新型コロナウイルスの感染が拡大しております。来年度につきましては、インターネット等を利用するなどして、本会の活動を続けることを考えざるを得ないと思っております。その様な形では参加できないという方もいらっしゃると思いますが、この様な状況下のためご理解を頂ければ幸いです。また、会員の皆様におかれましては、様々なご意見がおありかと存じます。それらを是非事務局にご連絡頂ければと考えております。

令和2年（2020）年12月12日

宮城県考古学会

会長 佐々木和博

令和2年度 宮城県遺跡調査成果資料集

目次

刊行にあたって

調査成果報告

1. 姥沢遺跡	東北大学大学院文学研究科考古学研究室 東北大学埋蔵文化財調査室 ……………	1
2. 山田上ノ台遺跡	仙台市教育委員会 ……………	7
3. 大久保貝塚	宮城県教育委員会 ……………	11
4. 南北原遺跡	加美町教育委員会 ……………	17
5. 長町駅東遺跡	仙台市教育委員会 ……………	21
6. 原遺跡	岩沼市教育委員会 ……………	27
7. 多賀城跡	宮城県多賀城跡調査研究所 ……………	33
8. 西沢遺跡	多賀城市教育委員会 ……………	39
9. 馬場台遺跡	白石市教育委員会 ……………	45
10. 戸花山遺跡	山元町教育委員会 ……………	49
11. 彦右工門橋窯跡	宮城県教育委員会 ……………	55
12. 入間野平城館跡	柴田町教育委員会 ……………	61
13. 石森城跡	石巻市教育委員会 ……………	65
14. 北目城跡	仙台市教育委員会 ……………	69
15. 仙台城跡	仙台市教育委員会 ……………	75
16. 令和2年度の震災復興事業に伴う 埋蔵文化財調査について	宮城県教育委員会 ……………	81

[考古学で使われる用語のいろいろ] …………… 85

1. 本資料集は令和2年度（令和元年度後半分を含む）に宮城県内で行われた発掘調査の調査成果をまとめたものです。内容は令和2年12月時点での調査成果について概要をとりまとめたものであり、調査の最終報告となるものではありません。

2. 本資料集作成及び宮城県考古学会 HP（<http://www.m-kouko.net/>）での資料集のPDF公開につきましては報告を引き受けていただいた次の機関からご協力および承諾を得ました。

東北大学大学院文学研究科考古学研究室、東北大学埋蔵文化財調査室

宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所、仙台市教育委員会、白石市教育委員会、岩沼市教育委員会、多賀城市教育委員会、石巻市教育委員会、山元町教育委員会、柴田町教育委員会、加美町教育委員会

調查成果報告

2019・2020年度姥沢遺跡の発掘調査の概要

東北大学大学院文学研究科考古学研究室
東北大学埋蔵文化財調査室

1. 調査要項

遺跡名称：姥沢遺跡（宮城県村田町沼田字姥沢 28・77・80 番地）

調査主体：東北大学大学院文学研究科考古学研究室

調査協力：東北大学埋蔵文化財調査室

調査担当：東北大学大学院文学研究科考古学研究室 教授 鹿又喜隆
東北大学埋蔵文化財調査室 特任准教授 菅野智則

調査期間：2019年10月28日～11月3日（試掘調査）、2019年12月24日（踏査）
2020年10月25日～11月7日（本調査）

調査面積：2019年度 18.82 m²、2020年度 40.99 m²

2. 調査の目的

当研究室では、縄文時代の集落遺跡の発掘調査を継続して実施しています。近年は、仙台市野川遺跡などの縄文時代草創期の集落の調査を実施しており、縄文時代開始期における居住形態に関する研究を進めています。このような調査を通じ、縄文時代の各時期の様相を通史的に研究することにより、縄文時代の具体的な実態をより明らかにすることができると考えています。

村田町姥沢遺跡（第1・4図）は、これまでに地元の方により表面採集されてきた資料から、縄文時代の早期・中期・後期と、弥生時代にまたがる重層的な遺跡であると考えられます。とくに縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての遺物が多く、地形等から竪穴住居跡等の存在も想定できました。

今回の調査では、この姥沢遺跡の発掘調査を通じて、縄文時代中期から後期にかけての居住形態の実態について研究することを目的としています。この時期には、急激な環境変動があり、集落遺跡の急減等の様々な大きな変化があったことがわかっています。姥沢遺跡の調査成果から、人類の環境変化への対応を考える上で重要な知見を得られるものと考えています。

また、姥沢遺跡が位置する村田町周辺地域において、縄文集落遺跡の発掘調査事例は多くはありません。村田町より南部の蔵王町・白石市における当概期の集落遺跡（菅生田遺跡・二屋敷遺跡）の発掘調査事例からは、往々にして関東や北陸系の土器が混ざり、敷石住居跡等の関東・中部地域の特徴が混在する様相が見受けられます。この様な状況を踏まえると、本調査成果は、宮城県南部と遠隔地との地域間交流を考える上で、さらに重要な資料となることが考えられます。

2019年度の調査では、遺跡の状態を確認する試掘調査と位置づけ、各地点に小規模の調査区を設定し（第2図）、各時期の包含層の分布状況、堆積状況を確認する試掘調査を行いました。その結果、2区と6区において、遺物包含層等を確認することができました。また、遺跡の範囲を確認するための踏査も実施しています。今年の2020年度の調査では、前年の試掘調査を踏まえ、その内容確認を目的とした調査を実施しました（第2図）。

3. 2019年度の調査の概要

(1) 1区 (2.01 m²)

畑地に遺物が多数分布していることから、畑地東側の斜面部に遺物包含層が残っている

ことを想定して調査区を設定しました。調査の結果、崩落土と考えられる土層の直下から地山土を確認しました。遺構等は確認できませんでした。畑地等の造成により、この地点の包含層はすでに削平されたものと考えられます。出土した遺物等は、表土や崩落土に数点混じる程度で摩耗しています。

(2) 2区 (合計 3.82 m²)

2区は丘陵の中段目にあたり、遺構や遺物包含層等が存在するか確認するために調査区を設定しました。調査の結果、旧耕作土の下から土器や石器等の遺物と共に黒色土の広がりを確認しました。そのうち東側ではとくに黒色が強く、焼土等も含まれています。この黒色土層の西側では、黒色土の混じりは少なく、遺物等が表面に認められる土層が広がります。これらの特徴から、当初は遺構と考えました。

黒色土層の広がりを確認するため、東側に拡張しました。その結果、その土層の西端を確認しました。また、その内容を確認するため、北側にサブトレンチを設定し床面近くまで掘り下げました。その床面近くからは、中期末葉土器の破片が出土しています。この埋土は全て回収し、その土壌を乾燥ふるい(1mm・3mm)にかけたところ、チップが多量に混ざることが確認できました。2019年度の調査では、この時点で止めました。

(3) 3区 (2.04 m²)

丘陵頂部の平坦面には、遺構等の存在を想定されることから、耕作をしていない場所を選択し、調査区を設定しました。調査の結果、表土直下から地山土を確認し、遺構・遺物も全く確認できませんでした。また、断面観察の結果、地山土の最上層は、川崎スコリアを含む層であるため、縄文時代の土層は全て削平されていたことが判明しました。

(4) 4区 (2.1 m²)

畑地の西側に南北に走る小さな沢があり、その近くに低湿地部を確認するための調査区を設定しました。調査の結果、現在の耕作土下に、耕作土と類似する特徴を有する土層が続きます。この土層には、印鑑等の現代の物品を含んでおり、新しい時代の造成土と考えられました。その下部を確認するためグリッド西側を深掘りしましたが、現地表面から1.2m程まで続くことを確認した時点で、湧水等のため掘り下げを中止しました。そして、その深掘り地点の底面からボーリングステッキを用いてその下部を確認したところ、類似する土層がさらに0.3m程続いた後に地山土を確認することができました。これらの結果から、この区画では、畑地造成の際に削平した上で、土を押し出した状況が想定できました。

(5) 5区 (2.04 m²)

5区は、4区と同様の理由で調査区を設定しました。調査の結果、現耕作土(1層)と旧耕作土(2層)の下から、砂混じり黒色土層(3層)を確認しました。この3層の厚さは最大で42cm程であり、その下部からは地山土を確認しました。この3層からの出土遺物は多くはありませんが、小片の縄文土器が出土しています。これらの土層の特徴や出土遺物、次の6区の調査成果からすると、縄文時代の遺物包含層の末端部と考えられました。

(6) 6区 (合計 6.81 m²)

6区の土層も5区と同様に1～3層に区分することができました。3層は、土器や石器類を多量に含んでおり、良好な遺物包含層と判断できました。この出土土器は、後期前葉を中心とする時期のものでした。この成果に基づき、遺物包含層の広がりを確認するため、西側にさらにグリッドを設定しました。当初設定したグリッドを6a区とし、西側に向かって6c区、6e区、6g区の3カ所を設定しました。

それらのグリッドの調査の結果、6c区の中央あたりで、従来の2層の下部にやや黒みが強い層(2b層)が存在することが判明しました。この土層は、現代の物を含んでおり、畑地造成の際に形成されたものと考えられました。6e・6g区では、この2b層が面的に厚く堆積するため、その下部は2019年度の調査では確認できませんでした。

(7) 踏査 (第3図)

姥沢遺跡の範囲を確認するため、2019年12月24日に村田町教育委員会の協力を受けて踏査を行いました。第3図のA地点が発掘調査を行った地点となりますが、周囲のB～J地点の各地点で遺物を採集することができました。

B～G地点では縄文後期土器を中心とし、とくにB地点では弥生時代中期の土器のほか、玉や石器等を確認することができました。C～G地点の土器は、小破片のみでした。とくにC・D地点の土器はかなり摩耗しており、上方のA地点から流出した遺物である可能性も考えられます。H～J地点では、縄文土器のほか土師器が散布していました。

4. 2020年度調査の概要

(1) 2区 (24.57 m²、第5図 a・b)

昨年度の調査では、遺構と想定していた部分の全体像を確認するため、2区を広げる形で調査区を設定しました。そして、広範囲にプランを確認した上で、昨年度のサブトレンチをやや広げて掘り下げた結果、遺構と想定していた部分は、遺構ではなく斜面堆積の包含層であることが判明しました。確認できた範囲の包含層の土層は1～5層に分かれ、観察できた出土遺物は中期末葉の土器が多く認められました。2020年度の調査では、K5区とK6区の北側部分の1・2層を掘り下げた時点で調査を終了しました。

また、遺構を探すため、東側にも拡張しました。その結果、遺物は出土しませんでした。土坑を1基確認しました。これらの調査成果からすると、竪穴住居跡等の遺構群は、南東方面にあることも想定できます。

(2) 6区 (合計 16.42 m²、第5図 c・d)

昨年度確認した遺物包含層である3層の内容と遺構の確認を行いました。しかし、出土する遺物量がかかなり多く、掘り下げに時間がかかったため、今年の調査は3層中で止めました。出土した遺物は、後期前葉の土器が多く、石器類も多量に出土しています。

また、埋設土器1基を確認しました。底部付近のみのしか残っていなかったため、時期等の詳細は不明ですが、土層やその他の出土遺物の様相からすると、包含層と変わらない時期であることが推定されます。

5. まとめ

2019年度の調査を踏まえた2020年度の調査では、遺物包含層と遺構の確認調査を行いました。2地区で遺物包含層の調査を行いました。包含層の形成時期が異なり、時期による居住形態を考える上で重要な成果であったと言えます。また、竪穴住居跡等の居住に関わる施設は確認できていませんが、近辺に存在することが想定されます。来年度以降の調査では、遺物包含層のさらなる内容確認を進めるとともに、これらの遺構群の所在について確認を進めていきたいと考えています。なお、これらの成果については、現在報告書作成のため整理作業を進めています。

謝辞

これらの発掘調査については、地元の村田町教育委員会、村上侃彦氏のほか、地権者の村上正一・栄氏、佐藤勇一氏を始めとした皆様のご協力とご配慮を得ました。また、東北大学東北アジアセンター研究センターの佐野勝宏先生には、ドローンによる空撮・測量を実施して頂きました。文末に記し、御礼申し上げます。

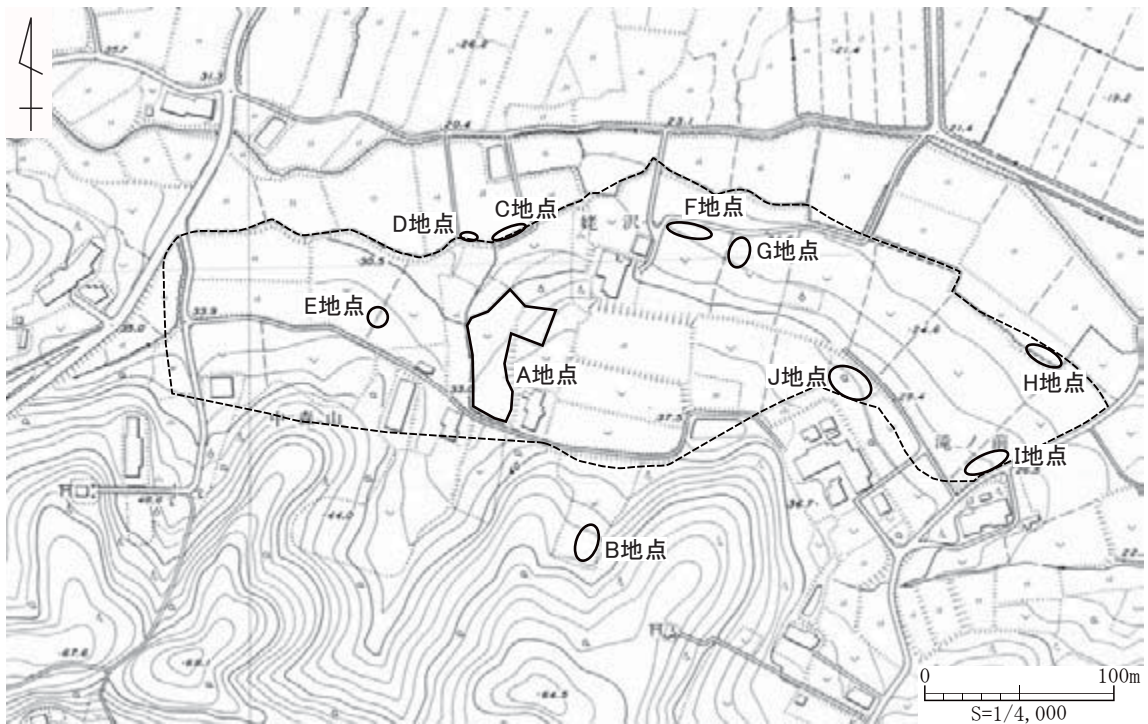


第1図 姥沢遺跡の位置と周辺の遺跡

* グレーは縄文の遺跡を示す。



第2図 姥沢遺跡調査地点
(村田町 1985年測量図「X-RD17-1」S=1/500より)



第3図 踏査にて遺物を採集した地点
(村田町 1985年測量図「X-RD17-1」S=1/500より)



第4図 調査区周辺の地形



a. 2区調査最終状況（右が北）



b. 2区包含層3層遺物出土状況（西から）



c. 6区調査最終状況（下が北）



d. 6区包含層遺物出土状況（東から）

第5図 2020年度調査状況

仙台市 山田上ノ台遺跡発掘調査

仙台市教育委員会

I 調査要項

遺跡名	山田上ノ台遺跡	調査原因	範囲確認調査
調査地点	仙台市太白区山田上ノ台町	調査主体	仙台市教育委員会
調査期間	令和2年10月1日～28日	調査担当	文化財課整備活用係・調査調整係
調査面積	約40㎡	調査協力	仙台市縄文の森広場

II 山田上ノ台遺跡の概要

山田上ノ台遺跡は、名取川左岸の標高50～55mの台地南端に位置します。昭和55年に宅地造成に伴う発掘調査が行われており、旧石器時代から近世の遺跡であることが分かっています。特に縄文時代に関しては、早期から後期までの土器が出土しており、遺構は中期後半を中心に竪穴住居跡が38軒、貯蔵穴や落とし穴などの土坑が約320基、遺物包含層が3ヶ所発見されています。集落があった当時は、見晴らしの良い台地の縁辺部に数軒を単位とした2つの住居群を設け、その内側は共同の広場とし、住居の周りに貯蔵穴などを配置するという場の使い方をしていただと考えられます。

このように山田上ノ台遺跡は、縄文時代の集落の構造が良好に把握できる遺跡であることから、仙台市は遺跡を保存し、「仙台市縄文の森広場」として整備・活用しています。

III これまでの調査の概要

昭和55年の調査期間中に遺跡の保存が決定したことから、調査範囲の西側については遺構検出にとどめていましたが、平成18年の縄文の森広場開館に伴い、仙台市文化財課では未精査範囲の発掘調査を行うこととしました。以後毎年秋に範囲確認調査を実施するとともに、一般市民を対象とした発掘体験も併せて行っています(第1図参照)。

調査はおもに縄文の森広場西側の遺物包含層を対象として行っています。これまでの調査の結果、大木10式を主体とする多数の土器や石器が見つかったほか、包含層の下部に大小さまざまな石が帯状に密集した配石遺構があることが明らかになりました。見つかった石の中には、石皿やくぼみ石といった石器も混ざっていましたが、その多くは河原石とみられます。山田上ノ台遺跡が立地する台地上には本来存在しない石であり、縄文時代の人々が運んできて帯状に並べ置いたと考えられます。配石遺構の時期は縄文時代中期と考えられ、幅は約1.9～2.5mで、おおよそ東西方向に延びており、これまで見つかった長さで約17mに及びます。



第1図 昭和55年の調査の平面図および平成18年度以降の調査区配置図

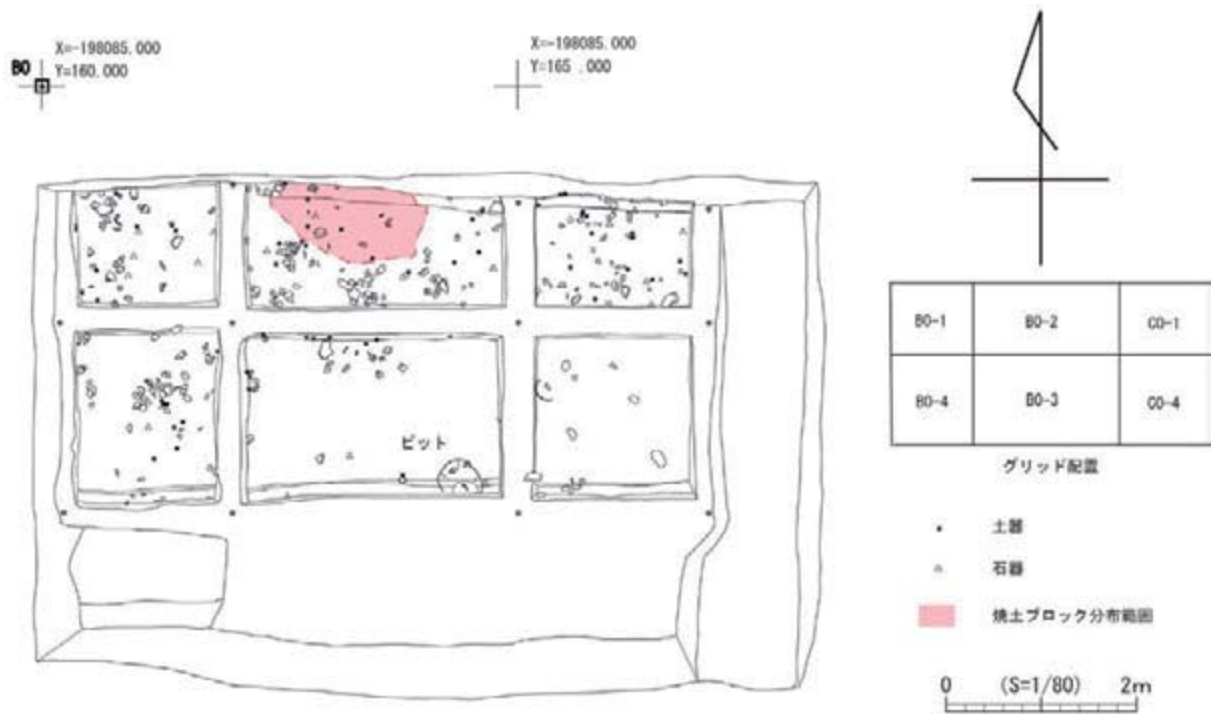
IV 令和2年度の調査成果

今年度の調査は、昨年度に引き続き配石遺構北側の遺物包含層を精査するとともに、包含層の下の遺構の有無を確認することを目的とし、令和2年10月1日～10月28日にかけて実施しました。調査地点は、昭和55年調査西区の北側にあたり、調査区は令和元年度調査区を再度検出するとともに、東側に約2m延長し、約40㎡の調査区で設定しました。

調査の結果、遺物包含層出土のものを中心に、タバコ6箱分程度の土器や石器が出土しました。包含層の上部からは比較的摩滅している土器片が多く出土し、下部から出土した土器には時期が判別できる、残存状況の良好な土器も確認されました。遺物の時期については、周辺の調査区と同様に縄文時代中期末の大木10式が中心であると考えられます。

B0-1、B0-3、B0-4区では、遺物包含層の精査を終了し、遺構の有無を確認したところ、過去の調査で確認された配石遺構等の遺構は認められず、包含層を掘り込んでいるピットが1基検出されたのみでした(第2図参照)。また、B0-2区北側を中心に、遺物包含層中に焼土ブロックの広がりが見られました。焼土は今年度調査区のさらに北側に広がっているものと考えられます。この焼土の性格と、分布範囲を把握するため、今年度の調査ではB0-2区の掘り下げを中断しています。今年度新たに追加したC0-1、C0-4区でも、同様に遺物包含層が確認され、上部の精査を行ったところで今年度の調査は終了となりました。

来年度以降も、継続して範囲確認調査を実施していく予定です。



第2図 令和2年度調査区 遺物包含層中遺物検出状況



写真1 令和2年度調査区 遺物検出状況 (東から)



写真2 遺物包含層中 遺物検出状況 (南東から)



写真3 B0-2区遺物・焼土ブロック検出状況 (東から)



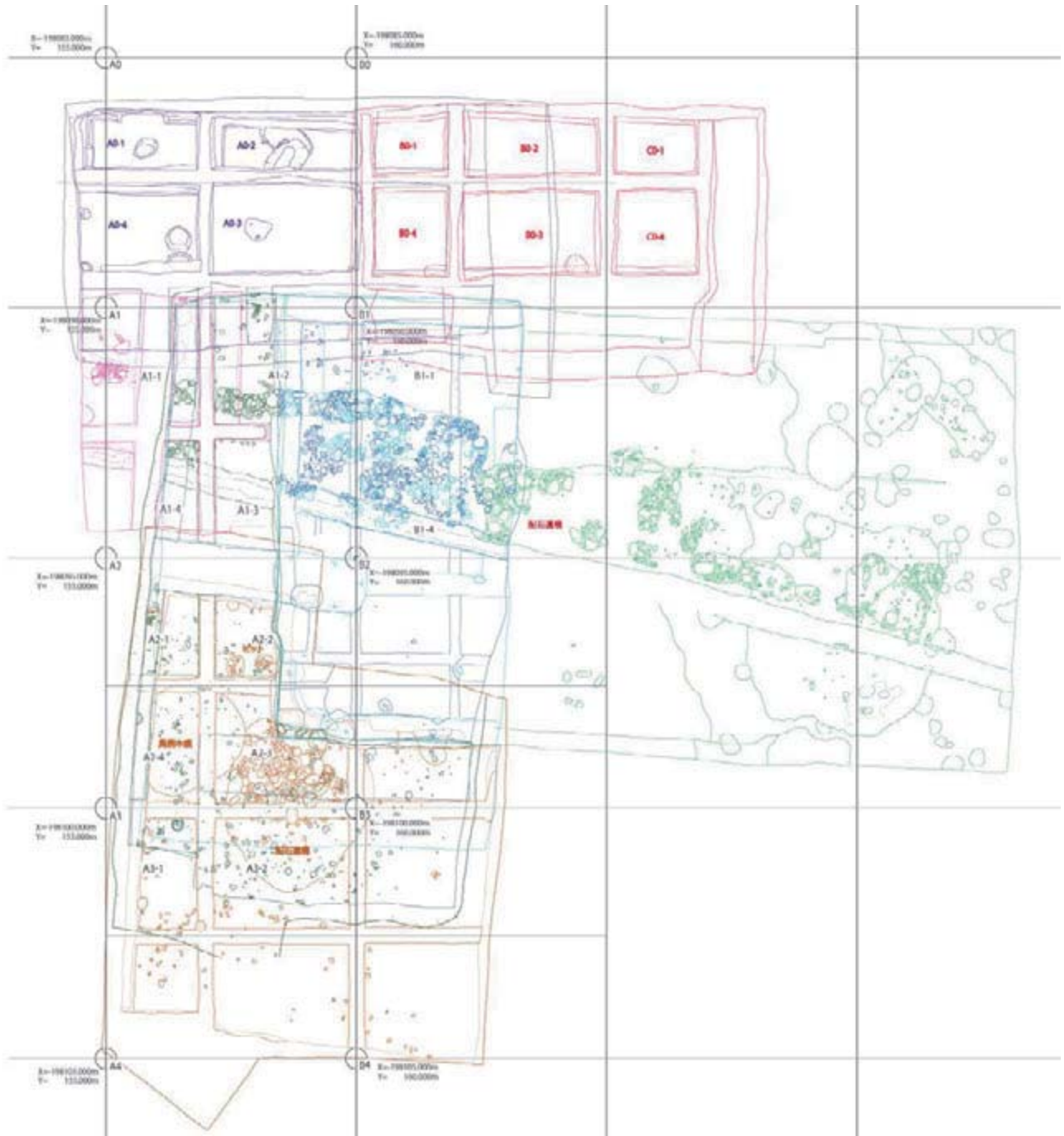
写真4 B0-2区遺物検出状況 (西から)



写真5 C0-1, C0-4区遺物検出状況 (南から)



写真6 B0-3区ピット検出状況 (北から)



第3図 平成20年度以降の調査の平面図(合成) (125分の1)



写真7 H21年度調査区(西から)



写真8 H29年度調査区(北から)

大久保貝塚

宮城県教育委員会

1. 調査要項

所在地：本吉郡南三陸町志津川字大久保

調査原因：水尻川河川災害復旧計画堤防建設
(復興事業)

調査期間：令和元年9月9日～令和2年7月28日

調査面積：150 m²

調査主体：宮城県教育委員会

調査協力：南三陸町教育委員会

調査担当：西村力、山田晃弘、梅川隆寛、須田良平、
古川一明、村田晃一、伊東博昭、佐藤渉、
熊谷亮介（宮城県）、大内望咲（南三陸町）

2. 調査の概要

大久保貝塚は南三陸町志津川字大久保に所在し、志津川湾の湾奥部、水尻川河口南岸に位置する縄文時代晩期を中心とする貝塚です（写真1）。

遺跡では、平成26年度に国道45号線の復旧に伴う確認調査が行われており、水尻川に面する丘陵北斜面に良好な残存状況の貝層・遺物包含層が分布することが分かっていました（図1）。今回、遺跡内に河川堤防建設事業が計画され、貝層・遺物包含層の全域が対象範囲に含まれることから、工事に先立って発掘調査が実施されることとなりました。令和元年5月に貝層・遺物包含層の範囲を知るための確認調査を行った上で、本発掘調査を令和元年9月から令和2年7月にかけて実施しました。

調査区は、貝層・遺物包含層を地形に沿って1区～7区に区分し（図2・3）、貝層の残存状況の良好な2～4区については、可能な限り層を細別して発掘を実施しました。調査では、一部の層を除き、すべての土壌を土嚢袋に入れてサンプル番号を付けて採取しました。土壌サンプルは合計4468袋で、4mm・1mm目の水洗フルイによって、遺物などを回収しました（写真9）。

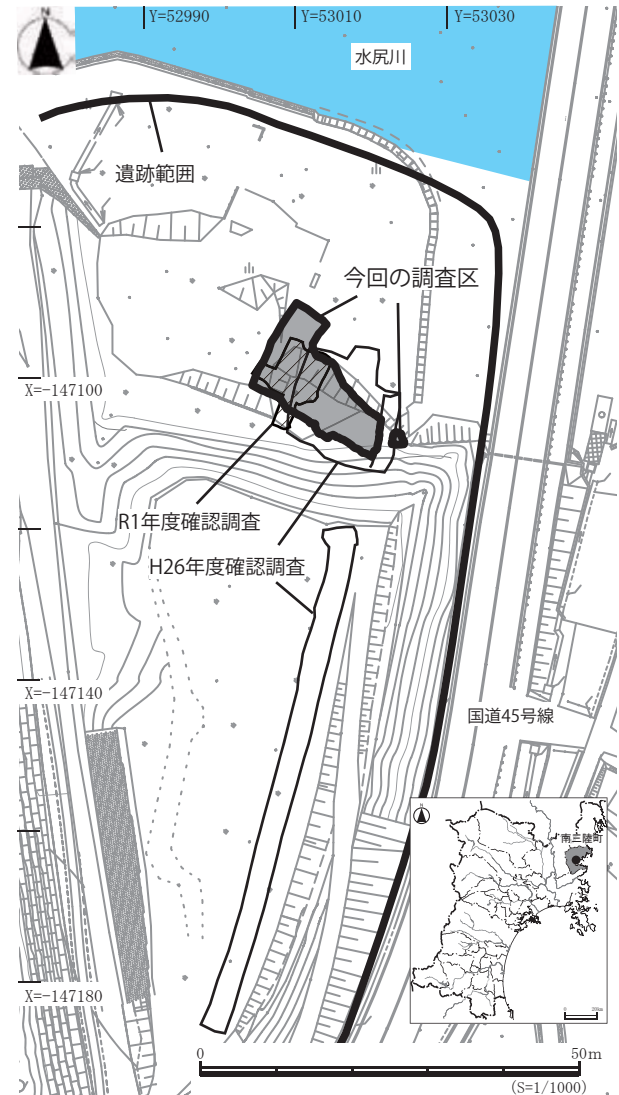


図1. 遺跡範囲と調査区の位置



写真1. 調査区の位置（北東から）



図 2. 調査区平面図 (1)

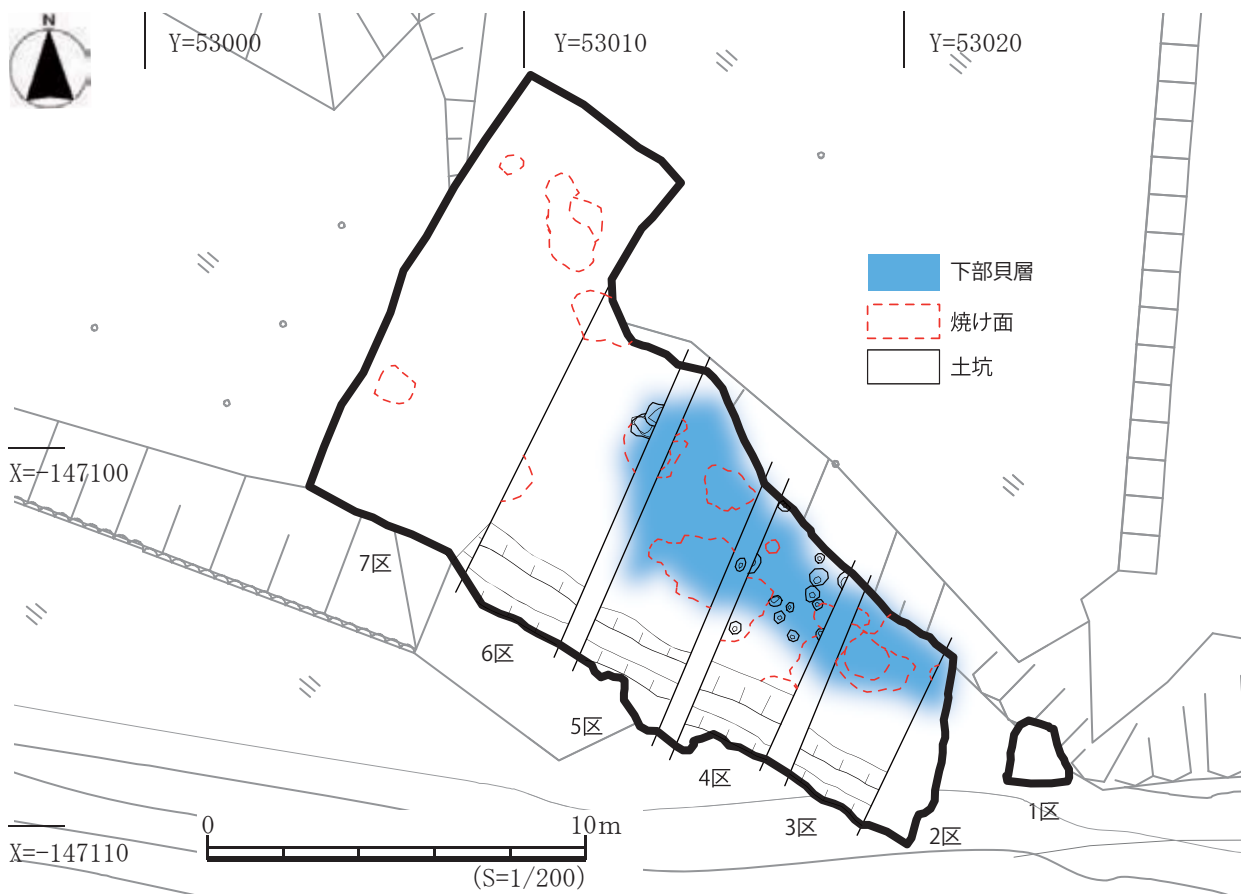


図 3. 調査区平面図 (2)

3. 調査成果

a. 貝層・遺物包含層

東西・南北約 20m にわたって分布しています。厚さは最大で約 1.2m で東側で厚く西側にかけて薄くなっています。後世の攪乱によって北東側は地山まで、西端の 7 区は 5 層までが失われています。堆積層は北に向かって傾斜しており、10 層に大別され細かな特徴の違いによりさらに細分されます(図 4・写真 2)。

貝層は 1～3 層の上部貝層と 7 層以下の下部貝層に大まかに区分できます。上部貝層(図 2)はアサリを主体とし、クボガイ・カキなどを含みます。3 層は土と貝の割合などから 3a～3f 層に区分でき、

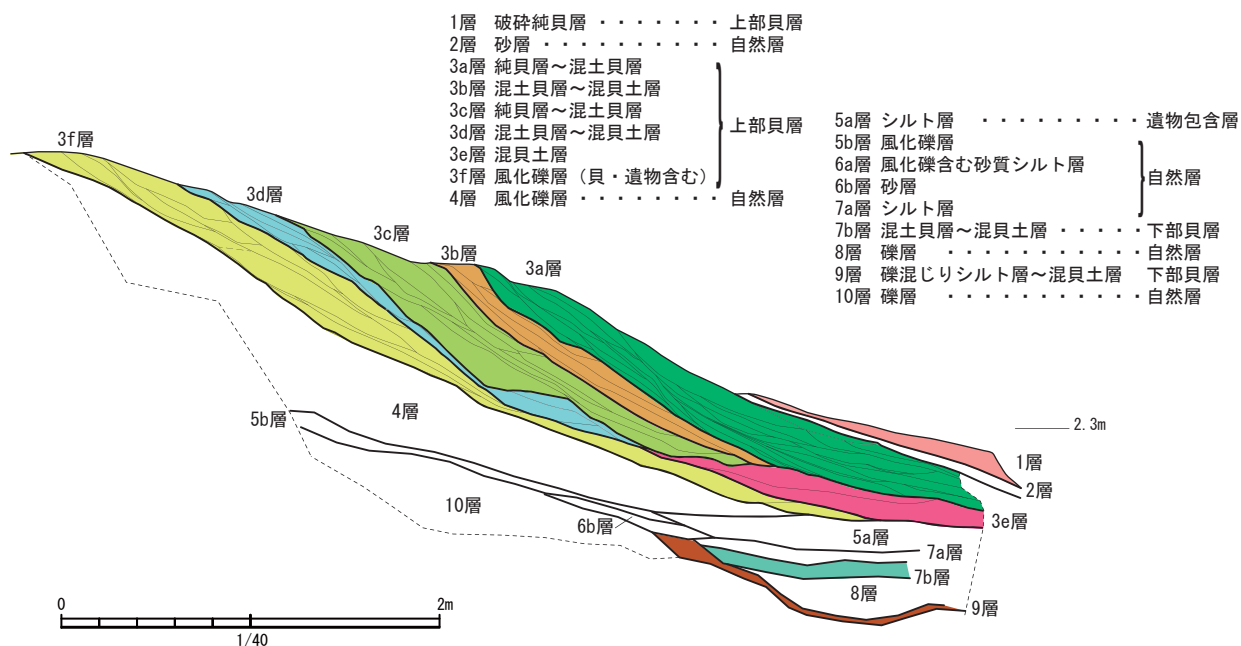


図 4. 3 区東壁南北断面図



写真 2. 3 区東壁南北断面

3c層で貝の割合が最も高くなっています。また、平坦部に堆積する3e層は斜面から流出した土が溜まって形成されたものと考えられます。上部貝層は大量の遺物を含み、特に残存状況の良い2～4区では、構成する貝や土の違いから、径1～2m、厚さ数cm～10数cmの細別層（約120～300層）に分けることができます。この場所がゴミ捨て場として利用されており、食料の残滓や使い終わった道具を当時の人々が廃棄した状態をよく残していると考えられます。出土した遺物の年代から縄文時代晩期中葉～後葉に形成されたものと考えられます。

7b層～9層の下部貝層（図3）はカキを主体としアサリなどを含み、焼けた貝の割合が高いのが特徴です。分布には粗密があり、複数の小さなまとまりに分けることができます。少量の土器が出土しており、縄文時代後期中葉に形成されたものと考えられます。

2層と6b層は均質な砂で、洪水などにより短期間に堆積した層と考えられます。また堆積層中には、岩盤由来の風化礫の角礫が多く含まれますが、6層以下からは徐々に水の影響で角が丸くなった亜円礫～円礫が多くなっていき、10層では円礫が主体となります。堆積が進むとともに徐々に離水していった状況がうかがわれます。

b. 土坑、焼け面など

3区～7区の7b層から10層上面にかけての平坦面で、土坑など15基、焼け面22箇所などを確認しました（図3）。これらの遺構は、7区を除いて下部貝層と概ね同じ範囲から見つかっています。また、埋土の特徴や、下部貝層の貝には焼けたものが多く含まれること、同じ特徴の土器が出土することなどから、これらの遺構と下部貝層は同時期に形成されたものとみられます。砂礫の広がる丘陵下の水辺近くで、火を焚くなどの小規模な活動が繰り返し行われていたとみられます。

c. 遺物

貝層・遺物包含層から、縄文土器・土製品、石器・石製品、骨角器、動物骨、魚骨、貝など、約1200箱が出土しました。上部貝層を中心に^{おおほら}大洞C2式～A式（縄文時代晩期中葉～後葉）の特徴を示す縄文土器が多量に出土しており、完形に近いものも多く含まれます（写真10）。また土面、土偶などの土製品も見られます（写真11）。石器・石製品には、遺跡の近傍で採取可能な粘板岩を用いたものが多くみられ、^{せきぼう}石棒・^{せきとう}石刀などの祭りの道具も出土しています（写真8）。骨角器は篋、ヤスが多く、^{もりがしら}銚頭、^{やじり}釣針、^{せきぞく}鏃なども少量見られるほか、装飾品も多数出土しています（写真12）。動物骨ではシカ・イノシシ・鳥骨が多くみられます。また特筆するものとして、^{ついでつ}石鏃の刺さったマグロやシカの椎骨が出土しており、当時の漁労や狩猟の様子をうかがうことができます（写真14）。他にも外面を^{あんぎん}編布で覆われたアスファルト塊（？）などの希少な遺物も見つかっています（写真13）。

4. まとめ

①縄文時代晩期中葉～後葉にかけて形成された貝層・遺物包含層（ゴミ捨て場）が非常に良好な状態で発見され、全面が調査されました。当時の人々の狩猟・漁労などの生業を知ることのできる良好な資料といえます。

②縄文時代後期中葉に形成された貝層、土坑や焼け面などが発見されました。丘陵下の水辺が小規模ながら繰り返し利用されている様子が明らかになりました。



写真 3. 貝層・遺物包含層検出状況（北東から）



写真 4. 貝層・遺物包含層調査状況（北西から）



写真 5. 5・6区下部貝層分布状況（南から）



写真 6. 5区焼け面検出状況（北西から）



写真 7. クジラ椎骨出土状況



写真 8. 石棒出土状況



写真 9. 水洗フルイ作業風景



写真 10. 縄文土器



写真 11. 土面、土偶



写真 12. 骨角器類

※ (左上) 石鏃と根ばさみは別々に出土したもの



写真 13. 編布で覆われたアスファルト塊 (?)



写真 14. 石鏃の刺さったマグロ (左) とシカ (右) の椎骨

南北原遺跡

加美町教育委員会 名久井 伸哉

1. 調査要項

遺跡名：南北原遺跡
 所在地：加美町上狼塚字南北原 地内
 調査要因：農道改良工事
 調査主体：加美町教育委員会
 調査協力：宮城県教育庁文化財課
 調査期間：令和2年6月1日～11月27日
 調査面積：約630㎡



第1図 遺跡の位置

2. はじめに

南北原遺跡は、大崎平野西端に位置し、加美町中心部から北東に約2km程の河岸段丘上に立地しています。周辺には熊野堂遺跡、菜切谷廃寺跡が存在し、当遺跡から西に約1kmの城生柵跡との関連も指摘されている遺跡です。(第1図)

平成29年度の農道改良工事に伴い、本遺跡と本遺跡南側の西岡遺跡で確認調査が行われました。確認調査の結果、工事予定地の全線で古墳時代中期～古代の竪穴住居跡等が検出されたため、協議を行い平成30年より本発掘調査が実施されることとなりました。

平成30年度・令和元年度の調査(計1040㎡)では、主に弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒、古代の竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡7棟が検出されました。今年度は3次調査に当たり、令和元年度調査地点の南端部より長さ約90m、幅約7mの調査区を設定し、発掘調査を行いました。(第2図)

3. 調査結果

今回の調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒と古代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡4棟が検出されました。(第3図)

【古墳時代中期】

(1)竪穴住居跡

1軒検出されました(SI52住居跡。西辺は調査区外へと延びる)。平面形は方形で、規模は東辺で6.4mを測り、大型です。方向は北から西に25度傾いていました。遺構検出面から床面までの深さは20cmで、全体に黄褐色粘質土(層厚5～7cm)による貼床が施されています。カマドは東辺に付設されており、本体は白色粘質土で構築され、燃焼部底面、両側壁は強く焼けて赤変しています。燃焼部中央部で支脚(自然石)が検出され、その上部には土師器壺が逆さまに据えられていたことから、住居廃絶時に祭祀儀礼を行っている可能性があります。住居跡の南東隅には、上部に蓋の据え方と思われる段差を伴う貯蔵穴が確認されました。遺物は特にカマド・貯蔵穴周辺に集中しており、土師器坏・甕・須恵器2点(蓋坏、ハソウ)。

TK47～208 型式)・ミニチュア土器・石製模造品・黒曜石剥片が出土しました。出土遺物の特徴から、この住居跡は古墳時代中期後半のものと思われます。

【古代】

竪穴住居跡が 10 軒 (SI26・27・29・30・41～46)、掘立柱建物跡が 5 棟 (SB48・49・51・53・54) 検出されました。

(1) 竪穴住居跡

10 軒検出されました。平面形はいずれも方形で、方向は真北から西に 5 度、東に 10 度の範囲内で収まり、ほぼ真北を基調としていると言えます。規模は、最小のもので一辺が 2.4m (SI45)、最大のもので 5.1m (SI27) でした。

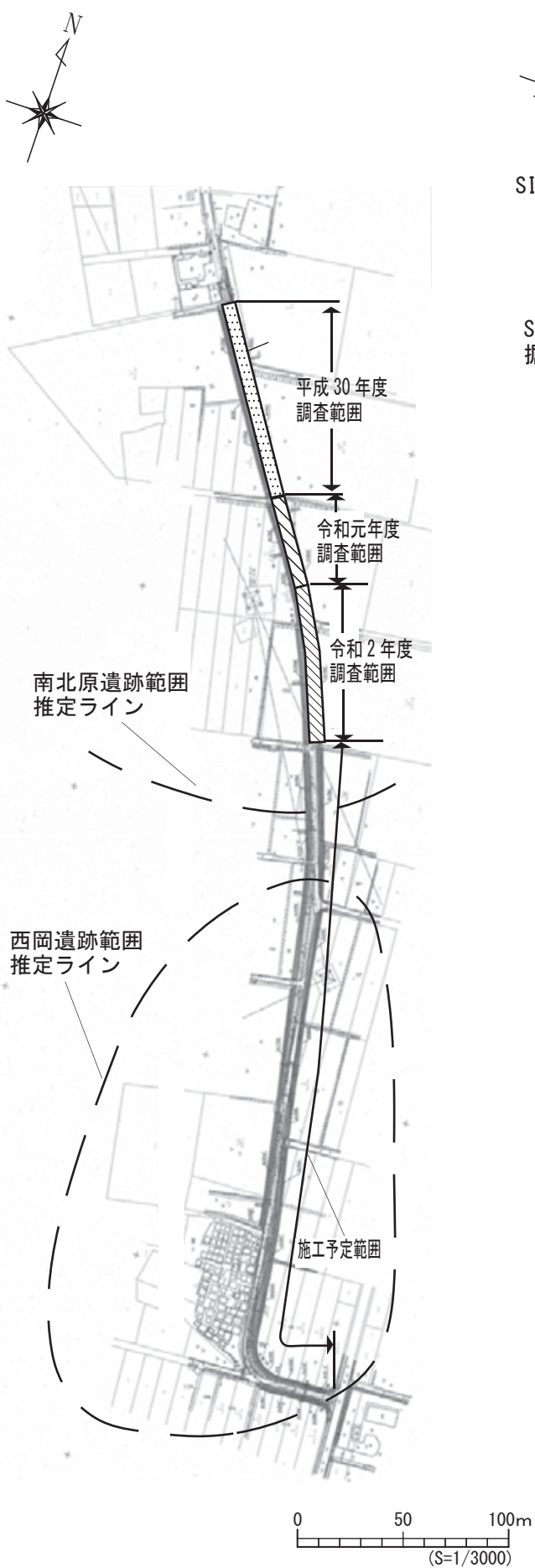
カマドは SI26・27・42 で検出されました。いずれも住居北辺に付設されており、本体は白色粘質土で構築されています。SI42 のみ北辺に 2 時期の煙道、及び東側にもカマド構築材の一部が残存しており、支柱穴も複数の掘方が認められていることから、カマドのつくり換えや住居の建て替えが行われていたと考えられます。また、規模が大きい SI27・42 では、煙道掘方に黄褐色粘質土を貼り付けて補強している状態が確認されており、煙道を丁寧につくっていることがわかりました。遺物は、数は少ないものの土師器、須恵器、鉄製品などが出土しています。これらの住居跡は出土遺物の特徴から、いずれも 8 世紀代のものと考えられます。

(2) 掘立柱建物跡

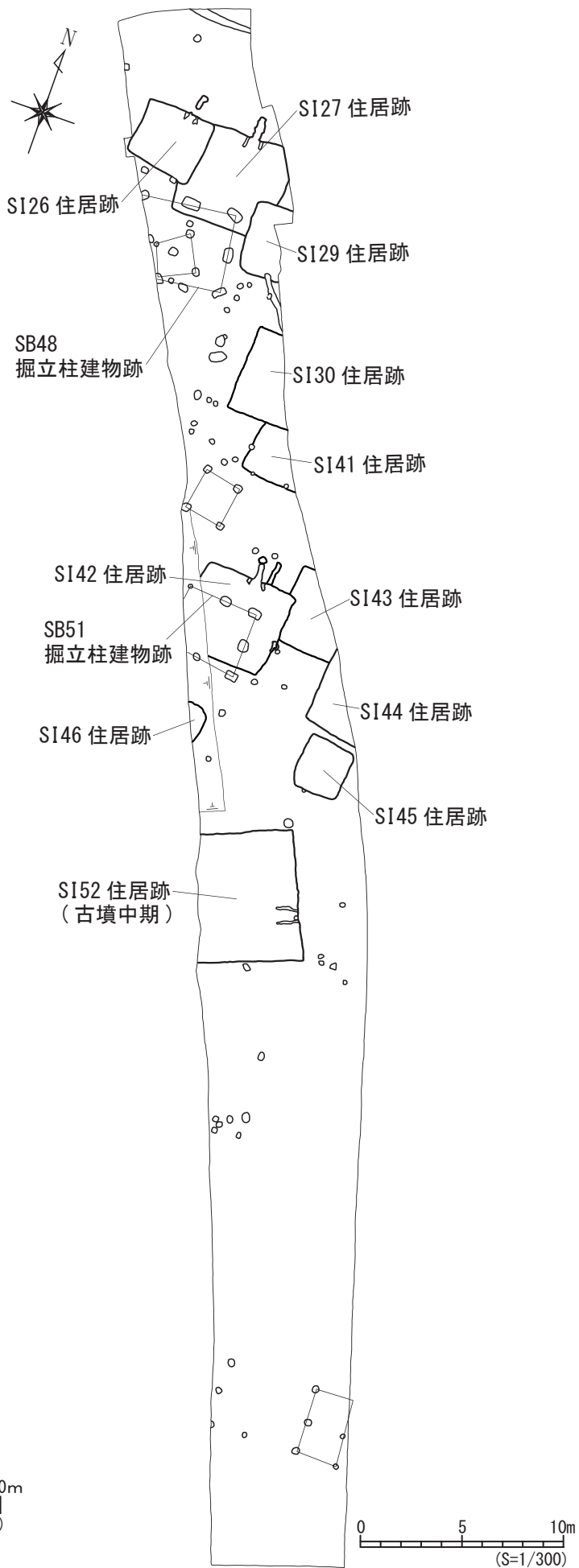
5 棟検出され、その中で 2 間以上の規模を持つものは SB48、51 でした。SB48 は桁行、梁行ともに 2 間で東西 2.3m、南北 2m の建物跡で、建物方向は西に 5 度傾いています。柱穴は 6 個検出され、柱痕跡は全ての柱穴に確認されました。柱穴掘方は一辺 30～40 cm の隅丸方形を基調としています。柱痕跡は径 26～30cm でした。SB51 は桁行、梁行ともに 2 間で東西 1.9m、南北 1.7m の建物跡で、建物方向は東に 5 度傾いています。柱穴は 6 個検出され、柱痕跡は 4 つの柱穴に確認されました。柱穴掘方は一辺 20～65 cm の隅丸方形、不整楕円形を基調としています。柱痕跡は径 16～18cm でした。上記 2 つの掘立柱建物跡は、いずれも 8 世紀前半の竪穴住居跡より新しいものであり、建物方向も真北を基調としていることから、これらの建物跡の時期は 8 世紀後半頃の可能性が考えられます。

4. まとめ

今年度調査の結果、古墳時代中期の竪穴住居跡 1 軒、古代の竪穴住居跡 10 軒、掘立柱建物跡が 5 棟確認されました。SI52 (古墳時代中期) では須恵器を含む多量の土器が出土しました。規模が 6.4m と大型な点も含めて、当該期の集落内における中心的な建物の可能性が考えられます。古代の住居跡は調査区北側～中央部に集中し、ほぼ同一の方向で密集してつくられていることがわかりました。これらの住居跡は 8 世紀代のものとみられることから、近隣に所在する同時期の官衙関連遺跡である菜切谷廃寺跡、熊野堂遺跡との関係をもつ集落であった可能性が伺えます。また、調査区南側は遺構の密度が低くなり、地形的にも低くなっていくため、今回の調査区は当時の集落における生活域の端の部分である可能性があります。



第2図 調査区位置図



第3図 遺構配置図



調査区北半遺構検出状況(南から)



SB48 検出状況(東から)



SI52 遺物出土状況(西から)



SI52 カマド燃焼部検出状況(西から)



SI27 床面検出状況(南から)



SI27 カマド煙道半裁状況(東から)



SI42 床面検出状況(南から)



SI42 カマド煙道断面状況(南から)

仙台市 ながまちえきひがし 長町駅東遺跡 第14次発掘調査

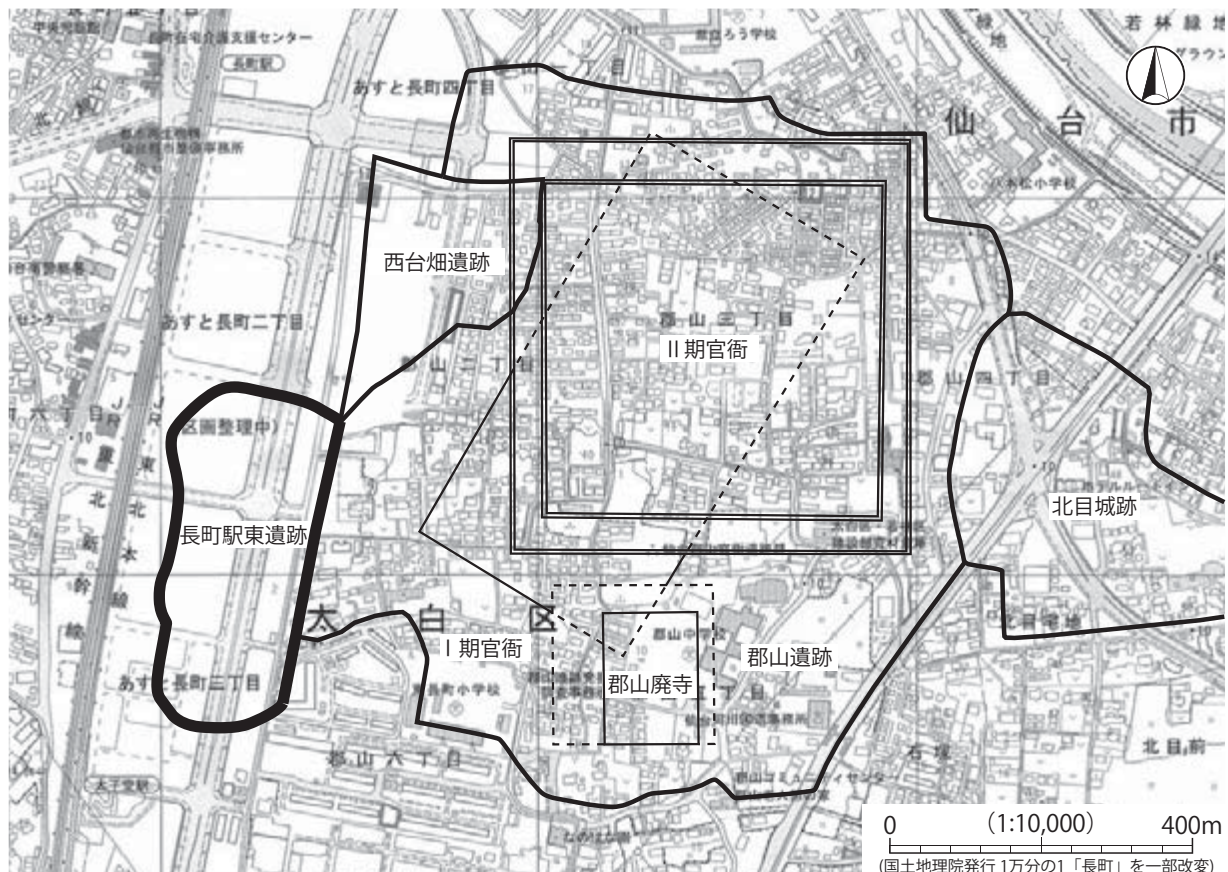
仙台市教育委員会

1. 調査要項

遺跡名 長町駅東遺跡（宮城県遺跡登録番号 010449）
 調査地点 仙台市太白区あすと長町3丁目
 調査期間 令和2年5月7日～令和3年3月（予定）
 調査面積 約4,500㎡
 調査原因 店舗建設
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査指導係
 三浦一樹 工藤信一郎
 株式会社シン技術コンサル

2. 遺跡の位置と概要

長町駅東遺跡は仙台市太白区あすと長町にあります。遺跡の北約1.2kmには広瀬川、南約1.5kmには名取川が流れています。遺跡北東側には西台畑遺跡にしだいばたけ、東側には郡山遺跡こおりやまが隣接しています。



第1図 長町駅東遺跡と周辺の遺跡

遺跡は標高 10 m 前後の郡山低地東側の自然堤防と後背湿地上に立地しています。

長町駅東遺跡ではこれまで 13 次にわたる調査が行われています。その結果、7 世紀中頃から 8 世紀初め頃を中心とする竪穴住居跡が 350 軒近く発見されました。これらの竪穴住居跡は、西台畑遺跡で発見されている集落とともに、郡山遺跡の古代の役所（郡山 I・II 期官衙）の造営や運営に関わりのある人々の集落と考えられています。

また、弥生時代の竪穴住居跡や土器埋設遺構、土墳墓^{どこうぼ}、水田跡も発見されており、当時の集落の様相を考えるうえで非常に重要な遺跡です。

3. これまでの調査の概要

長町駅東遺跡ではこれまで 13 次にわたる発掘調査が行われ、特に古墳時代から飛鳥・奈良時代の竪穴住居跡が数多く発見されています。これらの竪穴住居跡は、第 5・6・7・9 次調査で発見された大規模な河川跡よりも北東から東側の、やや標高が高い位置に造られていたことが分かっています（第 2 図）。

また、古墳・飛鳥・奈良時代の集落よりも古い時期の遺構・遺物も発見されています。これまでの発掘調査では縄文・弥生時代の様相を探るための下層調査も行っており、私たちが生活している地表面下約 3.0～5.0 m の土層から縄文時代前期・後期・晩期の土器が出土したことから、当時の人々がこの地で生活していたことが分かりました。

さらに、弥生時代中期の竪穴住居跡や土器埋設遺構・土墳墓^{どこうぼ}、水田跡も発見されています。竪穴住居跡は遺跡中央北部で 1 軒発見されました。このほかに竪穴住居跡の可能性のある遺構も数基ありますが、新しい時代の遺構に壊されている場合が多く、その詳細は不明です。土器埋設遺構と土墳墓は合わせて 10 基発見されています。竪穴住居跡に近接する場所や、北西側で発見されています。出土土器のなかには福島県の会津地方の土器に類例が求められる資料も出土しており、当時の交流の様子がうかがえます。水田跡は竪穴住居跡の北側に広がっています。仙台平野において当時の居住域や墓域、生産域がまとまって見つかった例として大変貴重です。

長町駅東遺跡の古墳時代から飛鳥・奈良時代は、概ね 1 期から 6 期に分けられています（表 1）。

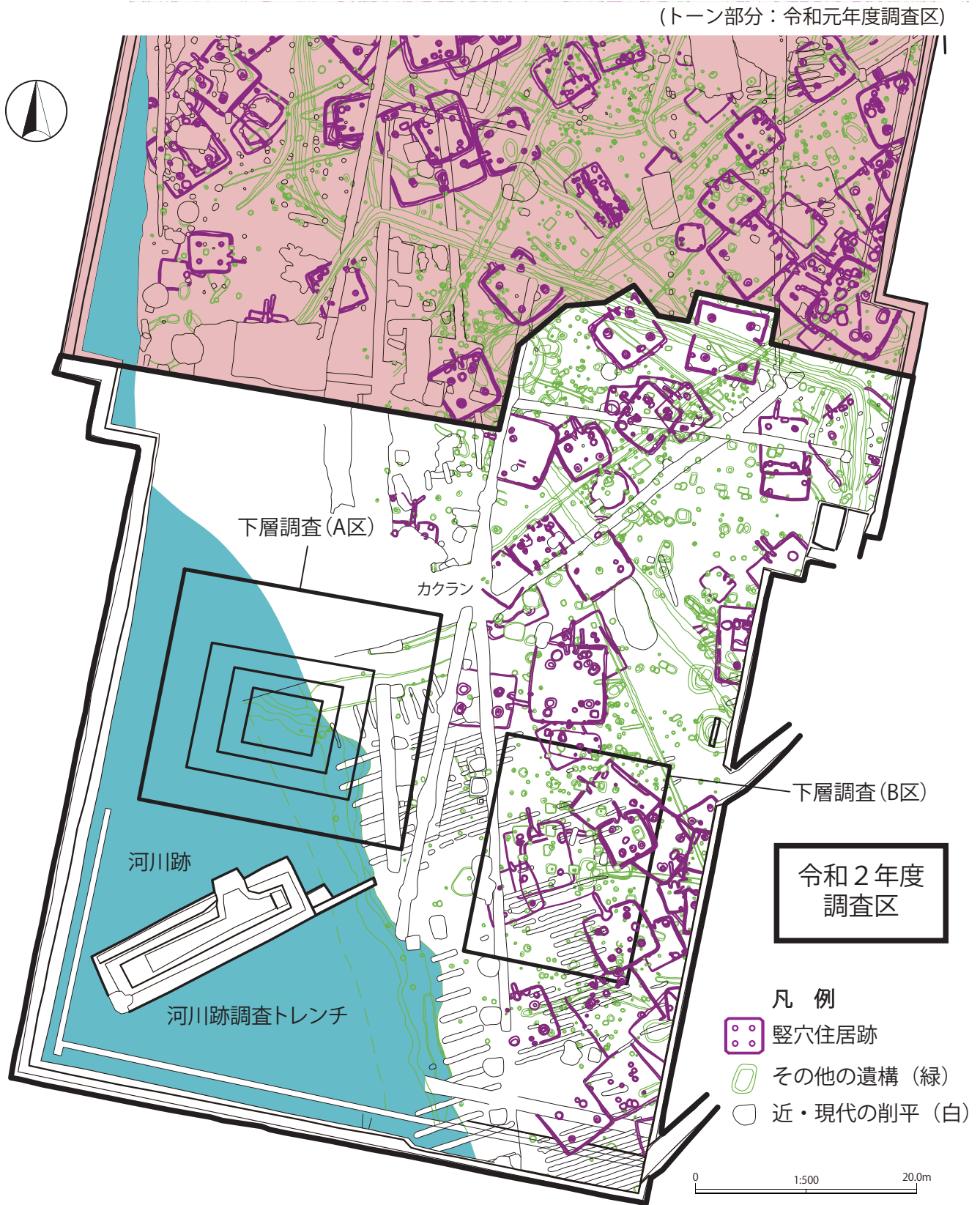
1 期の竪穴住居跡は第 6・9 次調査で発見され、遺跡南側にある河川跡の近くに数軒認められます。2 期は 1 期と同様の場所に竪穴住居が造られますが、遺跡北側にも数軒認められるようになります。3 期は 2 期と同様、遺跡北・南側に竪穴住居が造られますが、北側において竪穴住居

1 期	5 世紀中頃～末頃
2 期	6 世紀初め～末頃
3 期	7 世紀初め～前半
4 期	7 世紀中頃～後半
5 期	7 世紀末頃～8 世紀初め
6 期	8 世紀前半～

表 1 長町駅東遺跡の竪穴住居跡の時期区分



第2図 長町駅東遺跡過年度調査区合成図



第3図 長町駅東遺跡第14次発掘調査平面図(令和2年度調査区)

跡が増加する傾向がみられます。また、掘立柱建物跡や区画施設と考えられる柱列跡も見つかっています。

4期は遺跡東側に隣接する郡山遺跡で見つかった役所（郡山Ⅰ期官衙）の造営・運営時期にあたります。この時期になると竪穴住居跡が増加し、遺跡全体に分布するようになります。この集落の北東側は大規模な溝と材木列により区画されており、南側も河川に沿って造られた材木列で区画されています。

5期は郡山Ⅱ期官衙期にあたります。4期に引き続き竪穴住居跡が多く分布しています。4期に造られた集落北東側を区画する溝や材木列は、5期の終わりにむかって徐々に機能が失われていったことが分かっています。

6期になると竪穴住居跡が大幅に減少していきます。これは郡山Ⅱ期官衙の機能が多賀城へ移されることに伴った現象と考えられています。この時期以降、竪穴住居跡は少なくなりますが、小溝状遺構群が確認されることから、この地域は居住域から生産域（耕作地）として利用されたと考えられます。

以上のように長町駅東遺跡は大規模な集落遺跡であり、隣接する西台畑遺跡や郡山遺跡とも関係が深い遺跡であることが分かっています。

4. 今回の調査の概要

今回の調査地点は長町駅東遺跡で見ついている集落の中心部にあたります（第2図）。今年度の調査では、現在のところ48軒の竪穴住居跡が発見されています（第3図）。これらの多くは2軒以上重なってみつかっています。これまでの調査では最大13軒の竪穴住居跡が重なっている例もありました。竪穴住居跡以外にも掘立柱建物跡や溝跡、土坑などが数多くみつかっています。

出土遺物は収納箱で60箱以上出土しています。土師器や須恵器が多く出土しており、弥生土器や縄文土器も少量出土しています。

今年度は古代の集落跡の調査の他に、集落のすぐ西側に流れていた河川跡の調査と縄文・弥生時代の様子を探るための下層調査も行いました。その結果、この河川跡は弥生時代の遺物を含む

層を壊し、北西－南東方向にやや蛇行しながら流れていたことが分かりました。河岸の調査では、土師器・須恵器や切子玉などの石製品が出土しました。

また、下層調査（B区）で、異なる河川跡が縄文・弥生時代の層を一部壊しながら流れていたことを確認しました。なお、両時代の遺構は2つの下層調査区からは確認されませんでした。今から約4,300年～3,400年前の縄文時代後期の土器が多くみつかっています。

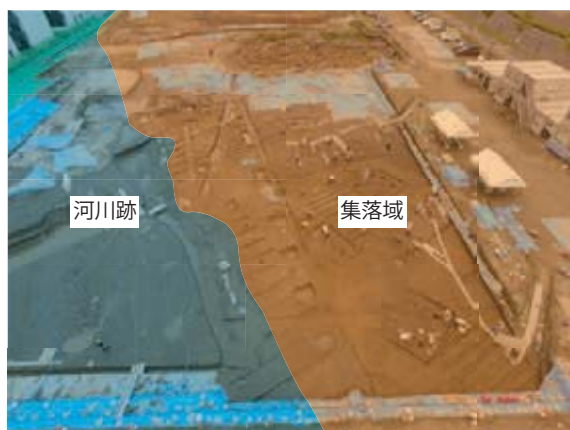


写真1 河川跡と集落域（南から）



写真2 SI540 完掘状況 (南東から)



写真3 SI540 カマド近景 (南東から)



写真4 SX54 完掘状況 (西から)



写真5 SB52 完掘状況 (東から)



写真6 下層調査の様子 (南から)



写真7 出土遺物 (土師器)



写真8 出土遺物 (須恵器)



写真9 出土遺物 (縄文土器)

原遺跡第5次調査の概要

岩沼市教育委員会

1. 調査要項

所在地	岩沼市南長谷字北上・上原地内
調査原因	重要遺跡範囲内容確認調査
調査指導	原遺跡調査検討委員会
調査期間	令和2年7月16日～11月中旬
調査面積	I区(第16地点) 538 m ² II区(第17地点) 366 m ² 計 904 m ²
調査主体	岩沼市教育委員会(生涯学習課)
調査協力	宮城県教育委員会 多賀城跡調査研究所

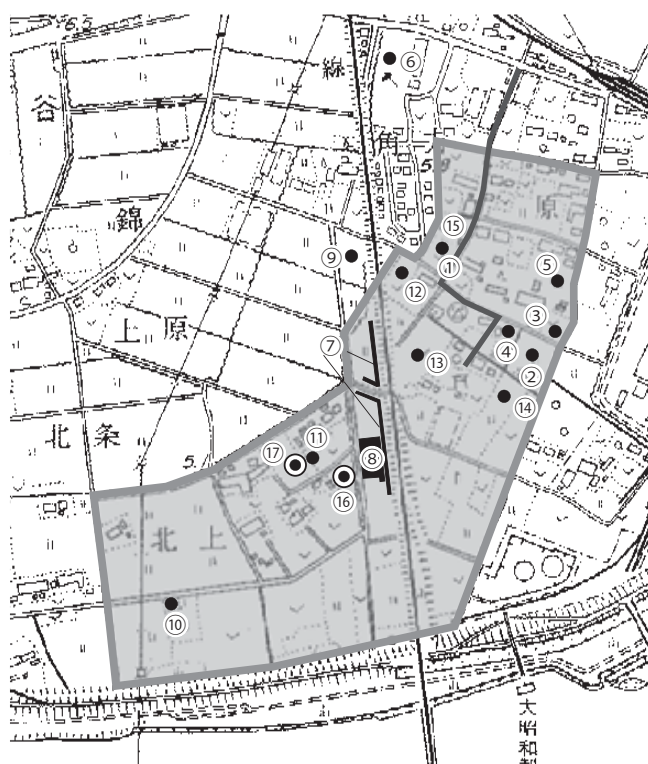
2. 遺跡の位置と歴史環境

原遺跡はJR岩沼駅の南方約3.2kmに位置し、岩沼市南長谷字原・上原地内に所在します。遺跡範囲の中央にはJR常磐線が南北に通っていますが、この常磐線を挟んだ東西の標高は5m前後と大差がなく、阿武隈川左岸に形成された南西-北東方向にのびる自然堤防上で遺跡が営まれています。この地域は『和名類聚抄』の記載にある陸奥国名取郡の中の玉前郷に含まれると考えられています。また10世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』の東山道陸奥国に設置された駅家である玉前駅家、さらには多賀城跡より出土した9世紀代と推定されている木簡にみえる「玉前割」もこの地域内に存在が比定されてきました。

平成16年に発見された原遺跡では、これまでに17地点で調査が実施されています。圃場整備事業に伴って実施された平成28年度の調査(第7地点)は、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴、竪穴建物、溝、土坑など多数の遺構を確認し、また6世紀後半～9世紀後半にかけての遺物を多数発見しています。中でも7世紀後半頃に美濃地方で作られたと考えられる須恵器の円面硯の出土は、この時期に文字を扱うことが可能な人物が当地に所在していた



第1図 原遺跡と周辺の遺跡



第2図 原遺跡内の調査地点

ことを示すこととなり、遺跡内に官衙的な施設が設置されていた可能性を強く示すものとなりました。さらに平成 29・30 年度に実施した第 2・3 次調査（第 8 地点）では、大別して 3 時期の遺構群が発見され、8 世紀前半から後半の時期である II 期の遺構群では、梁行 3 間（約 7 m）、桁行 10 間（約 20 m）を数える長大な掘立柱建物である SB01 と SB02 が発見されたことが注目されています。また、8 世紀前半以前の遺構群である I 期では、SA01 材木塀と SD11 大溝を確認しています。令和元年度には第 12 地点で幅 5.5 m 以上の大溝や竪穴建物、第 4 次調査（第 13 地点）では 9 世紀代の掘立柱建物群や 6 世紀後半から 9 世紀前半にかけてつくられた竪穴建物などが発見されています。

3. 第 5 次調査（第 16・17 地点）の調査成果概要

第 5 次調査では、古代の掘立柱建物跡 5 棟、竪穴建物跡 15 軒、井戸跡 2 基、大型土坑 4 基、溝跡 6 条などの遺構が発見されています。以下に今回の調査で発見された主要な遺構をみていきます。

【掘立柱建物跡】

SB01 I 区で発見された桁行 4 間（約 7.9 m）、梁行 3 間（約 5.3 m）の南北棟です。建物の主軸は、第 3 次調査で発見された大型建物と同様に真北を強く意識してつくられています。7 世紀末葉～8 世紀初頭とみられる SI07 より新しく、9 世紀前葉頃の SI10・SI11 より古いこと、出土した須恵器杯の年代観から 8 世紀半ば頃につくられたと考えられます。



SB01 掘立柱建物跡（北から）

【竪穴建物跡】

SI01 I 区西側に位置します。SD01 南北溝より古い時期のものです。カマドは北壁中央につくられ、床面は褐色粘土と黒色粘土を用いた貼床です。周溝はカマド以外の全面に巡るとみられます。床面



I 区で発見された主な遺構の配置

では支柱穴を2穴確認しています。出土した土師器坏・甕などの年代観から7世紀末葉～8世紀初頭につくられたとみられます。

SI02 I区北側に位置しています。カマドは北壁中央につくられ、床面は褐色粘土と黒色粘土を用いた貼床です。周溝はカマド以外全面に巡るとみられます。床面では支柱穴を2穴確認しています。カマド前面より土師器甕・甑・壺が完形で出土しており、これらの年代観から7世紀末葉～8世紀初頭につくられたとみられます。なお、カマドは奥壁を若干掘り込んで構築しています。

SI07 I区中央に位置しています。SB01掘立柱建物跡より古い時期のものです。カマドは北壁中央につくられ、床面は褐色砂質土と黒色粘土を用いた貼床です。南側の床面には白色粘土塊が存在し、また建物中央の床面付近には葦とみられる炭化材が集中して出土しています。出土した土師器甕などの年代観から7世紀末葉～8世紀初頭につくられたとみられます。

SI10 I区中央南側に位置しています。SB01掘立柱建物跡より新しい時期のものです。カマドは北壁東寄りにつくられ、床面は褐色粘土と黒色粘土を用いた貼床です。遺物は土師器坏などが少量出土しており、これらの年代観から9世紀前葉につくられたとみられます。なお、カマドは奥壁をやや大きく掘り込んで構築しています。

SI16 II区南西隅部に位置しています。東側と南側は調査区に広がるため全体の形状・規模は不明ですが、カマドは北壁中央につくられたとみられます。床面は褐色粘土と黒色粘土を用いた貼床で



SI16 竪穴建物跡カマド付近の状況（南から）



SI17 竪穴建物跡から出土した猿投産の製品



II区で発見された主な遺構の配置

す。床面からは東海産のフラスコ形瓶やカマドの両脇より土師器甕が完形で出土したほか、カマドでは逆位に配置した土師器甕を芯材として用いています。これらの年代観から7世紀後半頃につくられたとみられます。

SI17 II区南部に位置しています。カマドは北壁中央につくられ、床面は褐色粘土と黒色粘土を用いた貼床ですが、多少の凹凸があります。床面上から猿投産フラスコ形瓶や土師器甕が出土しており、土師器甕の年代観から7世紀後半頃につくられたとみられます。

【井戸跡】

SE01 I区東側に位置しています。SB01、SI11より新しい時期のものです。SI11と完全に重複していることから、建物が廃絶してからすぐに井戸を掘削した可能性が考えられます。井戸跡の上部の掘方は直径250cmの円形ですが、内部の掘方は方形を呈していません。SE01からは時期を特定できる遺物は出土していませんが、SI11の煙道部から出土した土師器坏の年代観から9世紀前葉以降につくられたとみられます。



SI11 竪穴建物と SE01 井戸跡（東から）

【大型土坑】

SK01 I区中央部東寄りに位置しています。SI04、SD08より新しい時期のものです。掘方は一辺310cmの隅丸方形で、断面形状は箱状となっています。確認面より90cm下では褐色粘土を主体とした貼床が存在し、南北方向に根太木を設置したとみられる痕跡が70～90cmの間隔で確認されました。また、根太木の壁側には杭が打ち込まれています。出土した土師器坏の年代観から9世紀半ば頃につくられたとみられません。



SK01 大型土坑（南から）

SK05 I区東側に位置しています。SK03より古い時期のものです。東側は調査区外へ広がるため全体の規模は不明ですが、平面形は楕円形であるとみられます。確認できた範囲での短軸は550cm、断面形状はU字状で、確認面からの深さは150cmを測ります。堆積土の状況から長期間開口していたとみられます。下層付近で出土した土師器坏の年代観から8世紀前葉につくられたとみられます。なお、同様の遺構としてはSK09があります。



SK05 大型土坑（西から）



SK05 大型土坑（西から）

【溝跡】

SD01・07・09・11 I区西部で南北に延びるSD01、I区北東隅部で東西に延びるSD07、そしてII区中央部で東西に延びるSD09は、いずれも規模や断面形状から一連の遺構であるとみられます。これらの溝の特徴としては、底面に溝を掘った時の痕跡である凹凸が遺されていることがあげられます。第1・3次調査でもこの溝につながるとみられる東西溝を発見しており、土地を区画を目的としてつくられたと考えられます。またII区北側から西側へ16mにわたって確認されたSD11も短期間で埋められたと考えられることから、同様に敷地内を区画するために掘られたと考えられます。出土した土師器坏、須恵器坏などの年代観から、これらの溝は9世紀前葉につくられたとみられます。なお、SD01からは墨書のある須恵器坏が出土しています。



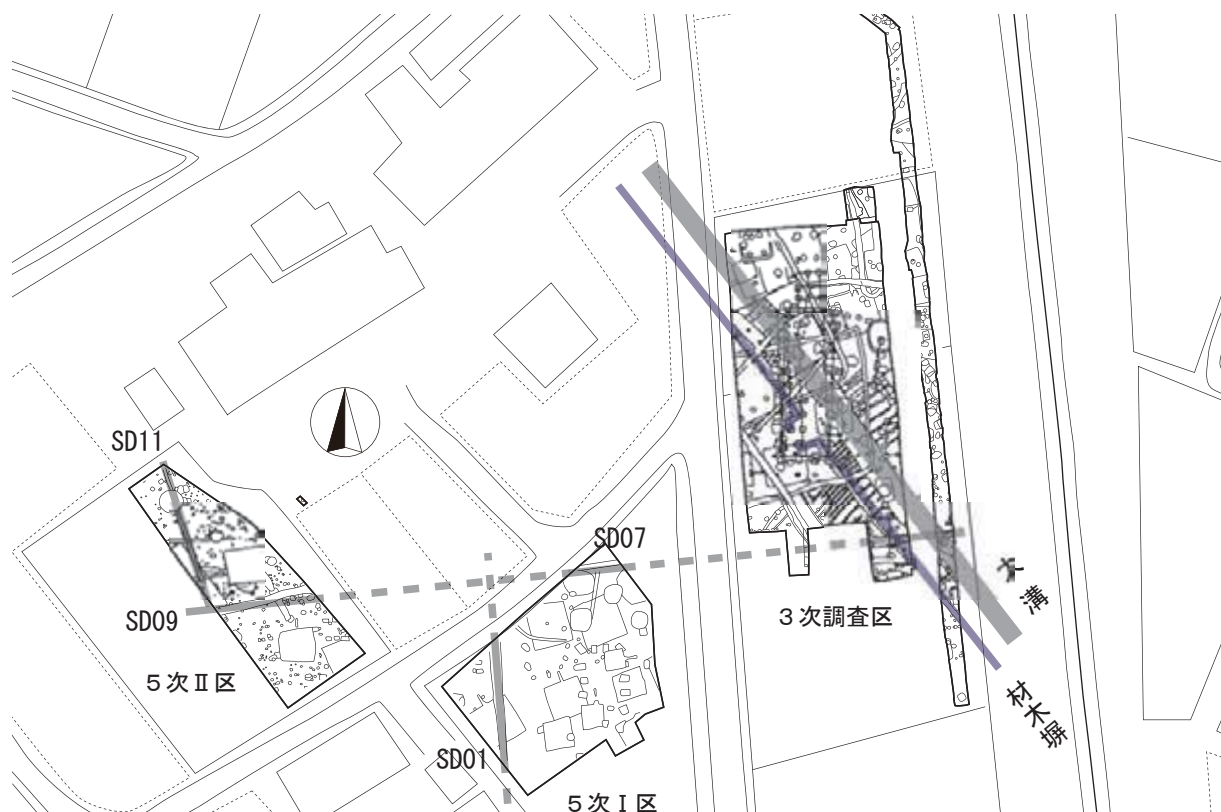
SD01 溝跡 (南から)



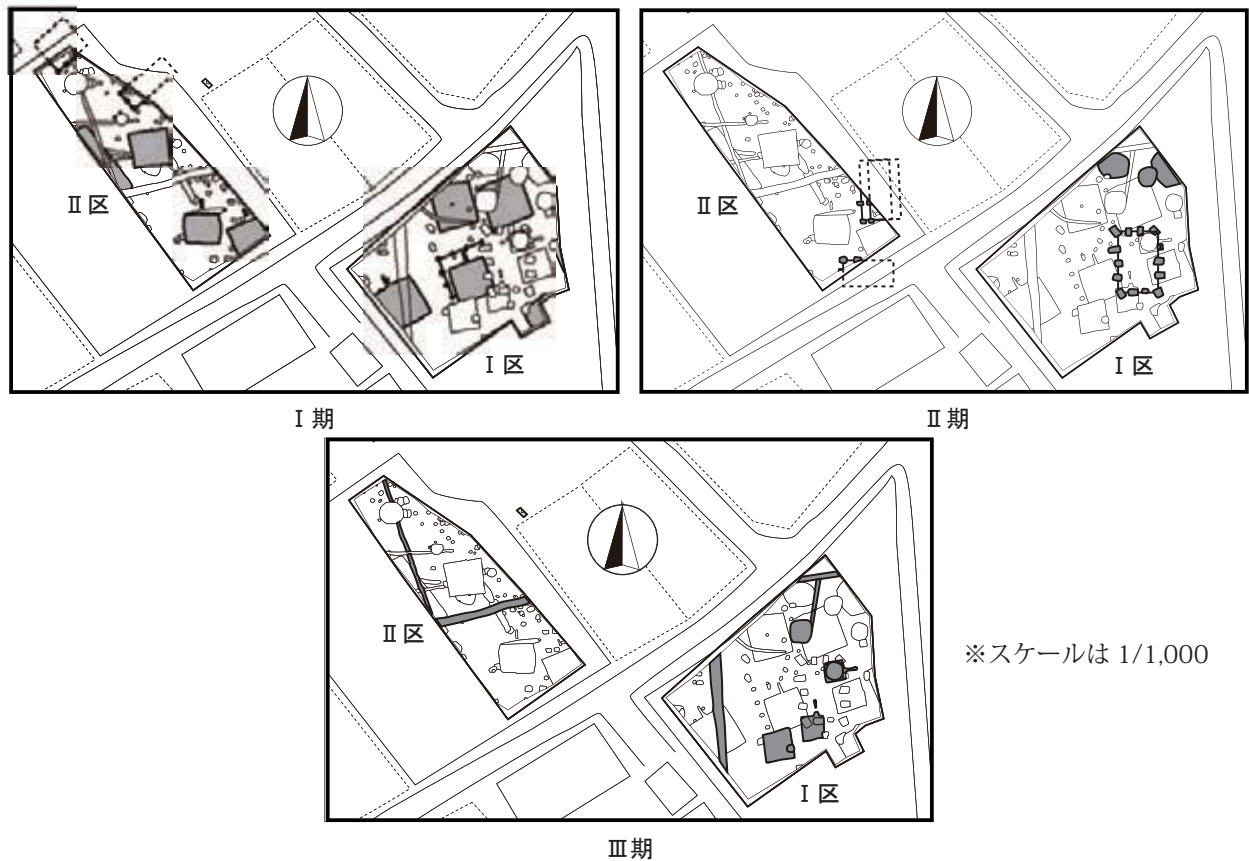
SD07 溝跡 (東から)



SD01 溝跡から出土した墨書土器



原遺跡で発見された区画の可能性ある溝跡と、材木塀・大溝 (1/1,000)



第5次調査で発見された遺構の変遷

4. まとめ

これまでのところ、第5次調査ではI期・7世紀末～8世紀初頭、II期・8世紀前～後葉、III期・8世紀末葉～9世紀半ば頃と、大別すると3時期の遺構群が確認されました。

各時期の遺構の構成を概観すると、I期はSI01・02・07・13・16・17 竪穴建物などで構成されています。これらは真北よりも若干西側へ振れていることが共通しています。なお、II区西側で発見されたSI19は一辺が10mを測るもので、第3次調査で発見された材木堀や大溝と同様の主軸を有しています。II期はSB01 掘立柱建物とSK02・05・09の大型土坑で構成されています。今回の調査で確認されたSB01は、第3次調査で確認された大型掘立柱建物と同様に真北方向を強く意識してつくられ、またII区でも部分的な確認ではありますがSB02が真北方向、あるいは直交方向となるとみられることから、8世紀代の官衙的な遺構が第3次調査区より西側へ広がることが判明しました。ただし、同時期に長期間に渡って開口していたとみられるSK05・09が存在していることも明らかとなり、大型土坑の用途も含め、場の性格や空間構成については今後さらに検討が必要です。III期はSI10・11の竪穴建物とSD01・07・09 溝跡、SE01 井戸跡、そしてSK01の大型土坑などで構成されます。竪穴建物はI期のものとは比べると小型化しています。区画溝と考えられるSD01・07・09は、底面に開削時の工具痕がみられることから、長期間の開口ではなく、つくられてから短期間のうちに埋め戻された可能性もあります。なお、SK01は底面の観察から床板が貼られていたとみられ、物資などを貯蔵する倉として使用された可能性があります。

遺物の面では湖西窯をはじめとする東海諸窯と、猿投窯で生産された2つのフラスコ形瓶が、異なる竪穴建物内から出土したことが注目されます。これらの製品は岩沼市内で7世紀半ばから後半にかけてつくられた各横穴墓群からも出土しており、7世紀後半段階でこれら遠隔地の製品を入手できる人々が原遺跡内に居住し、埋葬のための施設として市内各所に横穴墓をつくった可能性がさらに高くなりました。

多賀城跡 第94次調査

宮城県多賀城跡調査研究所

調査要項

所在地：多賀城市市川字大畑地内

調査指導：多賀城跡調査研究委員会

(委員長 佐藤 信)

調査主体：宮城県教育委員会

(教育長 伊東昭代)

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所

(所長 高橋栄一)

調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：高橋栄一・白崎恵介・

村上裕次・初鹿野博之・

高橋 透・下山貴生

調査期間：令和2年5月21日～

11月13日

調査面積：約570㎡



写真1 多賀城跡と調査区の位置（南西から）

1 はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、昭和44年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態解明に向けた研究を進めています。令和2年度は、多賀城市が多賀城創建1300年記念の一環として多目的広場の整備を予定している多賀城政庁北側の政庁地区北方を対象に、第94次調査を実施しました(写真1、第1図)。

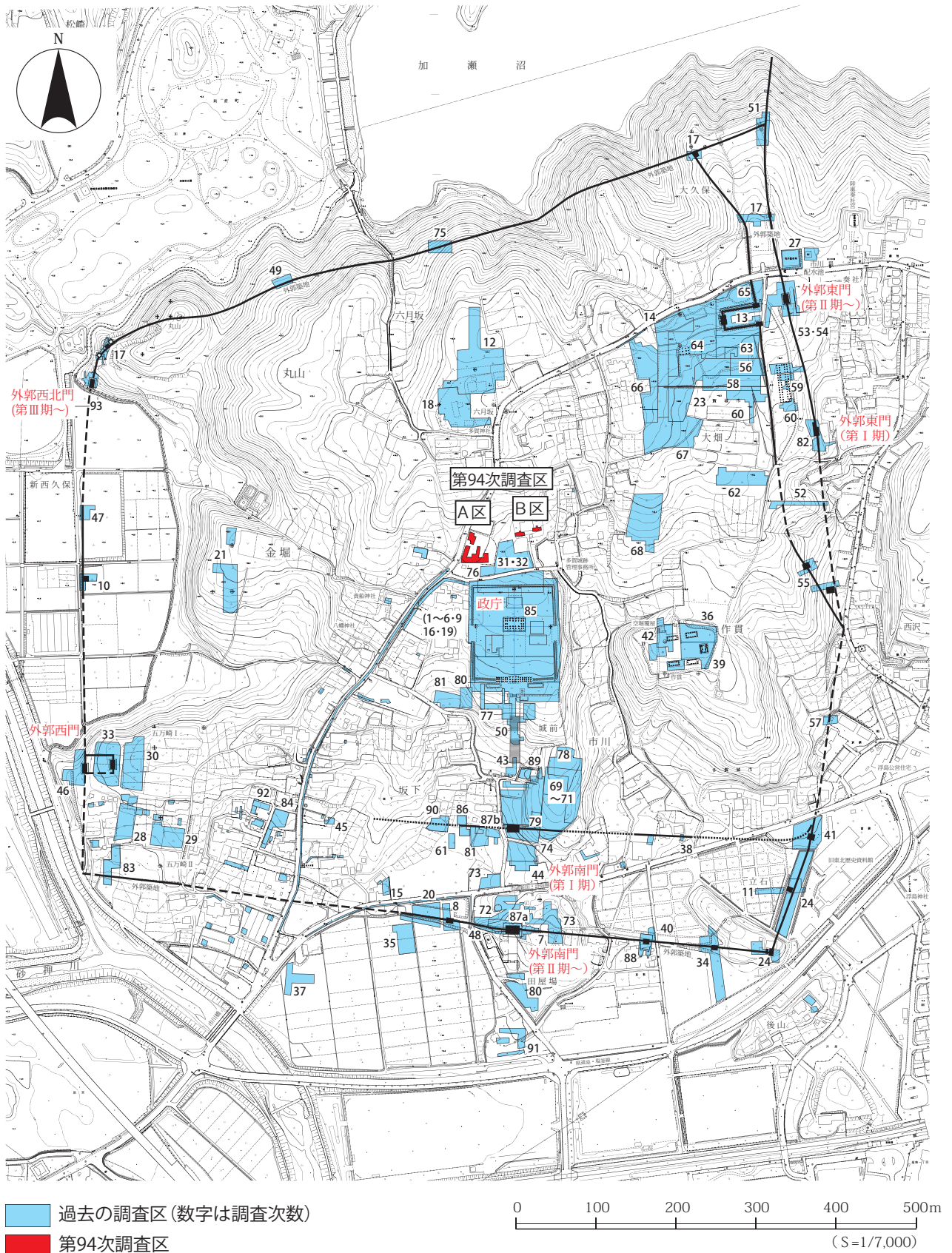
政庁地区北方の調査は、これまで政庁の北側隣接地を中心に4次にわたって行われています(第2図)。その結果、政庁第Ⅲ期(780～869年)以降に掘立柱建物や竪穴建物などの遺構が確認されるようになること、政庁第Ⅳ期(869年～11世紀前半)には、政庁と一体的に機能した大型の掘立柱建物群「政庁北方建物」が認められるなど、政庁地区北方は政庁と密接な関係を持つ地区であることが判明しています。そこで、今回の調査では、これまでに調査が行われた地点よりもさらに北側の範囲を対象に、遺構の分布や構成等の把握を目的としています。

2 調査成果

調査地点はA区とB区の2ヶ所で、政庁正殿から北に約90～110mの位置にあります(写真2、第2図)。A区は政庁北側の東から西に入る深い沢に面した丘陵上に、B区は丘陵から沢に向かう南斜面に立地しています。A区では丘陵尾根部分に「E」字形の調査区を、B区ではトレンチによる調査区を設定しました。



写真2 第94次調査区遠景（南から）

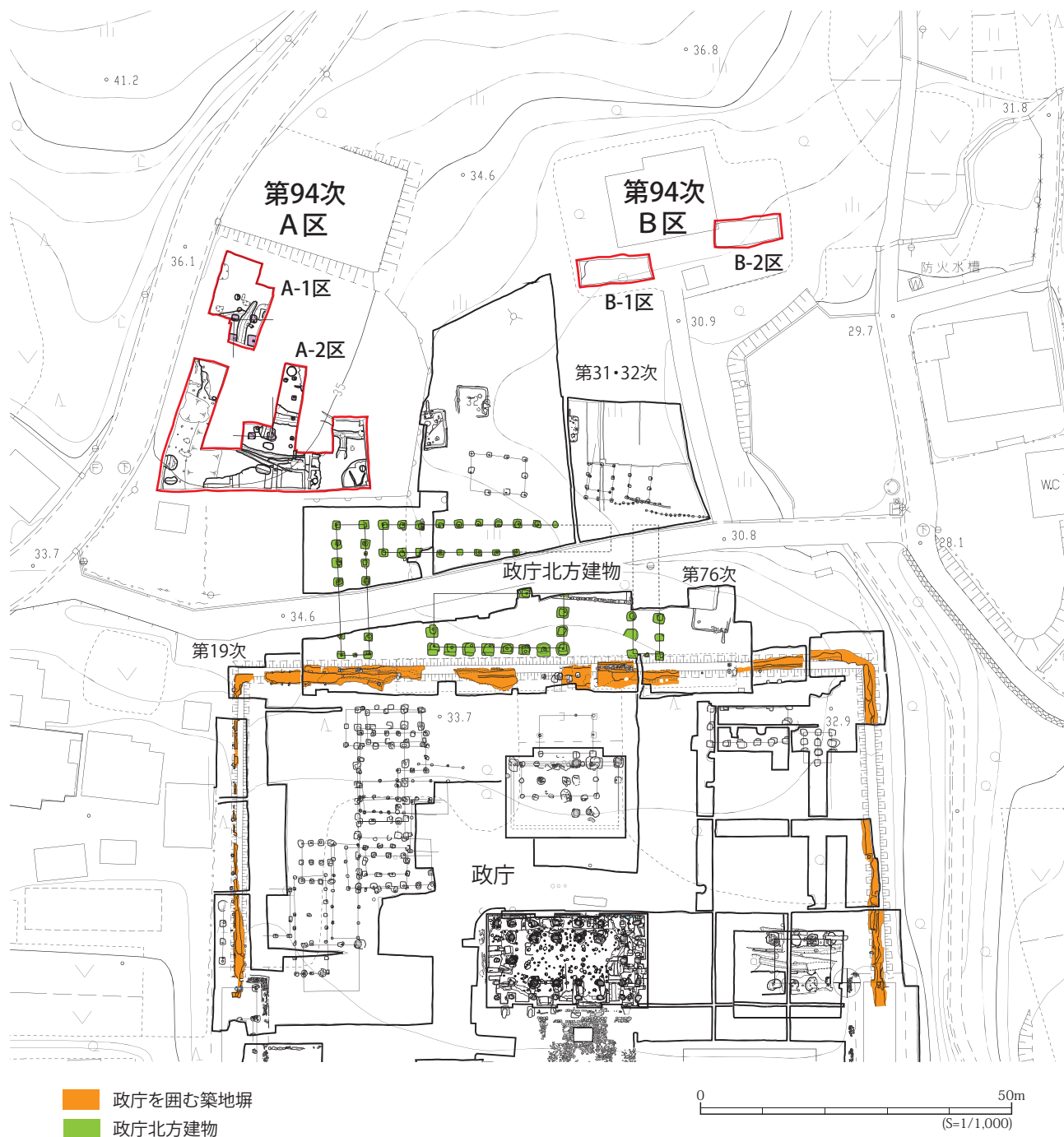


第1図 第94次調査区的位置

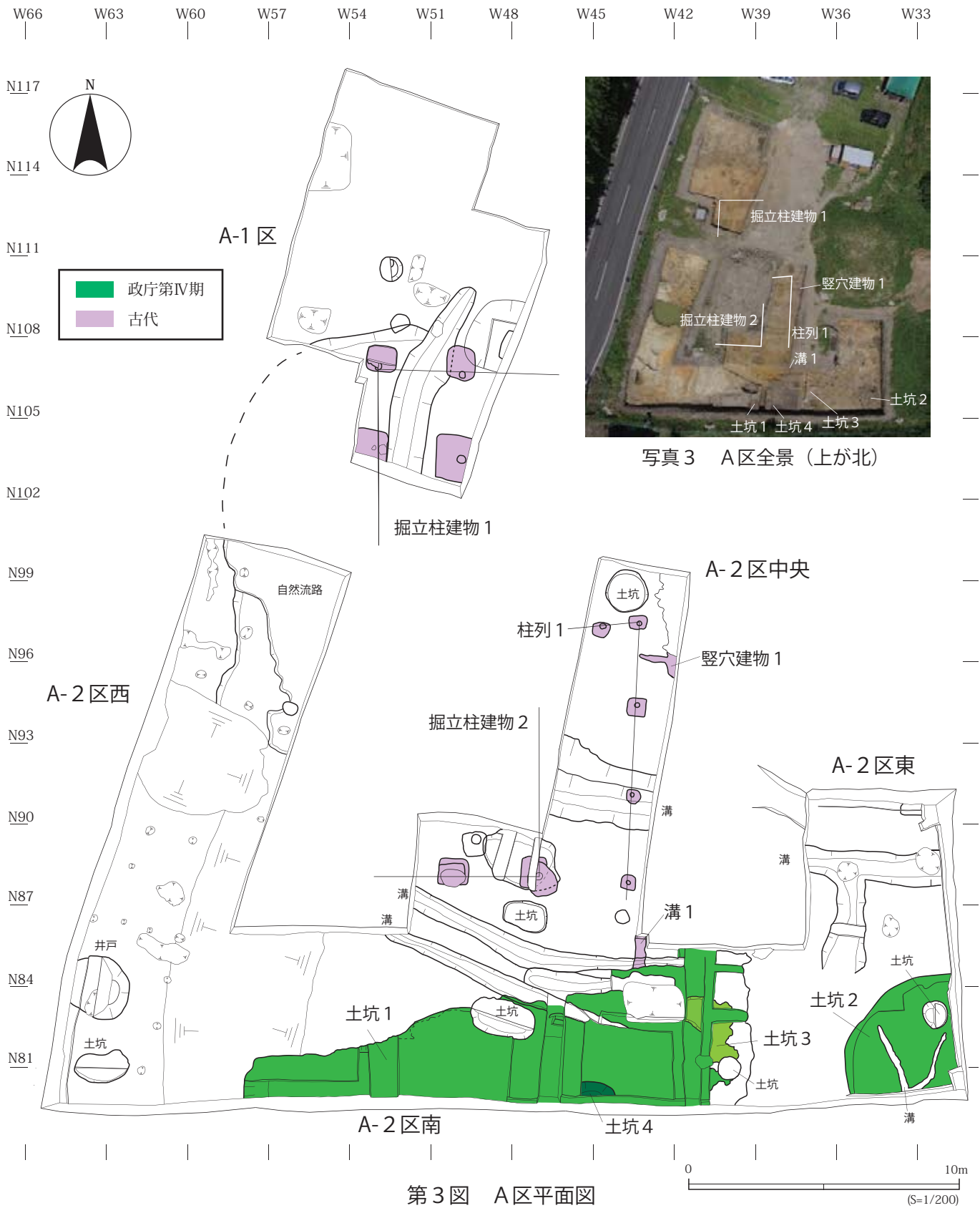
A区で発見した遺構には古代とそれより新しいものがあります。古代の遺構は、掘立柱建物、^{はしられつ}柱列、^{はしら}竪穴建物、^{どこう}土坑、^{ちゆうけつ}溝、^{はくじ}柱穴で(第2・3図、写真3)、出土遺物は、^{はくじ}白磁、^{りよくゆうとうき}緑釉陶器、^{かいゆうとうき}灰釉陶器、^{てっさい}土器、瓦、鉄製品、鉄滓です。古代より新しい遺構は、井戸、土坑、溝、自然流路で、出土遺物は、^{りゅうろ}土器、瓦、近世以降の陶磁器です。

B区で発見した遺構は、竪穴建物、柱穴、溝、整地層で(写真7・8)、出土遺物は、白磁、土器、瓦、硯、土製品等です。

今回の調査の主な成果としては、次の2点があります。



第2図 第94次調査区周辺の調査の状況



成果1 掘立柱建物を発見

A区で掘立柱建物を2棟発見しました(第3図)。どちらも一部の確認ですが、東西・南北ともに1間以上と推定されます。

掘立柱建物1では4個の柱穴を確認しました。柱穴は一辺1.2~1.6mの長方形で、柱痕跡は直径25cm程です。柱と柱の距離(柱間)が約3mあります。建物の西辺は、政庁西辺の築地塀の北側延長線上に位置します(第2図)。

掘立柱建物2では2個の柱穴を確認しました。柱穴は新旧2時期あり、建物は一度建て替えられています。柱穴は新旧ともに一辺1.0m前後の長方形です。柱は抜き取られていましたが、推定される柱の位置で測ると柱間は約3mあります。

掘立柱建物1と2は柱穴や柱間の規模から大型の建物であると推定されます。また、建物の方向や柱間、柱穴の埋土の特徴が類似しており、同時期あるいは同一の建物の可能性があります。

成果2 11世紀後半の白磁と土器が出土

A-2区南部の土坑1(東西18.0m、南北5.0m以上、深さ0.7m)と、A-2区南東隅の土坑2(東西4.6m以上、南北4.7m以上、深さ0.2m)、B区の堆積層から、11世紀後半の白磁や土器が出土しました(第3図、写真4・5)。白磁は中国から輸入した高級食器で、器種は碗と皿です。小破片ではありますが、出土例が少なく貴重です。土器は、口径8cm、高さ2cm程の小型の皿です。



写真4 白磁と土器(縮尺任意)



写真5 土坑1断面(西から)

3 まとめ

① 政庁の北側で掘立柱建物を発見しました

「政庁北方建物」よりさらに北西側に、大型の建物の分布が広がることが分かりました。今回見つかった建物も政庁に近い位置にあることから、政庁と何らかの関係を持った施設である可能性があります。

② 11世紀後半の白磁と土器が出土しました

白磁は中国産の高級品で貴重な出土例です。多賀城はこれまでの調査で11世紀前半まで機能していたことが判明していますが、それ以降の状況についてはよく分かっていません。そのため、出土した白磁と土器は、この時期の多賀城の姿を明らかにする際の手掛かりになると考えられます。

多賀城の変遷

政庁第Ⅰ期:創建(724年頃)~大改修(8世紀中頃)

政庁第Ⅱ期:大改修(8世紀中頃)~火事(780年)

政庁第Ⅲ期:火事の復旧・整備(780年)~地震(869年)

政庁第Ⅳ期:地震の復興(869年)~11世紀前半



写真6 第94次調査区
近景(南から)



写真7 B-1区全景
(上が北)



写真8 B-2区全景
(上が北)

西沢遺跡第 37 次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター

1. 調査要項

所在地：多賀城市市川伊保石 55 番、浮島字西沢 60 番 1 の一部

調査原因：宅地造成

調査期間：令和元年 6 月 13 日～令和 2 年 2 月 26 日

調査面積：2,600㎡

調査主体：多賀城市教育委員会

調査担当：多賀城市埋蔵文化財調査センター



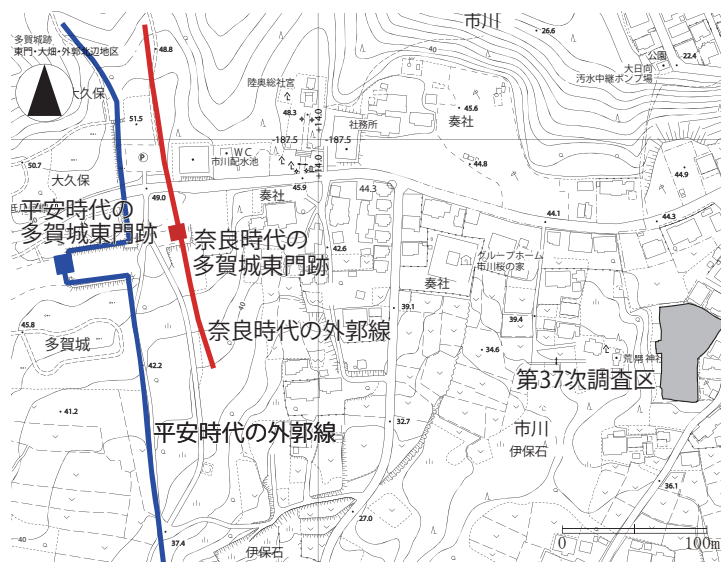
第 1 図 調査区の位置

2. 遺跡の概要と調査区の位置 (第 1 図、第 2 図)

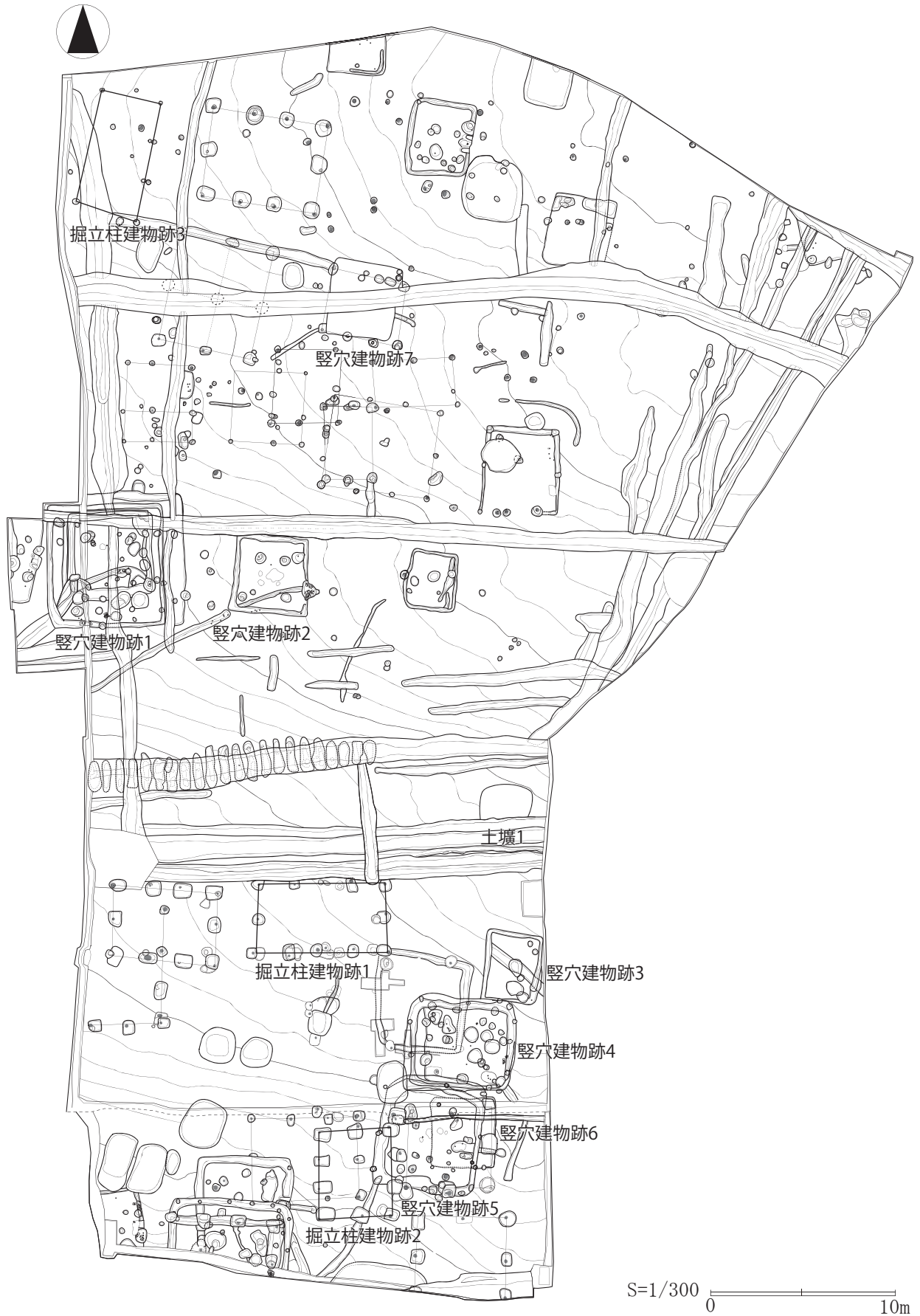
西沢遺跡は標高約 6～46 m の低丘陵上に位置し、範囲は南北 450 m、東西 700 m に広がります。遺跡の立地する低丘陵は東に向かって張り出しており、北から南へ低くなる緩斜面に大小の沢が入り組んだ地形となっています。また、多賀城跡の東側に隣接しています。これまでの調査では古代から中世にかけての集落跡が見つかっており、特徴的なものとして西沢遺跡第 3 次調査において古代の鍛冶工房跡を確認しています。

西沢遺跡第 37 次調査は、平成 31 年度に実施した宅地造成に伴う発掘調査です。多賀城東門跡から約 300m 東側の斜面上に位置しています。標高は北側で約 45 m、南側で約 42 m です。今回の調査では古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡をはじめ、土壌や溝跡を発見しました (第 3 図)。複数の竪穴建物跡の床面からは焼土面を検出しています。

遺物は、土師器や須恵器の他に灰釉陶器や緑釉陶器、甕型土器、鉄製品や鉄滓が出土しています。



第 2 図 調査区と多賀城外郭線北東部



第3図 調査区全体図

3. 調査成果

○ 竪穴建物跡

調査区全体で 21 軒の竪穴建物跡を確認しました。特徴的な竪穴建物跡を取り上げます。

・ 竪穴建物跡 1 (第 4 図)

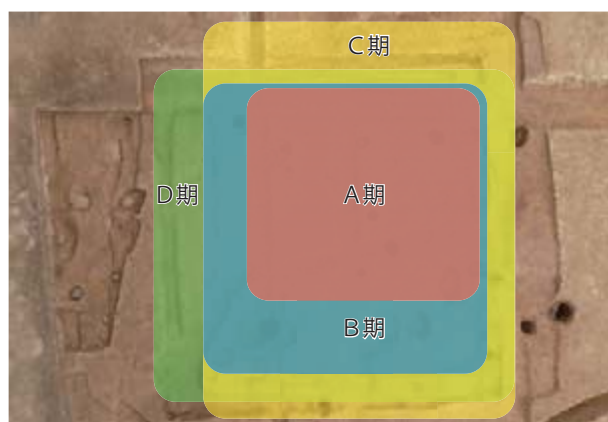
調査区中央西側に位置しています。4 時期 (A～D 期) の変遷を確認しました (第 5 図)。平面規模は最も古い A 期が最も小さく南北約 4.3m、東西約 4.5m です。それ以降は B 期が南西方向へ、C 期が南北方向へそれぞれ拡大し、D 期ではさらに西方向へ拡大しています。D 期の埋土からは 9 世紀後半の土器が出土しています。

いずれの時期でもカマドは確認していませんが、4 時期目の D 期の床面のほぼ中央で火を使ったことによる焼土面の広がりを検出しています。そのほか、建物東辺中央付近から各時期の南西角部に伸びる溝跡を 1 条確認しています。これは竪穴建物に伴う排水用の溝と考えられ、南西角部から延びる外部排水溝に接続しています。ここから建物外へ水を流したと考えられます。

なお、C～D 期に伴う周溝や建物内の排水溝からは暗渠として敷設された有段丸瓦が出土しています。



第 4 図 竪穴建物跡 1 (上が北)



第 5 図 竪穴建物跡 1 の重複関係

・ 竪穴建物跡 2 (第 6 図)

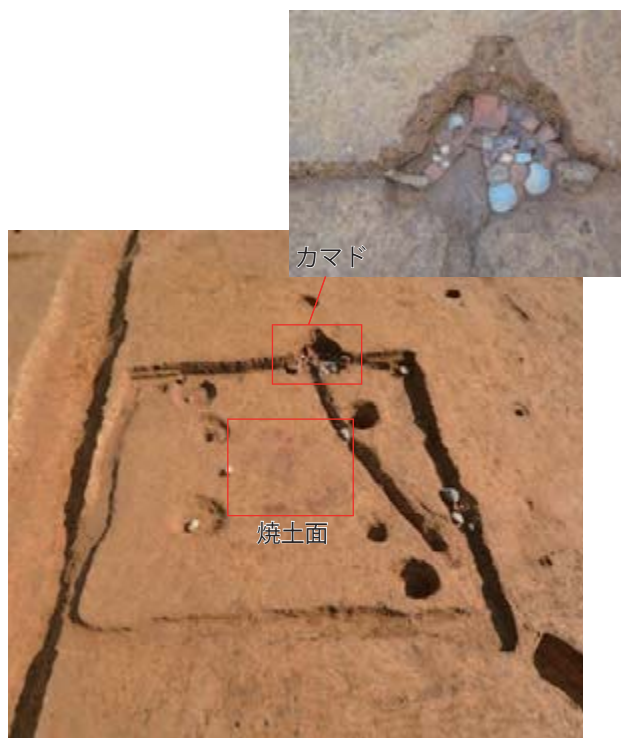
竪穴建物跡 1 の東側に隣接しています。出土した土器から 9 世紀前半の遺構と考えられます。平面規模は南北約 4.2m、東西約 3.9m です。燃烧部に土器片の外面向上向きにして敷き詰めたカマドを確認しました。カマドは東壁から外側へ張り出しています。カマドが外側へ張り出す竪穴建物跡は高崎古墳群第 7 次調査や多賀城跡大畑地区の調査で検出しています。

また床面のほぼ中央に南北約 72cm、東西約 90cm の焼土面を確認し、カマドから南西角部に伸びる排水溝とそれに接続すると思われる外部排水溝を検出しています。

・ 竪穴建物跡 3～6

調査区南側に位置しており、4 軒の竪穴建物跡が重なって出土しています。9 世紀後半の遺構である竪穴建物跡 4 が最も新しく、それから 3→5→6 の順番で古くなります (第 7 図)。

竪穴建物跡 5 (第 8 図) においても床面のほぼ中央に焼土面と、南西角部から延びる外部排水溝を確認しています。カマドは他の建物と同様に東側にあり、燃烧部から土器が出土しています。平面規模は南北約 6.3m、東西約 5.3m です。特徴的な出土遺物として鉄製紡錘車があります。



第 6 図 竪穴建物跡 2 (西から)



第7図 縦穴建物跡3～6の重複関係（上が北）



カマド



第8図 縦穴建物跡5（西から）

・ 縦穴建物跡7（第9図）

調査区北西に位置しています。出土した土器から9世紀前半から中頃の遺構と考えられます。規模は南北約3.7m、東西約3.5mです。東辺に敷設されているカマドの堆積土内からは須恵器の横瓶の破片が纏まって出土しました（第10図）。古代の縦穴建物跡に横瓶が伴う事例は、本調査区東側に隣接する西沢遺跡第9次調査や、多賀城跡大畑地区の調査で確認されており、いずれも今回の調査と同様の時期となります。



第9図 縦穴建物跡7（西から）



第10図 横瓶出土状況（西から）

○掘立柱建物跡

調査区全体で18棟の掘立柱建物跡を確認しました。これらは柱穴の大きさや形などから、柱穴が方形あるいは楕円形で径が60～80cmのグループと（第11図、第12図）、楕円形あるいは円形で直径が直径20～40cmのグループ（第13図）に分けられます。前者については調査区南半分に比較的集中しています。最も規模の大きい掘立柱建物跡1は桁行4間で、梁行2間です。最も大きな柱穴は方形で長辺約84cmで、柱はすべて抜き取られていました。残された柱の痕跡の直径は18～20cmで、柱間は1.8mです。縦穴建物跡と重複関係を持つものもあり、掘立柱建物跡2は縦穴建物跡5より新しく構築されていました。柱穴より出土した土器から掘立柱建物跡2は9世紀中頃以降と考えられます。

後者については調査区北半分に比較的多く分布しています。柱穴から遺物は出土しておらず、時期は不明です。

○土壌

直径 1.5 ～ 3m の楕円形で、調査区南西端に集中しています。調査区中央付近で確認した土壌 1（第 14 図）は方形に近く、土師器や須恵器、瓦が礫と混じって集中して出土しました。



第 11 図 掘立柱建物跡 1（東から）



第 12 図 掘立柱建物跡 2（北から）



第 13 図 掘立柱建物跡 3（東から）



第 14 図 土壌 1（西から）

4. まとめ

今回の調査では、南北にそれぞれ集中する 2 種類の掘立柱建物群を発見したほか、竪穴建物跡群を確認しました。出土遺物の年代から 9 世紀頃を中心とする集落跡と考えられ、遺構に時期差が見られることから、集落には何時期かの変遷があります。各遺構の変遷の詳細については今後検討していきます。

多賀城跡南側では平安時代に方格地割が施行され、その区画内の建物は多くが掘立柱建物で占められていることが分かっています。一方、丘陵部に位置する西沢遺跡では、方格地割成立以降も引き続き竪穴建物が使われていることが分かっています。今回の成果においても多くの竪穴建物の使用が見られ、方格地割外に暮らしていた人々の営みの状況を一部確認しました。

参考文献

- 多賀城市教育委員会 2010 「高崎古墳群第 7 次調査」『高崎古墳群ほか』 pp.3 ～ 26 多賀城市埋蔵文化財調査報告書第 104 集
- 多賀城市教育委員会 2016 『多賀城市の遺跡 1—西沢遺跡第 2 次調査の概報—』多賀城市埋蔵文化財調査報告書第 134 集
- 多賀城市教育委員会 2001 「西沢遺跡第 9 次調査」『西沢遺跡ほか』多賀城市埋蔵文化財調査報告書第 62 集
- 多賀城市教育委員会 2013 「西沢遺跡第 25 次調査」『桜井館跡ほか』 pp.46 ～ 79 多賀城市埋蔵文化財調査報告書第 115 集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1991 『宮城県多賀城跡研究所年報 1990』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993 『宮城県多賀城跡研究所年報 1992』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所



第 15 図 調査区遠景（南から）



第 16 図 西沢遺跡第 37 次調査区と多賀城跡（南東から）

白石市 馬場台遺跡 発掘調査概要

白石市教育委員会

1. 調査要項

遺跡名：馬場台遺跡

(宮城県遺跡地名表遺跡番号 02021)

所在地：宮城県白石市越河五賀字馬場台地内

調査原因：太陽光発電設備設置工事

調査主体：白石市教育委員会

調査面積：608.48 m²

調査期間：2019年11月20日～2019年12月27日

調査員：白石市教育委員会生涯学習課

日下和寿、播間優佳



図1 馬場台遺跡位置
(宮城県遺跡地図をもとに作成)

2. 遺跡の概要と調査に至る経緯

馬場台遺跡は縄文・古代の遺跡とされ、かつて剥片・石鏃・土師器片などが確認されています。遺跡は東北本線越河駅の南西にある南北に長い丘陵上に立地しており、遺跡範囲は南北約370m×東西約140mです。丘陵の東側では比高が20m程あり急傾斜ですが、頂部はおよそ標高165mで南北約150m×東西約40mの範囲でほぼ平坦になっています。遺跡周辺には「馬場前」「海道下」「下馬渡戸」「上馬渡戸」という地名が残っており、いずれも「馬」や「街道」との関連を想像させま



写真1 遺跡上空から福島方面を望む

す。そして、遺跡の立地する「越河地区」は福島県との県境に位置しています。県境付近は東西に山が迫り、山間のスペースは最も狭いところで幅 150m 程しかありません。このスペースを東北本線・国道 4 号線・東北自動車道が重なり合うようにして通っている交通上重要な地域で、藩政時代には奥州街道が通り、仙台藩の御境目番所である越河番所が置かれました。また、県境から南に約 3km の地点には源頼朝の鎌倉軍と奥州藤原氏の激戦を物語る「阿津賀志山防塁」が位置し、軍事上の要衝でもあったことがわかります。

馬場台遺跡では 2018 年にも 1 度発掘調査が実施されましたが、遺構・遺物は確認されませんでした。しかし 2019 年、新たに太陽光発電設備設置事業が計画されたことに伴い、発掘調査を実施しました。なお、この事業は遺跡の保存協議を進めた結果、実施されないことになりました。

3. 調査成果

今回、建物跡が全部で 9 棟確認されました。うち掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとが 4 棟、竪穴建物跡が 5 棟です。その他、土坑・ピット等も複数検出されました。

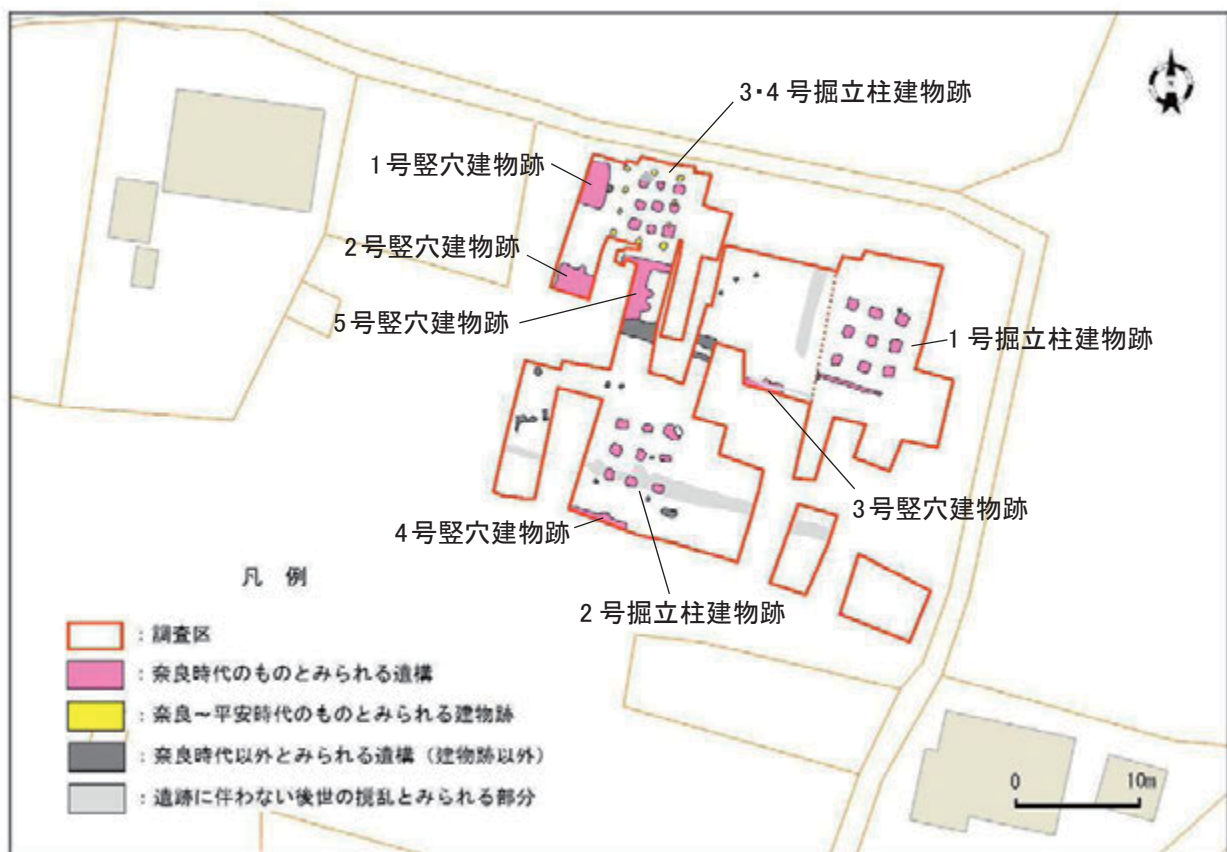


図 2 遺構配置図

(1) 掘立柱建物跡

柱穴の規模が一辺約 80 cm～1 m と大型の方形を呈している、2 間×2 間の総柱建物そうばしらたてものと呼ばれる建物跡です。1・2 号掘立柱建物跡の柱間は東西約 2 m、南北 2.2m で、南北に細長い形となっています。3 号建物跡は柱間が東西 1.5m、南北 1.8

mとなっています。若干規模が小さいですが、南北に細長い点で共通しています。それぞれ離れた場所に建っていますが、建物の向きが一致していることから配置に規則性があり、計画的に建てられたと考えられます。



写真2 1号掘立柱建物跡（南から）



写真3 1号掘立柱建物跡の柱穴断面（南から）



写真4 3・4号掘立柱建物跡（東から）

(2) 竪穴建物跡

建物跡の全体が検出されたものはありませんが、方形を呈しているとみられます。建物跡の一辺が完全に検出されたものは1棟しかありませんが、1辺3.5mでした。5棟中3棟はカマド部分も検出されており、すべて北側に位置しています。規模が小

さいものがあつたり長方形を呈したりするため、住居跡ではなくそれ以外の機能を持つ建物跡として捉えています。これらは掘立柱建物と同一方向に建てられており重複もないことから、掘立柱建物に付帯する建物と考えています。



写真5 2号掘立柱建物跡（西から）

(3) 遺物

竪穴建物跡を中心に土師器・須恵器が出土しています。土師器は甕の破片が多いようです。須恵器は蓋が出土しており、時代は奈良時代前半とみています。

それ以外の遺物では、縄文時代の^{やじり}鍬・^{はくへん}剥片、弥生時代の土器なども出土しています。

4. まとめ

今回発見された建物跡は、おおよそ奈良時代前半ものとみられ、古代の役所や寺院でよく見つかる特徴をもっています。おそらく、律令国家の影響下にあつて建てられた倉庫跡なのでしょう。これまで白石市内でこのような建物が確認されているのは、東北本線白石駅付近に広がる大畑遺跡が中心で、そこには^{かいた郡衛}菟田郡衛（※1）があつたと考えられています。しかし、大畑遺跡から南に約10kmの地点でこのような建物跡が発見されたのは初めてのことです。なぜ、この地に役所的な特徴をもつ建物が存在していたのでしょうか。

このことを考える上で重要な背景として、前述したように越河地区は交通上・軍事上重要な地域であり、古代から「^{とうさんどう}東山道」と呼ばれる官道（※2）が整備され、都からの使者が通つていたことが考えられます。そして、この官道沿いには30里（約16km）毎に施設が置かれ、使者を休ませたり、使者が使う馬を用意したりする役目を持ちました。この施設を^{うまや}駅家といいます。

10世紀前半に完成した法令集『^{えんぎしき}延喜式』にはこの地域の東山道の駅家として、「^{あつかしのうまや}篤借駅」が記載されていました。これによれば全国に402の駅家が置かれていたとされますが、その場所が特定されたのはごくわずかです。これまでも「^{あつかしのうまや}篤借駅」が越河地区周辺に存在する可能性が指摘され、どこにあるのか研究者の関心を集めてきました。

これらのことから、白石市教育委員会では今回発見した建物跡が駅家に関連する施設の一部である可能性を考えています。まだ遺跡の性格を決定づける明確な証拠はありませんが、この可能性を探るため、白石市教育委員会では関係各位のご協力をいただきながら今後も調査を継続してきたいと考えています。

※1 養老五年（721年）に柴田郡から分かれて置かれた菟田郡の郡役所。

※2 律令国家によって整備された道路のこと。東山道は古代の律令国家が全国を支配するために張り巡らした「七道」と呼ばれる7本の道のうちの1つ。

山元町 ^{とはなやま} 戸花山遺跡 発掘調査概要

山元町教育委員会 生涯学習課 戦場 由裕

1. 調査要項

遺跡名：戸花山遺跡（宮城県遺跡登録番号 14033）
 所在地：亶理郡山元町坂元字町地内
 調査原因：町道新浜諏訪原線道路建設工事（避難道路）
 調査主体：山元町教育委員会生涯学習課
 調査協力：宮城県教育委員会
 担当者：山元町 戦場由裕（山元町生涯学習課：R1・2）
 宮城県 初鹿野博之（宮城県文化財課：R1）
 古川一明（宮城県文化財課：R1）
 傳田惠隆（宮城県文化財課：R2）
 佐藤渉（宮城県文化財課：R2）
 伊東博昭（宮城県文化財課：R2）
 熊谷亮介（宮城県文化財課：R1・2）
 風間啓太（宮城県文化財課：R2）

調査期間：令和元年8月19日～12月23日

令和2年5月11日～9月30日

※確認調査は令和元年8月～9月実施

調査対象面積：7100㎡ 本発掘調査面積：約3700㎡



第1図 山元町の位置



第2図 戸花山遺跡の位置

2. 遺跡の概要と調査に至る経緯

昭和期の工事で切土を行った地点で窯跡が発見されたことによって、遺跡として登録されました。今回の調査は東日本大震災復興事業である避難道路の建設工事により、令和元年8月から9月に確認調査を行い、10月から本発掘調査を並行しました。

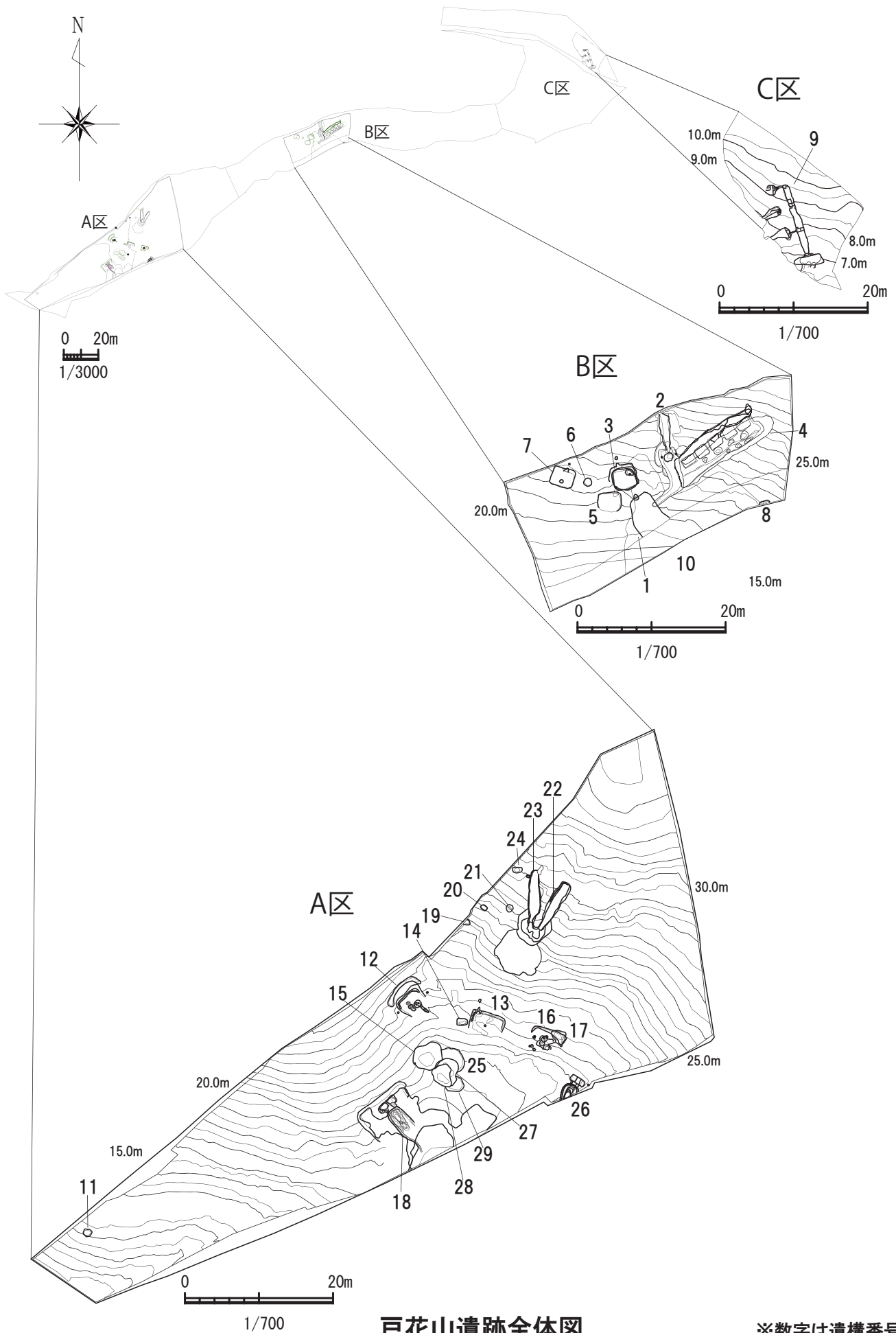
3. 調査成果

令和元年度から令和2年度にわたり29基の遺構を確認し、調査を行いました。主な遺構として、木炭窯跡5、堅穴建物跡7、製鉄遺構2（いずれも古代）を挙げるすることができます。

木炭窯跡…2号遺構、4号遺構（以上B区）。9号遺構（C区）。22号遺構、23号遺構（以上A区）。4号遺構、9号遺構は横口を持つ木炭窯跡です。

堅穴建物跡…3号遺構、5号遺構、7号遺構（以上B区）。12号遺構、13号遺構、16号遺構（以上A区）。12号遺構と16号遺構は、鍛冶関連遺構である可能性があります。

製鉄遺構…18号遺構、26号遺構（以上B区）。なお、2号遺構の堆積土から、通風管が出土しており、発掘区外でも製鉄を行っていた可能性が考えられます。



戸花山遺跡全体図

※数字は遺構番号



1. 戸花山遺跡 発掘区遠景（中央がB区、西から）



2. 2号遺構（木炭窯跡） 操業面（南から）



3. 2号遺構（木炭窯跡） 完掘（南から）



4. 2号遺構（木炭窯跡） 断ち割り断面（南から）



5. 4号遺構（木炭窯跡） 断面（左は2号遺構、南西から）

戸花山遺跡 図版1



1. 4号遺構（木炭窯跡） 操業面（南西から）



2. 4号遺構（木炭窯跡） 作業状況（東から）



3. 4号遺構（木炭窯跡） 断ち割り断面（南西から）



4. 4号遺構（木炭窯跡） 横口残存状況（北西から）



5. 2号・4号遺構（木炭窯跡） 完掘後全景（南西から）



1. 3号・5号遺構（竪穴建物跡） 完掘（南西から）



2. 7号遺構（竪穴建物跡） 完掘（南西から）



3. B区の木炭窯跡・竪穴建物跡群 全景（南から）



4. 9号遺構（木炭窯跡） 検出（南から）



5. 9号遺構（木炭窯跡） 断面（北から）

戸花山遺跡 図版3



1. 12号遺構（竪穴建物跡） 完掘（南東から）



2. 13号遺構（竪穴建物跡） 完掘（南西から）



3. 16号遺構（竪穴建物跡） 完掘（南西から）



4. 18号遺構（製鉄遺構） 作業面（南東から）



5. 22号・23号遺構（木炭窯跡） 断面・全景（南西から）



6. 22号・23号遺構（木炭窯跡） 断面（南西から）



7. 23号遺構（木炭窯跡） 煙道ほか断面（南から）



8. 26号遺構（製鉄遺構） 完掘（北東から）

戸花山遺跡 図版4

ひこ う え もん ばし かま あと
彦右工門橋窯跡 ～古代生産遺跡の発掘調査成果～

1. 調査要項

所在地：大衡村大衡字萱刈場・字吹付・駒場字彦右
衛門橋

調査原因：国道4号拡幅工事

調査期間：2020年9月3日～調査中

(そのほかの調査含めて12月下旬頃終了予定)

調査面積：対象約1600㎡ 発掘約1000㎡（6区）

調査主体：宮城県教育委員会

調査協力：大衡村教育委員会

調査担当：佐藤渉、伊東博昭、風間啓太



図1 彦右工門橋窯跡の立地と調査区

2. 彦右工門橋窯跡の立地と大衡窯跡群

彦右工門橋窯跡は大衡村駒場字彦右衛門橋・字吹付・字萱刈場ほかに所在する奈良～平安時代を中心とした遺跡です(図1)。遺跡内に国道4号拡幅工事が計画されたため、工事に先立って発掘調査を実施することとなり、昨年度から調査を開始しました。

大衡村の北側、大衡村役場から北に約3kmの大松沢丘陵西縁の緩斜面に立地するこの地域では、彦右工門橋窯跡のほかにも待井沢窯跡A・B地点、萱刈場窯跡A・B・C地点、吹付窯跡、吹付B窯跡、横前窯跡の9地点で古代の窯跡が複数みつかり、それらは総じて大衡窯跡群と呼ばれています(図2)。窯跡の年代は8世紀中頃から9世紀後半で、須恵器を中心に生産していました。昨年度は、土師器焼成遺構、鉄滓(鉄くず)が多量に出土した鍛冶に関わる土坑、整地層、古代の河川跡を調査しました。窯跡はみつきりませんでした。整地層や土師器焼成遺構を埋め戻した土から、窯跡に由来するとみられる瓦や大量の須恵器が出土しています。瓦のなかには、名生館官衙遺跡やその附属寺院の伏見廃寺などで見つかった珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦があり、本遺跡がその生産地であることが分かりました。



1 彦右工門橋窯跡 2 吹付窯跡 3 吹付B窯跡
4 横前窯跡 5 萱刈場窯跡 6 萱刈場B窯跡 7 萱刈場C窯跡 8 待井沢窯跡 9 待井沢B窯跡 10 河原遺跡 11 針遺跡 12 日の出山窯跡群

図2 大衡窯跡群と調査地点

3. 発見した遺構と遺物

今年度は複数地点で調査していますが、おもに遺構・遺物を確認できたのは、昨年度調査区の北側隣接地点です。地形をみると、東から西に向かって延びる丘陵西端付近の頂部にあたる位置にあります。竪穴建物跡9棟、土師器焼成遺構10基のほか、土坑とピット複数を確認しました。遺物は、土師器、須恵器、瓦が出土しています。今回の報告では、とくに遺跡の特徴を示すSI22 竪穴建物跡を中心に彦右エ門橋窯跡の調査成果を紹介していきます。



図3 彦右エ門橋窯跡平面図



図4 SI22 竪穴建物跡（南から）

SI22 竪穴建物跡

規模は東西約6m、南北約5.5m、確認面からの深さは最大で0.4mあります。建物内の施設としてカマドが3基あり、北辺で2か所（カマド1・カマド2）、南辺の南東隅付近で1か所（カマド3）みつけられました。

カマド1はSI22北辺のほぼ中央にあり、約1.5mの長い煙道が北に向かって延びていました。本体部分は一切残っておらず、カマドがあったとみられる位置の床面が赤く焼けていました。カマド2はカマド1の西側約1mのところであり、右袖の一部が残っていました。完形の須恵器坏蓋（古代の食器の蓋）が燃焼部に置かれた状態で出土しましたが、これはカマドを使わなくなった時の祭事に使われた可能性があります。カマド3は、カマド1・2と異なり、袖を含む本体部分が竪穴の外に張り出す構造です。左右から土師器甕が潰れた状態で出土しましたが、袖の芯材に用いられたものとみられます。また、支脚（煮炊きに用いる土器を支えるもの）とみられる須恵器高坏脚部（高い脚の付く器）が燃焼部の中央で見つけられました。

3基のカマドは出土状況から1→2の順でつくられたとみられ、少なくとも1回の建替えがあったと推定できます。カマド3はカマド2の後につくられた可能性もありますが、位置が離れることや先に述べた特徴や煙道が短いといった構造差からカマド1・2と同時期に使い分けがされていた可能性もあります。また、カマドとの対応関係は分かりませんが、床に焼け面があり、火を使う作業をしていたとみられます。



図5 カマド1 (南から)



図6 カマド2 (南から)



図7 カマド3 (北から)



図8 カマド3 (西から)

SI22 は、利用されなくなったのち、南側 1/3 程度の範囲が埋め戻されています。埋め戻しに使われた土は、SI22 の南側に隣接する SX38・39 などの土師器焼成遺構を掘削した土に由来するとみられ、掘削時の排土処理と作業場の確保を兼ねていたとみられます。なお、埋め戻したのち、その上には周囲から自然に流れ込んだ土の堆積が確認されています。

SI22 の年代は、床面から出土した須恵器坏やカマド内の坏蓋、カマド3の土師器甕などから8世紀後葉～9世紀前葉とみられます。

SI22 とそのほかの竪穴建物跡の特徴

(1) SI22 ではカマドが3基あることから、複数回建替えた可能性があります。ほかの竪穴建物跡のカマドは1基でした。

(2) SI22 では、カマドの袖に土師器甕と粘土を使ったものと粘土だけを使ったものがありました。SI25 では、カマドの袖構築に土師器甕を使っていたほか、SI21、SI23 でも袖に土師器甕を使っていた可能性があります。SI24 のカマドは粘土で構築されていました。カマドの袖に土師器甕を使った竪穴建物跡が多いことは、この遺跡の特徴のひとつです。



図9 SI23 竪穴建物跡（西から）



図10 SI24 粘土塊出土状況（東から）



図11 SX37 土師器焼成遺構（東から）



図12 SX34 土師器焼成遺構（東から）

(3) SI22 では、床が被熱して赤くなっていることから、屋内で火を使った作業をしたとみられます。SI23 でも床が被熱して赤くなっていました。また、SI24 では床面で粘土の塊がみつかっていますが、これは土師器や須恵器の材料であった可能性が考えられます。以上のように今回調査した竪穴建物跡は単に居住していただけでなく、工房など何らかの作業の場であったことも確認しています。

(4) SI22 では使われなくなったのち埋められて、さらにその埋め戻した土の面に隣接して土師器焼成遺構がつくられています。また、SI21 と SI24 では竪穴建物跡の一部を壊して土師器焼成遺構がつくられていました。このことから、今年度の調査区では、竪穴建物の建つ場所から土師器を焼く場所に変化していったとみられます。

4. まとめ

昨年度からの調査区では、窯跡は見つかりませんでした。調査区南西約 60m 地点には窯跡が複数あることが推定されています。竪穴建物跡の年代は、遺物から推定されている彦右エ門橋窯跡の操業年代である 8 世紀後半～9 世紀初頭に重なる期間があり、さらに位置関係もふまえると、竪穴建物跡は須恵器生産を担った工人の住居や工房として使われた可能性があります。

また、彦右エ門橋窯跡の北に隣接する吹付窯跡でも調査を行いました。古代に埋没した沢と土師器・須恵器の小片を確認しました。なお、12 月上旬から河原遺跡の北東部分で調査を開始予定で、12 月下旬までに今年度分の調査を終了する予定です。



図 13 彦右エ門橋窯跡遠景（南東から）

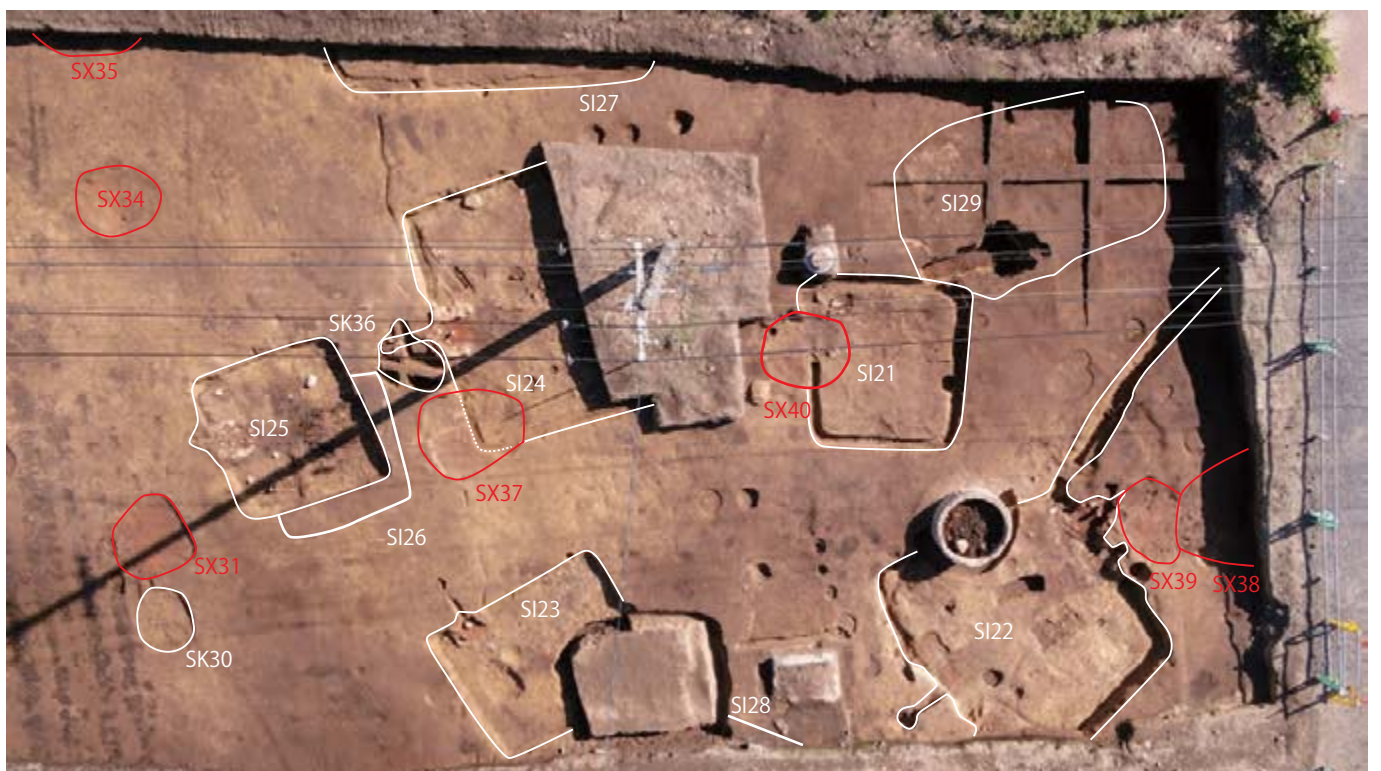


図 14 彦右エ門橋窯跡俯瞰写真（下が西 右が南）

柴田町 入間野平城館跡 発掘調査概要

柴田町教育委員会

遺跡名：入間野平城館跡（いりまのひらじろたてあと）（遺跡番号 08091）

調査場所：柴田町槻木下町一丁目 136 番 1

対象面積：960㎡

確認調査面積：新築建物敷地部分 230㎡

現地調査：令和 2 年 5 月 18 日（月）～同年 6 月 19 日（金）

調査主体：柴田町教育委員会

調査担当職員：畠山未津留、岡山卓矢

1. 入間野平城館跡について

今回の調査地は JR 槻木駅より北東 500 m に位置しています（第 1 図参照）。柴田町槻木下町一丁目地内（槻木保育所の北側よりショッピングセンターマルコの南側にかけて）の一角はかつて「館ノ内（たてのうち）」と呼ばれていました。この地名が示す通り、周辺一帯は中世（鎌倉～室町時代）の大規模な城館（じょうかん）跡であったと考えられています。昭和 22 年撮影の航空写真にも、城跡の堀の形に水田が写っており、その規模は、東西約 250 m × 南北約 250 m の方形であると推定されます。堀や土塁（どるい）等の一部は近年まで残存していましたが、開発とともにその多くも失われています。発掘調査の事例が少ないため、現在でも遺跡の時代や規模、性格などよくわかっていません。

2. 発見遺構

今回の調査では、城内を区画するための溝、建物の柱跡、井戸跡等を発見しました。

【区画溝】 城内の敷地を区画する溝（堀）と考えられます。最も古い溝は南北方向に幅 1.5 ～ 1.7 m、深さ 80cm で作られており、中世（鎌倉～室町時代）の水甕の破片と推定される陶器（「中世陶器（ちゅうせいとうき）」）や中国で作られた天目茶碗（てんもくぢゃわん）、白（うす）、かわらけ、東海地方で焼かれた灰釉陶器等が出土しました。

【掘立柱建物跡】 柱材をそのまま地中に埋めて建てる掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）の柱跡が 120 基見つかりました。城内の建物が何度も立て直されたと考えられます。

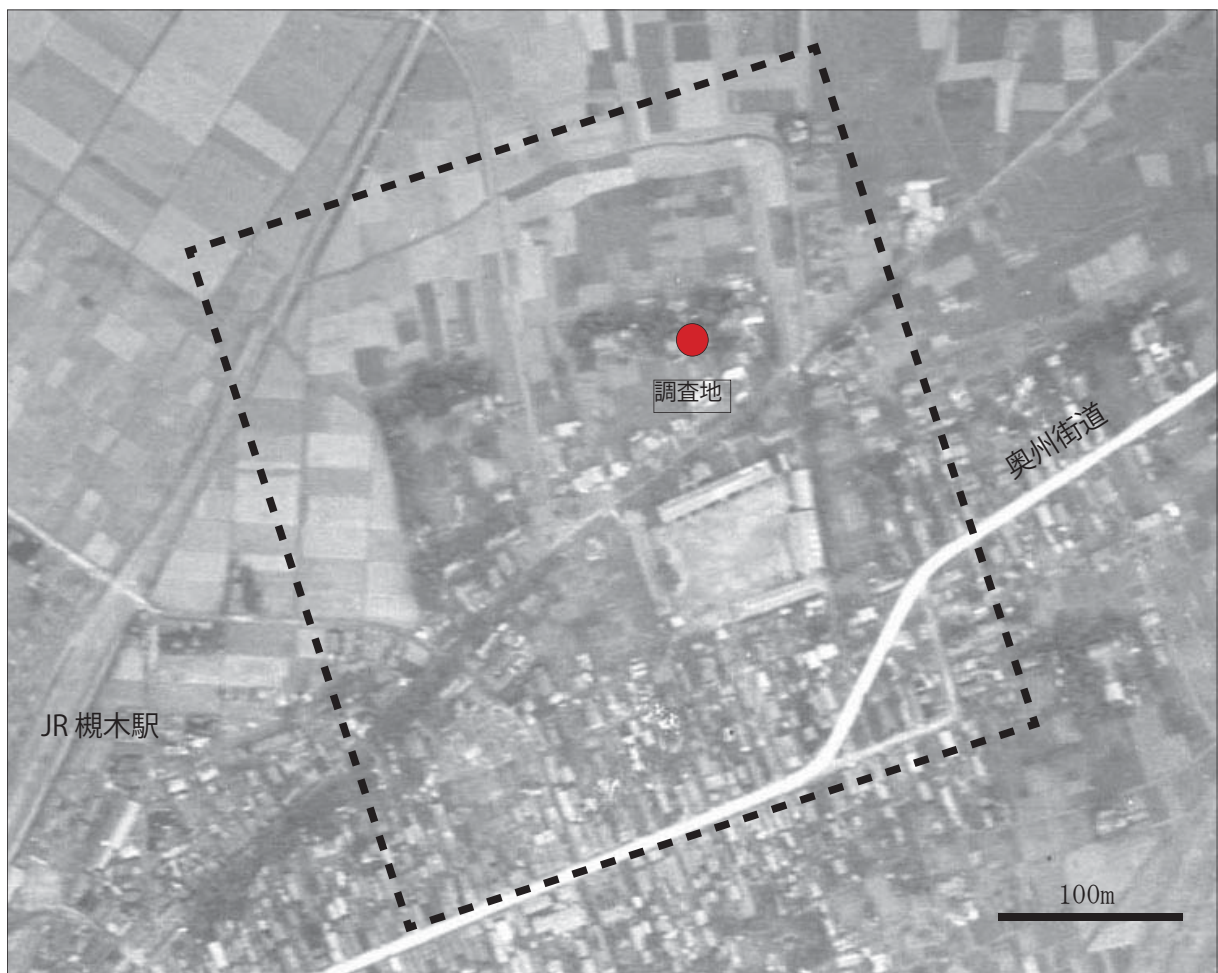
【井戸跡】 少なくとも 6 基の井戸跡が見つかりました。大きさはいずれも幅 2 m 前後、深さ 1 ～ 1.5 m の規模です。中からは曲物（まげもの）や中世陶器、儀式で使用する素焼きの小皿「かわらけ」、燈明皿などが出土しました。

3. まとめ

出土遺物を見ると入間野平城館が機能していた時代は、13世紀代と考えられます。出土遺物は少ないものの、その中には中国産の天目茶碗が含まれていることから、城内にはこれらの茶器を用いて茶を嗜む教養と経済力を併せ持つ人々が居住していたと推定されます。他にも儀式や饗応で一度しか使用されない素焼きの小皿「かわらけ」も出土していることから、城内では儀式が執り行われていたと考えられます。

発見した遺構の中でも特徴的なものに、区画溝（堀）があります。東西方向の溝で幅5m前後、深さ1.2m以上もある大規模なものですが、小規模だった古い溝を埋め、その南側に位置をずらして作り直されたことがわかりました。このことから、ある時代に区画溝北側の敷地を拡張し、さらに大規模に改修したことがわかります。発見されたこれらの区画溝は、いずれも調査区外へ伸びています。周辺には中世の武家屋敷の区画が広がっていると考えられます。

今回の調査区から出土した遺物は13世紀の鎌倉時代のもと考えられ、それ以降の新しい遺物が含まれていません。このことから、この城が鎌倉時代以降には使われなくなっていた可能性があります。江戸時代末期に地域の情報をまとめた「風土記御用書出(ふどきごようかきだし)」の城の項目にも、この入間野平城館跡についての記述がありません。この平城が古い城館であるために、江戸時代にはすでに城跡として意識されていなかった可能性があります。



第1図 昭和22年撮影（国土地理院：USA-R241-No.1）



井戸内出土 曲物出土状況（曲物左上は櫛）



区画溝出土 天目茶碗（中国産）

石巻市 石森城跡

石巻市教育委員会

1. 調査要項

遺跡名	石森城跡(宮城県遺跡登録番号 74011)
所在地	石巻市大原浜字台町屋敷
調査主体	石巻市教育委員会
調査担当	石巻市教育委員会生涯学習課
調査期間	令和2年8月3日(月)～11月27日(金)
調査面積	約5,150㎡
調査原因	県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業
調査協力	宮城県教育委員会

2. 遺跡の概要と調査に至る経緯

石森城跡は、牡鹿半島南部の大原浜に所在する中世の城館跡です。遺跡は牡鹿半島中央部に連なる山地から西の仙台湾側に派生した、標高26m程の丘陵端部に立地しています。遺跡範囲南側に位置する50×30mほどの平地(I-A区)が主郭とみられ、その北・西側に数段の平地群がめぐっており、主郭の北東側には谷が北から入り込み「空堀」と呼ばれています。

この城は大原掃部介が元々の城主であったと伝えられ、戦国大名・葛西氏が豊臣秀吉の奥州仕置によって改易されると、葛西氏の流れを汲む石森掃左衛門が、登米の石森館から落ちのびてこの城に居を構えたと言われています。石森家はその後、江戸時代には藩主がこの地で鹿狩りをする際に滞在する御仮屋守を命じられ、肝入も務めています。周辺には、中沢遺跡や羽黒下遺跡などの縄文時代前期を中心とした集落遺跡、中沢館跡などの中世の城館跡が分布しています。これらの遺跡では、東日本大震災後の復興事業に伴い発掘調査が行われ、牡鹿半島南部における地域の歴史を明らかにする貴重な成果が得られています。

今回の発掘調査は、県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業に伴うもので、平成30年10月に実施した石森城跡確認調査を受けて実施しました。調査区は事業区となる城域の北辺部、主郭北端部やその北西に連なる小規模な平地群、北側の谷部を含む、幅20～30m、長さ約180mの範囲を対象としました。

3. 調査成果

発掘調査では、縄文時代の遺物包含層や、中世から近世にかけてのものと考えられる溝跡、石塁、土塁、石垣、整地層などが発見されました。

(1) 遺物包含層

【SX1 遺物包含層】

調査区東側のI-B区に位置し、北西-南東にかけて帯状に分布しています。調査区内に広がる約30m×12mの範囲を調査しました。層厚は最大で約0.4mです。3層に分けられ、縄文時代前期前葉(上川名Ⅱ式・大木Ⅰ式)の土器や石器が出土しています。

【SX7 遺物包含層】

調査区中央のⅡ-D区(谷部)に位置し、南北約20m、東西約25mの範囲で確認しました。厚さは最大で約0.9mです。6層に分けられ、縄文時代前期初頭から前葉(上川名Ⅱ式・大木Ⅰ式)にかけての土器や石器が出土しました。また、この遺物包含層の上には、旧表土を挟ん

で、近世のものと考えられる整地層(SX11)が、谷頭部を埋める形で構築されています。

(2) 溝跡

【SD6 溝跡】

I-B 区南側に位置する南北方向の溝跡です。長さは約 15m、幅は最も広い部分で約 4.3m、深さは最大 1.4mで、断面はU字形を呈します。わずかですが底面付近から中世陶器が出土しており、近世以前にさかのぼる遺構の可能性がります。この溝跡の埋没後、西半部にかさなるようにして石塁(SF5)が構築されています。

(3) 石塁、石垣、土塁

【SF2 石塁】

I-B 区と I-C 区の境に位置する南北方向の石塁です。検出した長さ約 30m、幅約 1.2～3m、高さ約 0.8m です。地山を削り出した上に土を盛って土塁状にし、東側の面を削り掘り方とし拳大から人頭大の角礫を積んでいます。遺物は出土していませんが、他の遺構との比較などから、近世以降のものと考えられます。

【SF5 石塁】

I-B 区南側に位置する南北方向の石塁で、SD6 溝跡と重複し、これより新しい遺構です。長さ約 17m、幅約 2.0～2.3m、高さ 0.4m です。斜面を削り出して掘り方とし、そこに土を盛りながら拳大から人頭大の礫を積んでいます。17 世紀ごろの陶磁器が出土しています。

【SF9 土塁】

調査区西側、II-A・C 区に位置する南北方向の土塁です。長さ約 21m、幅は 2.1～2.9m、高さは 1.2～1.5mです。地山である岩盤を削り出して土台を造り、その上に拳大の角礫を多く含む土を盛って構築しています。17 世紀ごろの陶磁器が出土しています。

【SF12 石垣】

調査区西端部、西側に広がる沖積地へと下っていく丘陵端部の III-E 区で検出した南北方向の石垣です。高さは約 1m、調査区内で検出した長さは約 12mですが、さらに調査区外の北側へ、丘陵裾部に沿って続いていることを確認しています。斜面の地山を削り出して掘り方とし、基底部に人頭大の石を並べ、その上に細長い角礫を小口積みにしています。17 世紀ごろの陶磁器が出土しています。

(4) 整地層

2か所の地点で整地層を調査しました。そのうちの一か所は、前出した I-A 区北東隅の SX11 で、SX7 遺物包含層の上部に、谷を埋める形で厚い地山由来の土を入れて構築されており、近世の陶磁器が出土しています。もう一か所は、III-B 区で検出された SX10 で、黒褐色の土を積んで平場の端部を形成しています。近世以降のものと考えられます。

4. まとめ

- ・石森城跡は仙台湾(石巻湾)に面した丘陵に立地する中世の城館跡です。
- ・調査では、遺物包含層 2 箇所、溝跡1条、石塁2条、石垣 1 条、土塁 1 条、整地層 2 箇所などを発見し、調査を行いました。
- ・溝跡(SD6)は、近世をさかのぼる時期の遺構とみられ、石森城の時期に構築された可能性も考えられます。また、石塁、土塁、石垣、整地層から 17 世紀を中心とした近世の陶磁器が出土しており、近世の御飯屋などにも関わる可能性が想定されます。

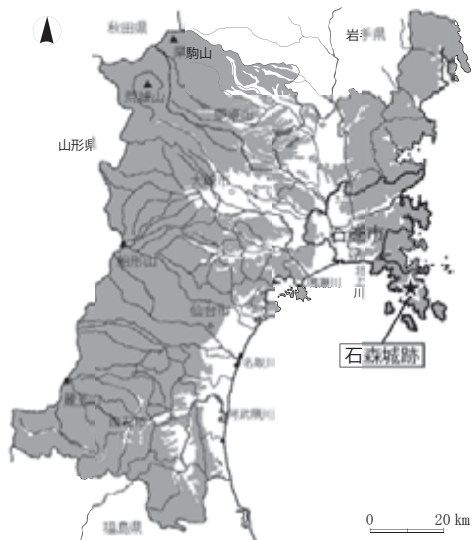


図1 遺跡の位置



図2 周辺の遺跡

中沢遺跡 : 縄文時代前～中期
 小寺遺跡 : 縄文時代中期
 羽黒下遺跡 : 縄文時代前～中期
 給分浜貝塚 : 縄文時代前～後期
 小淵遺跡 : 縄文時代中期
 中沢館跡 : 中世
 観音館跡 : 中世

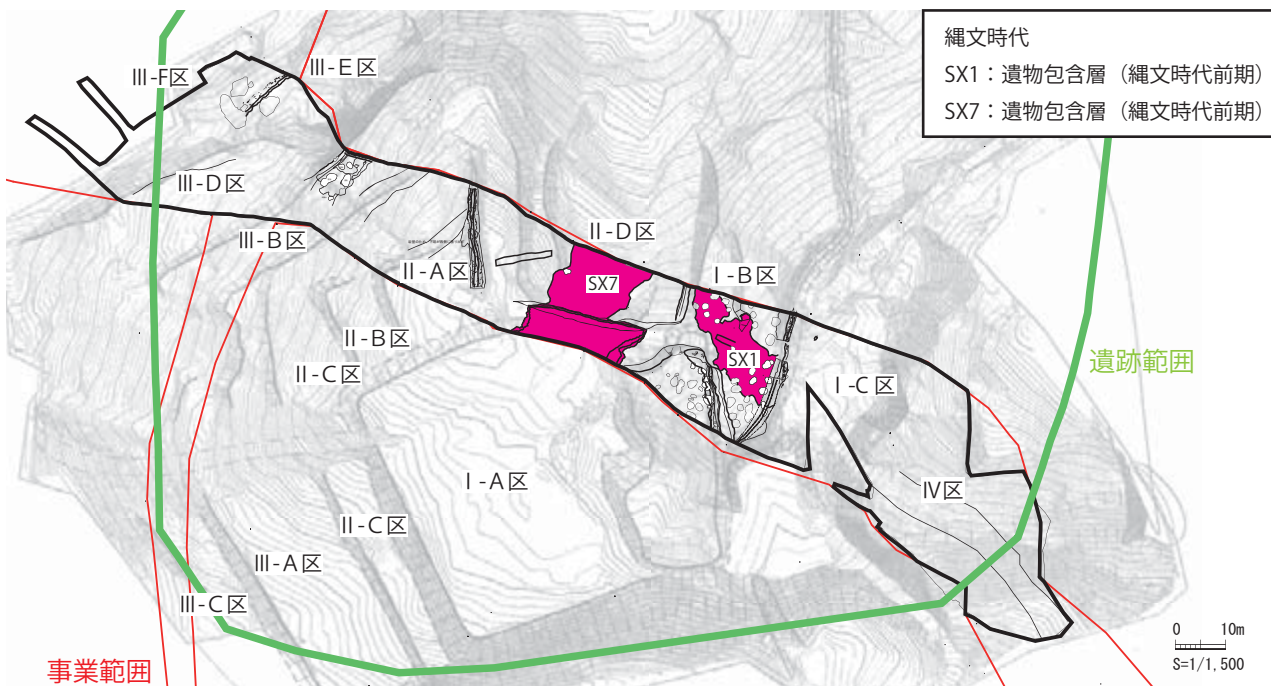


図3 遺構配置図 (縄文時代)

縄文時代
 SX1: 遺物包含層 (縄文時代前期)
 SX7: 遺物包含層 (縄文時代前期)

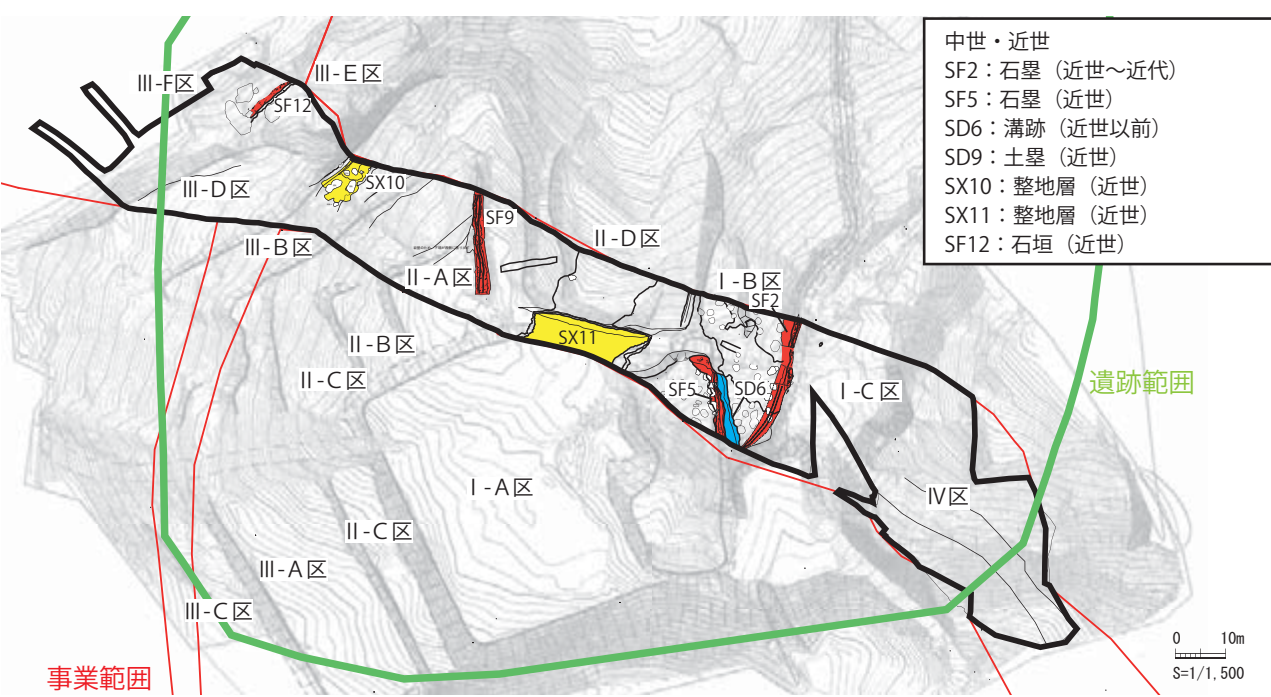


図4 遺構配置図 (中世・近世)

中世・近世
 SF2: 石塁 (近世～近代)
 SF5: 石塁 (近世)
 SD6: 溝跡 (近世以前)
 SD9: 土塁 (近世)
 SX10: 整地層 (近世)
 SX11: 整地層 (近世)
 SF12: 石垣 (近世)



写真1 調査区遠景（南東から）



写真2 調査区全景（上から）



写真3 SX1 遺物包含層（西から）



写真4 SD6 溝跡（北から）



写真5 SF9 土塁調査風景



写真6 SF9 土塁遺物出土状況



写真7 SF12 石垣（西から）



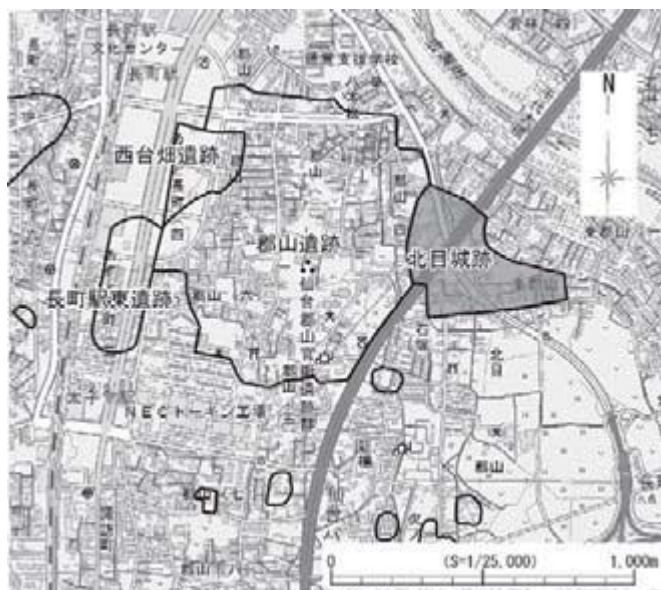
写真8 SX11 整地層（北西から）

仙台市 北目城跡第10次発掘調査

仙台市教育委員会

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡（きためじょうあと） （宮城県遺跡登録番号 01029）
調査地点	仙台市太白区東郡山二丁目
調査期間	令和2年5月7日～8月6日
調査面積	約 1000 m ²
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会生涯学習部 文化財課調査調整係
調査担当	妹尾一樹 木村 恒

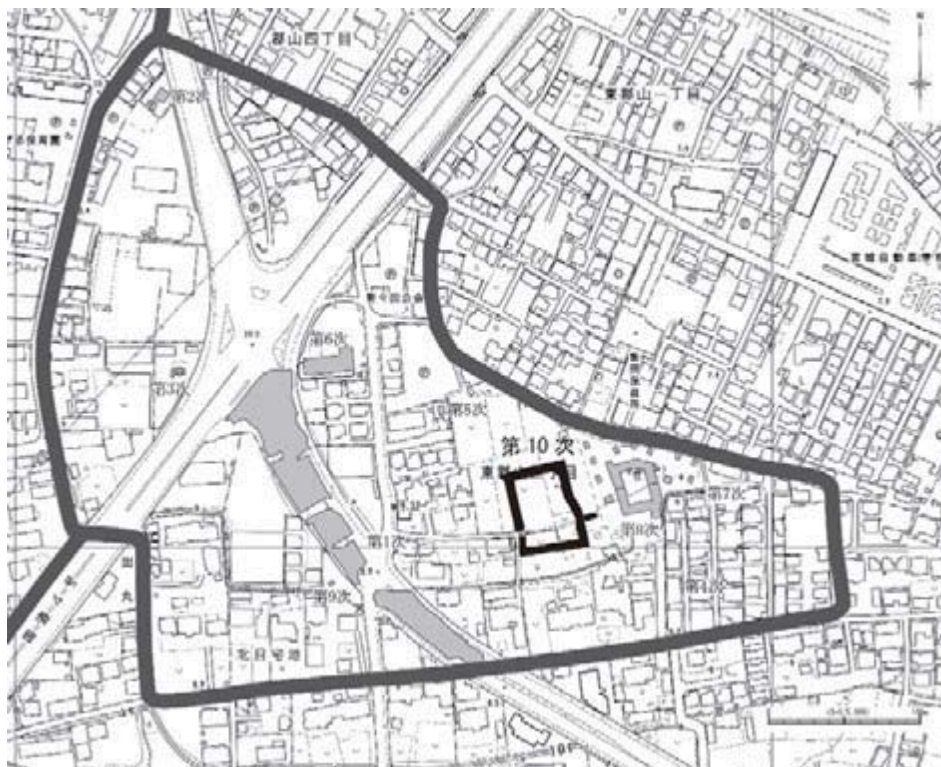


第1図 北目城跡の周辺の遺跡

2. 遺跡の位置と概要

北目城跡は仙台市太白区郡山四丁目から東郡山二丁目にかけて所在する平城跡です。広瀬川の右岸の標高約9～12mの自然堤防上に位置し、遺跡の範囲は東西約480m、南北約450mにおよびます。現在、遺跡の中央部分には国道4号線仙台バイパスと仙台南部道路の長町インターチェンジから通じる都市計画道路の交差点があり、都市化の進んだ現在では、かつての地名は残っておりませんが、周辺には「館ノ内」・「出丸」・「矢来」・「矢口」といった城館に関連する地名が存在していました。

延宝年間（1670年代）に記された「仙台領古城書上」によると、北目城の城主は16世紀後半までは栗野氏でしたが、栗野氏は永禄年間以降（1570年～）に伊達氏の家臣化したものと考えられており、「北目給衆」と呼ばれる



第2図 北目城跡位置図

伊達氏の家臣たちが栗野領に派遣されています。また、城跡は東西四十六間（約 83m）、南北五十六間（約 101m）の規模で四方に幅 8 間（約 15m）の堀があったと記されています。しかし、かつての地籍図から見るに、城の痕跡はさらに広域にわたっていることが推定できることから、これは主郭部分のみを記していたと考えられます。その後、慶長 5（1600）年の関ヶ原の戦いの際には、伊達政宗はこの北目城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙しました。そして、翌年には仙台城に居を移したことが知られています。

1992～93 年にかけて行われた第 1 次調査では大規模な堀跡や井戸跡などが見つかっています。堀跡の底面には、屈曲する畝状の高まり（障壁）が造り出されていました。また、埋まった土の中からは 16 世紀後半から 19 世紀にかけての陶磁器、刀、木製品、石製品など多彩な遺物が出土しています。その後も何度か発掘調査が行われており、障壁を伴う堀跡、井戸跡、土坑などが見つかるとともに、陶磁器や石製品などが出土しています。また、これまでの調査では近世の城館跡に関わる遺構、遺物の他にも縄文時代後期の堅穴住居跡や後期～晩期にかけての遺物、弥生時代の水田跡や中期から後期にかけての遺物、古代の溝跡、弥生時代以降の大規模な地震による液状化現象（墳砂痕）などが確認されています。

今回の発掘調査地点は遺跡の東部に当たります。当該地において宅地の造成工事が行われることになったため、道路部分を対象に発掘調査を行いました。

3. 発見された主な遺物と遺構

今回の調査では溝跡が 13 条見つかりました。そのうち 3 条は規模から北目城に伴う堀跡の可能性が考えられます。その他にも掘立柱建物跡 1 棟、井戸跡 6 基、土坑 10 基、ピット（小さな穴）116 基が検出されました。遺物は陶磁器や木製品、石製品などが出土しています。ここでは代表的な遺構のみ取り上げます。

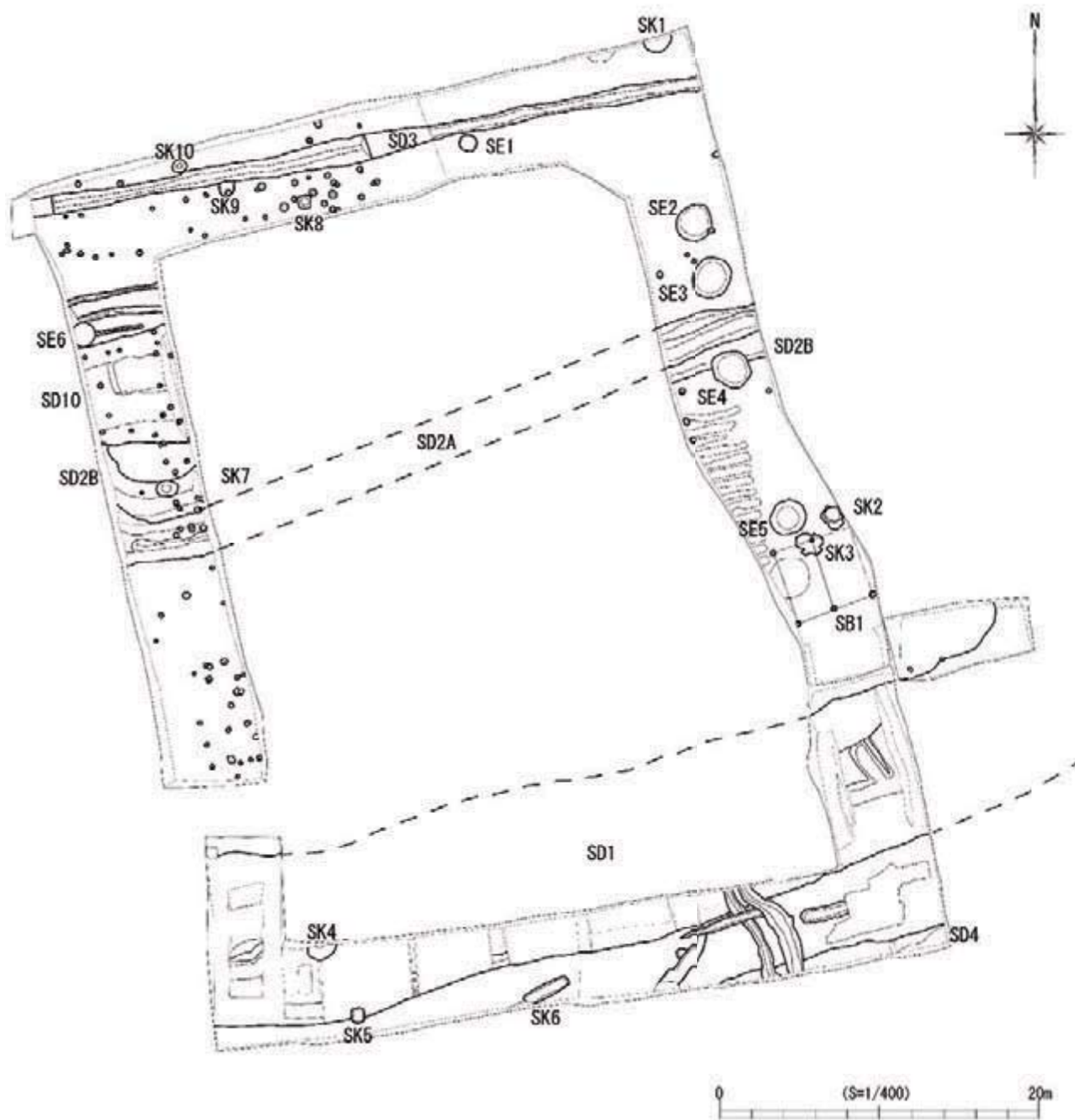
【SD 1 堀跡】

調査区の南側で確認された東西方向の堀跡です。確認できた長さは約 53m で、さらに調査区外の東西へと伸びます。東端部分は北に屈曲して折れ曲がります。この堀の延長部分が東側の調査（第 8 次調査）で確認されていることから、クランク状に屈曲していくことが推定されます。上幅は 10～11m で、深さは 1.8～2.5m です。また、堀底では障壁が確認されました。西側底面では堀と平行するような 1 条の障壁が確認され、東側底面では L 字状に設けられた段がありました。この段は底面から、さらに 30cm 程低くなっており、その中に堀と直交する障壁が 1 条確認されました。今回の調査では、底面を確認できたのは東側、西側の一部分でしたが、障壁が縦横に巡っており、複雑な構造であったことが分かります。

堆積土を観察してみると、底面に近い堆積土は水成堆積であったことから水堀であったものと考えられます。また一定の高さまで自然に埋まった後、人為的に埋め戻されたことが分かります。堀跡の最上層からは、埋め戻された土と一緒に江戸時代後期から明治時代までの陶磁器がまとまって廃棄されたような状況で出土しており、この堀跡の形状が明治時代ころまで残っていたことが分かります。遺物は陶磁器類の他、縄文土器、木製品、昆虫のハネや骨片などの動物遺存体、クルミなどの植物遺存体などが出土しました。

【SD4 堀跡】

調査区南東部で確認された東西方向の堀跡です。今回の調査では部分的な確認しかできませんでしたが、東側の調査（第 8 次調査）で確認された堀跡の延長と推定されます。今回の調査で確認された



第3図 第10次調査 遺構配置図

規模は長さ14mで、上幅1m以上、深さ0.7m以上でした。第8次調査では上幅5.5m、深さ1.2mの規模であることが確認されています。今回の調査では遺物は出土しませんでした。

【SD10 堀跡】

調査区西部で確認された東西方向の堀跡です。確認された長さは5.4mで、さらに調査区外の東西へと伸びます。また、南側はSD2B溝跡と重複しており、本遺構の方が古いことが分かります。規模は上幅7.2m以上で深さ1.3mです。断面形は逆台形状を呈しています。底面はほぼ平坦ですが、北東部に

は比高差 10cm 程度の低い段が設けられています。断面を観察してみると、一度埋まった後に一部掘り返されており、2 時期あったことがわかります。また、堆積土を確認してみると最終的には人為的に埋め戻されていることが分かります。また、今回の調査では遺物は出土しませんでした。

【SD2A・B 溝跡】

調査区の中央を横断する東西方向の溝跡です。重複関係から新旧の 2 時期認められます。長さは約 42m でさらに調査区外の東西へと伸びます。また、西端部は北に向かって折れ曲っていくことが確認できました。新段階 (SD2A 溝跡) の上幅は 2.5~2.9m で、深さは最深で 1.1m あり、断面形は逆台形状を呈しています。古段階 (SD2B) については、SD2A 溝跡により壊されていますが、上幅は 3.2m 以上あり、深さは最深で 1.5m あることが確認できました。断面形は逆台形状を呈しています。遺物は新段階 (SD2A) から古代瓦、中世陶器や石製品などが、古段階 (SD2B 溝跡) から土師器、石製品などが出土しています。

【SD3 溝跡】

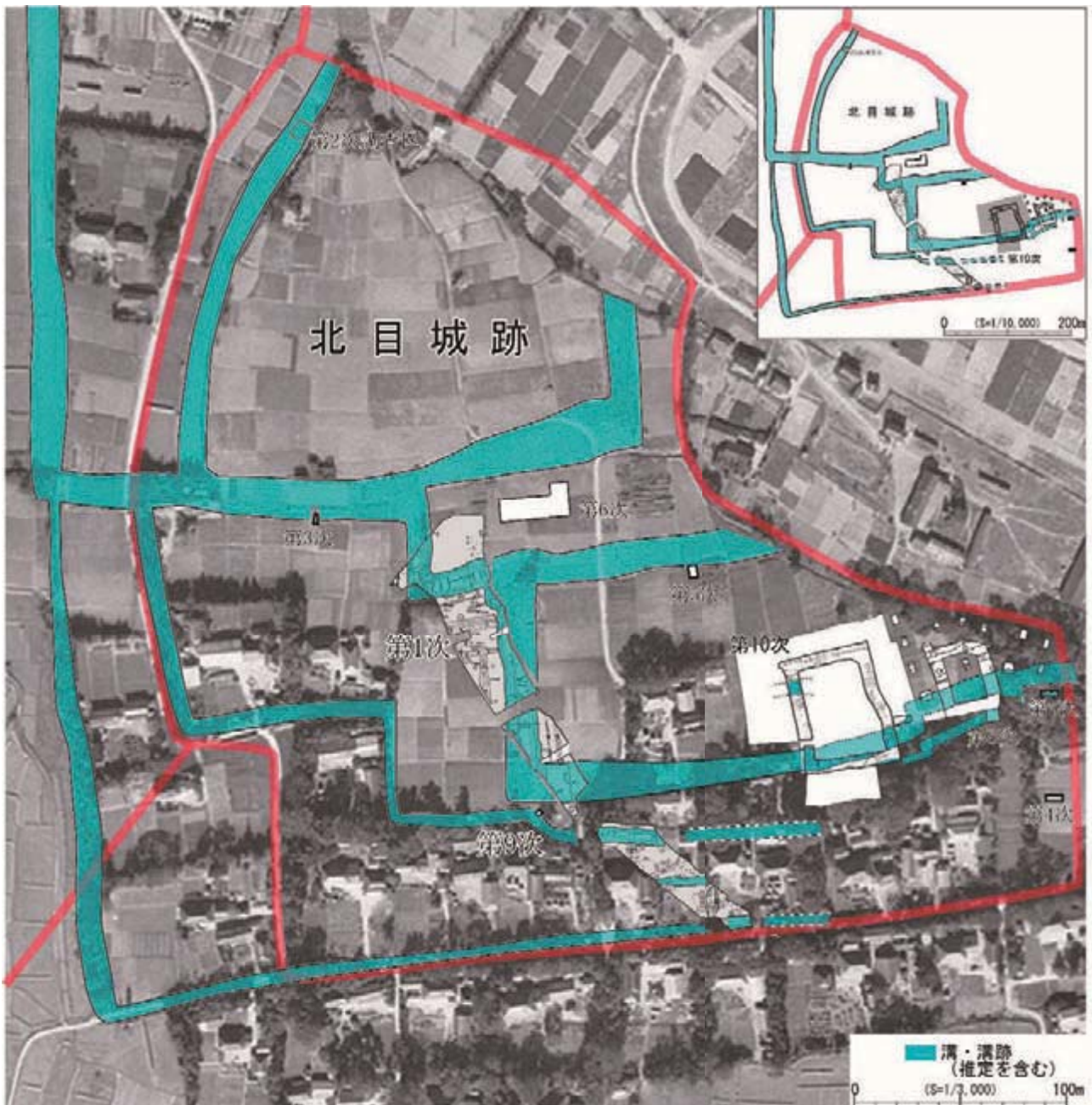
調査区の北側で確認された東西方向の溝跡です。確認された長さは 42m でさらに調査区外の東西へと伸びます。確認された規模は上幅 1.0~1.5m、深さ 0.5m です。断面形は逆台形状を呈します。これまでの調査でも同様の規模の溝跡が確認されており、それらは城の内部を区画する溝跡と考えられています。遺物は古銭、石製品などが出土しました。

【SE2~5 井戸跡】

調査区の東側で確認された井戸跡です。南北方向に並ぶように位置していますが同時に存在していたか、一連の機能を持っていたか等については不明です。直径は 2.2~2.8m で、安全面を考慮して、底面まで確認することが出来ませんでした。いずれの井戸跡も検出面から 2.5m 以上掘り込まれていることを確認しました。井戸枠などは確認されず、素掘りの井戸であったと考えられます。遺物は SE4・5 井戸跡を中心に木製品や石製品が出土しています。

4. まとめ

第 10 次調査区は遺跡の東部に位置します。これまでの調査から調査区周辺に大規模な堀跡があることが想定されていました。今回の調査で確認された SD1 堀跡は幅 10~11m と大規模な堀跡です。さらにその底面には障壁が造り出されており、防御のための機能を有していたと推定されます。そして、第 1 次調査の SD12 堀跡と第 8 次調査 SD1 堀跡の間に位置することから城跡の南側を区画する一連の堀跡であったと考えられます。しかし、その規模については東側 (第 8 次調査 SD1 堀跡) と類似しますが、西側 (第 1 次調査 SD12 堀跡) と比べると幅は半分以下の規模にしかならないことから、SD1 堀跡は西側で屈曲するか、規模が変わる可能性が高いことも分かりました。遺物の出土状況から、掘削された時期や埋没した時期について検討することは難しいですが、これまでの調査から一連の堀跡は 16 世紀後半から 17 世紀初頭に掘削されたと考えられており、SD1 堀跡も同様の年代と考えられます。また、江戸時代後期から明治時代の陶磁器とともに埋め戻されていることから、少なくとも明治時代までは、この地の風景としてその痕跡が残っていたことが分かりました。また、SD10 堀跡は西側でのみ確認されました。そのため、東側は南に屈曲して、SD1 堀跡と合流する可能性が考えられます。その他の遺構についても、



第4図 これまでの調査で確認された堀跡と推定ライン

詳細な時期については検討が必要ですが、中世以降の遺構が検出されているものと考えられます。

今回紹介した遺構の年代についても、今後さらに検証が必要で、現在も整理作業を進めております。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1995『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第197集
 仙台市教育委員会 2017『杢形遺跡他』仙台市文化財調査報告書第458集
 仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史 特別編7 城館』



写真1 SD1 堀跡 東部 (西から)



写真2 SD1 堀跡 西部 (北東から)



写真3 SD1 堀跡 (南西から)



写真4 SD10 堀跡 (南西から)



写真5 SD2A・B 溝跡 (北西から)



写真6 SD3 溝跡 (西から)



写真7 木製品出土状況
SE5 井戸跡 (北西から)



写真8 SD1 堀跡出土陶磁器

仙台市 仙名城跡(登城路跡・三の丸(東丸)土塁)

仙台市教育委員会

1. 調査要項

登城路跡第4次(仙名城跡第35次調査)	
三の丸(東丸)土塁第6次(仙名城跡第36次調査)	
所在地	仙台市青葉区川内地内
調査原因	国庫補助事業による遺構確認調査
調査期間	令和2年5月11日～10月9日
調査面積	登城路跡：約104㎡ 三の丸(東丸)土塁：約60㎡
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課 須貝慎吾・加藤智仁



図1 仙名城跡位置図

2. 登城路跡の調査について

仙名城跡の調査は、今後の登城路整備に向けて遺構の残存状況の確認を目的に、登城路跡と三の丸(東丸)土塁、沢門下石垣の3箇所で行いました(図2・4)。

3. 二つの登城路(大手道)と今回の調査地

仙名城には、本丸に通じる登城路が二つあります(図3)。登城路①は大手門から入り中門を経て本丸詰門へ至るルートです。大手門完成後に仙名城の公的な登城路として使われ、威容と機能性に重きを置いた登城路になります。一方、登城路②は追廻から巽門に入り、清水門、沢門を経て本丸詰門へ至るルートです。道筋は複雑に折れ曲がり、山城としての防御性に重きを置いた登城路になります。今年度は築城期の大手道と考えられる登城路②の巽門付近を調査しました。



図2 調査箇所位置図



図3 奥州仙名城絵図「正保城絵図」
仙台市博物館蔵



図4 調査区配置図 (1/1500)

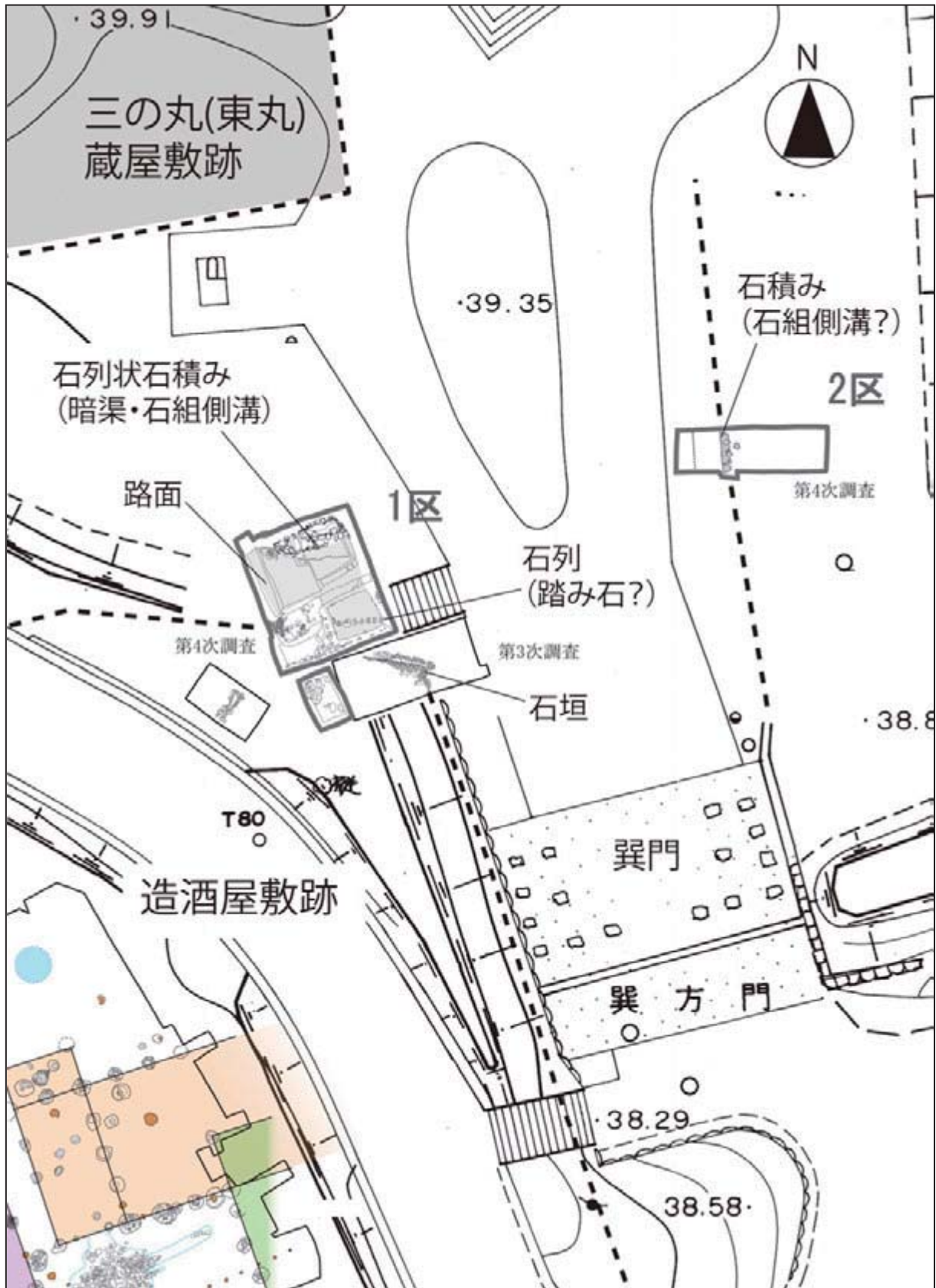


図5 登城路跡 3次調査(R元年度)と4次調査(R2年度)の位置関係 (1/250)

4. 登城路跡 4 次調査について

調査区を巽門跡の北西(1区)、北東(2区)の2箇所を設定しました(図5)。1区は清水門跡へ向かう登城路上に位置しています。今回の調査は、第3次調査で発見した石垣の延長を確認するとともに、江戸期の登城路の路面とその形状の確認を目的としています。

発見した遺構は、登城路の路面、石組溝跡、^{あんきよ}暗渠、石列などです。出土遺物は、陶磁器、瓦、レンガなどが出土しました。造酒屋敷地と登城路の境界付近ということもあり、塀瓦や酒造りに関連する陶磁器が出土しています。

今回の調査の主な成果として、次の3点があります。

江戸期の登城路の路面を発見

1区で江戸期の路面(整地面)を確認しました(図5)。

路面は、巽門から清水門へ向かう登城路の一部と考えられ、凝灰岩を敷き詰めて一度整地した状態で確認しました。

路面上では、径25~30cmの平らな石が並ぶ石列も検出しました。人の歩幅程度の間隔(約30cm)をあけて石が並んでいるため、踏み石の可能性が考えられます。また石列は、当時の登城路の動線に沿って配置されていることから、登城路に関係した遺構と想定されます。



写真1 路面上の石列遺構(1区東から)

登城路に伴う暗渠と石組溝跡を発見

巽門から本丸に至る登城路は、沢門から清水門といった名称にある通り、湧水が豊富であることが近隣の調査で明らかとなっています。今回の調査では、登城路の検出した路面下に造られ、湧水などの排水処理を行っていた暗渠を発見しました。暗渠とは、玉石や碎石を地中に布設して、その間を水が流れるようにしたものです。これによって城内の水を河川・堀などに排水していました。

今回検出した路面は、厚さ約50cmの水が浸透しにくい黒色の粘土(造成土)を盛った上に造られており、暗渠は、その中に埋設されていました。さらにその暗渠は、古い段階の石組溝を壊して造られていることがわかりました。

石組溝は、古い段階の路面に伴う遺構とみられ、径20~40cmの一部加工した自然^{れき}礫を両側に積んで、その間を水が流れていたものと考えられます。この遺構は、今回の調査区内では最も古い遺構であり、築城期まで遡る可能性もありますが、その詳細については引き続き検討する必要があります。



写真2 路面下の暗渠と石組溝(1区東から)

登城路を区画する石積み遺構を発見

巽門跡の北東に設定した2区では、登城路を区画すると考えられる石積み遺構を検出しました(図5)。石積みは、巽門から子門まで南北方向に延びる石組側溝の一部である可能性が考えられます。

検出した石積み遺構は、側溝の対となる西側の石積みが近代に壊され、東側のみ残ったものと考えられます。この場所には近代に第二師団の食糧などを蓄えていたとされる^{りょうまつ}糧秣倉庫があったことから、その建設時に江戸期の石組側溝が壊された可能性が考えられます。さらに今回検出した石積みの上部には近代に加工された石材(間知石^{けんち})が積まれていました。その背面からは、レンガ片とコンクリート片が出土していることから、近代においても石積みが利用されていたものと想定されます。



写真3 石積み遺構 (2区西から)



写真4 石材にある矢穴 (2区南から)

5. 三の丸(東丸)土塁6次調査について

土塁の調査は、これまで三の丸(東丸)東側の土塁を中心に行い、今回で6回目になります。今回の調査は、三の丸(東丸)北側土塁に3箇所の調査区を設定し(図7)、江戸時代の土塁形状と塀などの痕跡の確認を目的としています。

発見した遺構は、塀跡と考えられる集石遺構と石列遺構などです。出土遺物では、瓦が大半で特筆すべきところとしては塀瓦が出土しています。

2 時期の塀跡を発見

仙台城の絵図をみると、寛文^{かんぶん}4年(1664)～天和^{てんな}2年(1682)の間には^{さま}狭間の無い土塀が描かれています(図6)。今回の調査で、その土塀の基礎と考えられる集石遺構と石列遺構を検出することができました(図7)。

塀跡は2時期あったことが確認され、Ⅱ期の塀跡は、表土のすぐ下で検出し、礎石^{そせき}は失われ根固め石のみの状態で見つかりました。さらにⅡ期の塀跡の下層には、さらに古いⅠ期の塀跡が石列状に検出しました。土層の堆積状況から、Ⅰ期の塀が廃絶した後、土塁が約30～40cmかさ上げされてその上にⅡ期の塀が造られたということがわかりました。



図6 「仙台城絵図」に描かれる土塀
仙台市博物館蔵

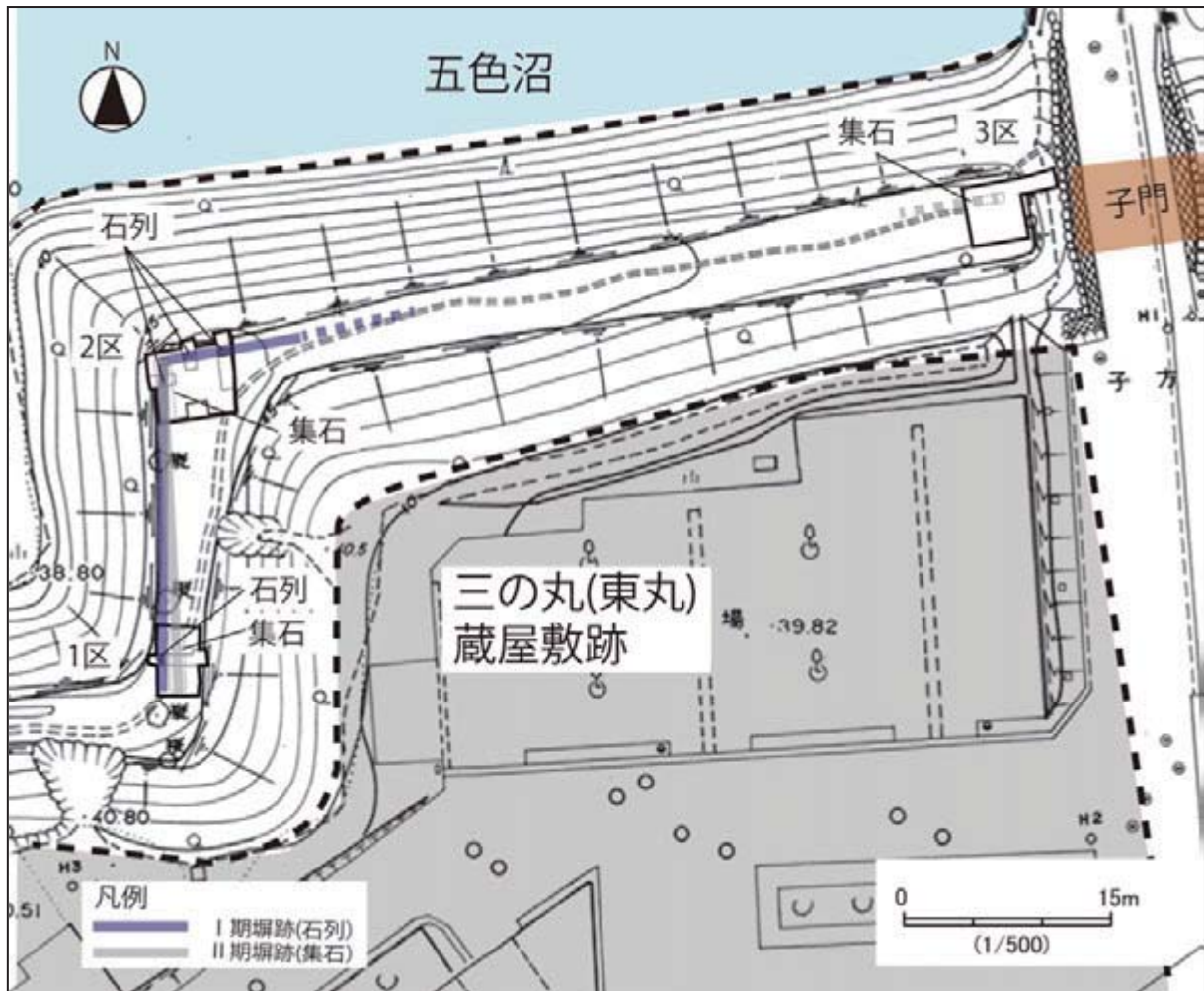


図7 三の丸(東丸)土塁6次調査の全体遺構平面図 (S=1/500)



写真5 2時期の集石と石列 (1区北から)



写真6 I期の石列 (2区南から)

6. まとめ

登城路跡では、造酒屋敷との境界を示す石垣の延長は見つけることができませんでしたが、巽門から清水門へ向かう登城路の路面を発見することができました。併せて地下の排水施設と石積み(石組側溝)を確認し、今回の成果から登城路の構造と形状を知る手がかりを得ることができました。

三の丸(東丸)土塁では、2時期の堀跡と考えられる痕跡を検出し、仙台城三の丸(東丸)の変遷において重要な発見となりました。今後は堀の構造と造られた年代を明らかにすることが課題です。

令和2年度の復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について

宮城県教育委員会 生田 和宏

I はじめに

東日本大震災の発生からもうすぐ10年を迎えるにあたり、甚大な被害を受けた沿岸市町で実施されている、土地区画整理、道路改良、防潮堤建設等の大規模な復興事業や、被災した個人住宅、企業の再建は着実に収束に向かっていきます。当教育委員会では、震災以降、復興事業の推進と遺跡保護の両立を目指し、円滑かつ迅速に調査を進める対策を講じながら、これらに伴う発掘調査（以下、「復興調査」と略す。）を実施してきました。

復興調査の成果や課題等については、これまでも宮城県遺跡調査成果発表会等で報告していますが、ここでは、主に復興調査の進捗状況と今後の見通しについて報告します。なお、復興調査を迅速に進めるための取組（発掘調査基準の弾力的運用、報告書作成方針、連絡調整会議の開催状況等）については、宮城考古学第15～18号を参照ください。

II 復興調査の進捗状況

1. 概要

宮城県の震災復興計画では、震災から復興までの期間を10年（復旧期3年・再生期4年・発展期3年）と定めており、今年度は最終年にあたります。復興調査は震災直後より実施されていますが、本格化したのは復興交付金制度が運用開始となった平成24年度以降です。復興事業と係わりがある遺跡数は323遺跡で、令和2年度までにすべての遺跡の試掘・確認調査に着手する見込みです。それらの調査結果をもとに、可能な限り遺跡に与える影響が少なくなるよう事業者と調整を図り、そのうち約27%に当たる86遺跡の本発掘調査を実施することとなっています（表1）。

なお、復興交付金基幹事業に伴う調査の実施に当たっては、分布・試掘調査は県、確認調査・本発掘調査は沿岸市町が調査主体となって実施することとされており、市町の調査体制が整わない場合は、県が市町に協力する形で調査を進めています。

表1 復興調査の進捗状況

（令和2年10月現在。仙台市を除く。）

事業別	試掘確認調査										本発掘調査（着手時期で表記）									
	対象遺跡数	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2～	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	計
	67	29	19	12	4	1		2			3	2	14	2						21
道路・鉄道関連	87	16	11	11	8	10	10	8	9	4	15	11	5	4	4	3		2	2	46
ほ場関連	113		18	39	25	9	13	6	2	1			9	3		2				14
漁業関連	40		1	1	6	3	17	6	5	1			1	2	1					4
堤防・公園整備等	16		2	1	5	2	2		3	1								1		1
合計	323	45	51	64	48	25	42	22	19	7	18	13	29	11	5	5		3	2	86

2. 主な復興事業と調査の進捗状況

(1) 復興道路建設事業

三陸沿岸道路

【仙塩道路】多賀城市山王遺跡・市川橋遺跡（古墳～奈良・平安時代中心：多賀城 I C 設置・4 車線化）の調査を県が行い、平成 26 年度に終了し、報告書は平成 29 度に刊行しました。

【歌津 I C～岩手県境】気仙沼市小屋館城跡など計 10 遺跡の調査を県が行い、令和元年度に終了し、報告書は、令和元年度に刊行しました。

常磐自動車道

常磐自動車道山元 I C 以南の建設に伴い、平成 21 年度以降、山元町涌沢遺跡など 24 遺跡について県と町が分担して調査を実施し、平成 25 年度で終了しました。このうち、県担当遺跡（18 遺跡）の報告書は平成 26 年度に刊行し、町担当遺跡（6 遺跡）の報告書は平成 27 年度に刊行されました。なお、本事業は、震災前は通常事業でしたが、震災後は復興事業として位置づけられました。

みやぎ県北道路

東北自動車道（栗原市築館）と三陸沿岸道路（登米市登米）を東西に結ぶ高規格道路で、復興支援道路に位置づけられています。栗原市分については、大天馬遺跡（古代）・後沢遺跡（古代）の 2 遺跡に係わり、県が確認調査・本発掘調査を行い、平成 27 年度に調査を終了し、報告書を刊行しま

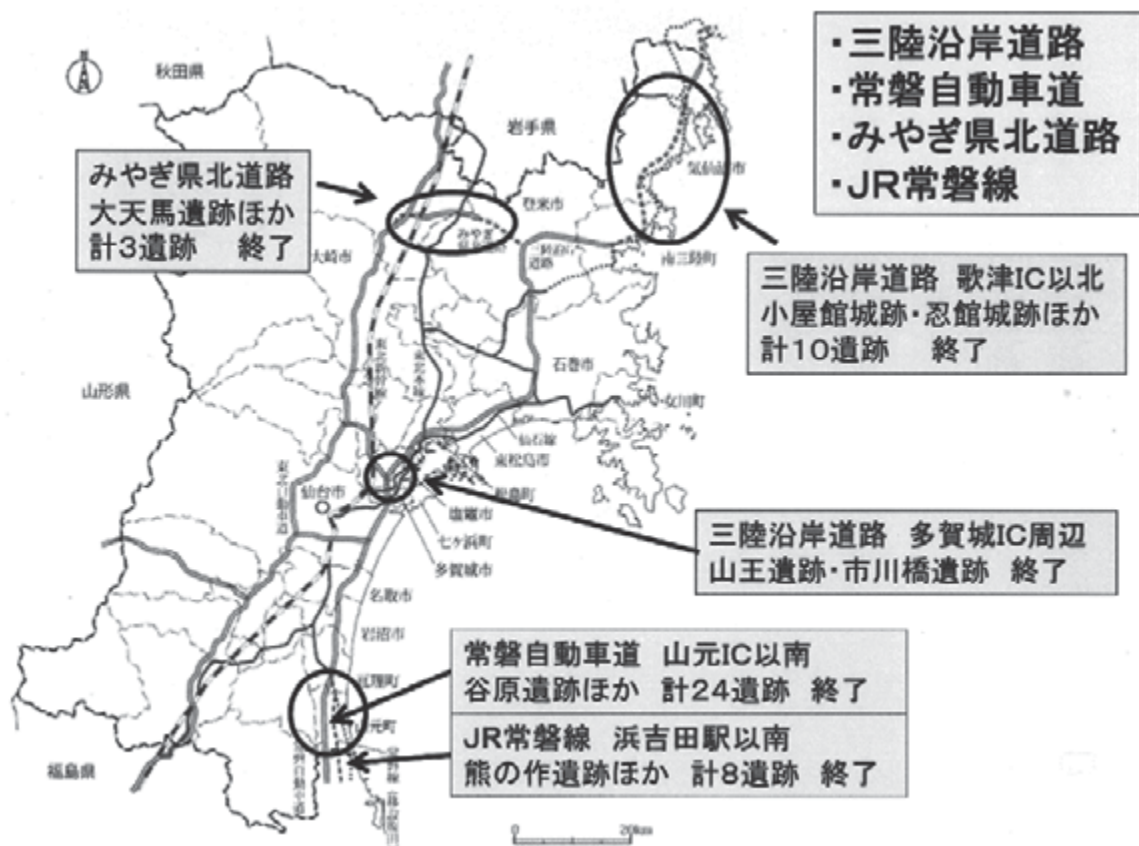


図1 高速道路・JR常磐線建設に係る復興調査

した。登米市分については、紫雲山遺跡（古代）1遺跡が係わり、登米市が平成28～29年度に確認調査・本発掘調査を実施し、調査を終了しています。報告書は平成29年度に刊行されました。

県・市町道

三陸沿岸道路多賀城ICへのアクセス道路となる県道泉塩釜線の4車線化工事に伴い、県が多賀城市山王遺跡・市川橋遺跡の調査を行い、平成26年度に調査を終了し、平成27年度に報告書を刊行しました。このほか、気仙沼市・女川町・石巻市・山元町などでも県・市町道等改良工事が計画されていますが、試掘確認調査は今年度で終了する見込みです。本発掘調査は、令和元年度から着手した石巻市中沢館跡、山元町戸花山遺跡は終了し、今年度着手の石巻市石森城跡についても、県が協力して今年度におおむね終了する予定です。

(2) JR常磐線建設事業

JR常磐線浜吉田駅以南を内陸に移設する工事に伴い、平成25年度から県が山元町熊の作遺跡、新中永窪遺跡（奈良・平安時代）など計8遺跡の調査を行い、平成27年度に終了し、平成28年度に報告書を刊行しました。

(3) 沿岸市町復興事業

防災集団移転促進事業（高台移転）、漁業集落防災機能強化事業、堤防整備事業等に係る調査があり、このうち防災集団移転促進事業（高台移転）に伴う調査は終了しました。

本発掘調査は多賀城市山王遺跡の調査が多賀城市で継続していますが、今年度で終了する予定です。

漁業集落・堤防整備事業等については、今年度、塩竈市野々島貝塚・貞山堀等で調査を実施し、試掘確認調査についてもおおむね終了する見込みです。また、令和元年度に着手した南三陸町大久保貝塚の本発掘調査については、県主体で実施し、今年度に調査を終了しました。

個人住宅や零細・中小企業の再建等については、震災後の平成24～26年度に調査件数が急増し、その後は減少傾向です。主に気仙沼市、石巻市、多賀城市等で実施されていますが、今年度におおむね終了する見込みです。

3. 今後の調査について

令和元年度までに三陸沿岸道路、常磐自動車道・JR常磐線建設、高台移転関連等の大規模調査は終了しました。県市町道改良事業と漁業集落・堤防整備事業等の試掘確認調査も令和2年度でおおむね終了する見込みです。ただし、本発掘調査・試掘確認調査ともに、用地買収や伐採作業の遅れ等から調査に着手できない遺跡や、着手済の遺跡でも一部工区の調査が実施できない事例も認められます。また、少ないながらも個人住宅や零細・中小企業の再建等に伴う調査が生じることも予想されます。令和3年度もこれらの調査に引き続き対応する必要があるとみられます。

4. 復興調査報告書の刊行状況

復興調査の報告書のうち、復興庁の復興交付金事業で実施した発掘調査の報告書については、各事業期間内に刊行することとされていますが、特に事業量が多い市町においては、事業期間内に報告書

を刊行することが難しいと考えられるため、平成 28 年度に文化庁、復興庁宮城復興局、関係機関で協議した結果、報告書刊行に要する費用を本体事業から切り離し、文化庁の埋蔵文化財発掘調査事業（A-4 事業）で改めて必要費用を申請する予算の移し替えにより対応できるようになりました。これにより、令和 2 年度まで報告書作成期間を確保することができ、事業量が多い市町にとっては効果的な運用となっています。

復興調査報告書の刊行状況は下記のとおりで、必要最小限の内容とする復興調査報告書の作成方針に基づいて報告書が刊行されており、大規模調査の報告書についてはおおむね今年度で終了する予定です。

* 県刊行報告書 : これまで 11 冊刊行。

* 市町刊行報告書 : これまで 53 冊刊行。令和元年度、山元町簗首城跡など 5 冊刊行。

令和 2 年度以降 35 冊刊行予定

気仙沼市小屋館城跡、忍館城跡の発掘調査終了と報告書刊行によって、県が実施した三陸沿岸道路、常磐自動車道・JR 常磐線建設、みやぎ県北道路等の大規模な調査については、令和元年度で報告書の刊行が完了しました。また、石巻市が実施した高台移転の大規模な調査については、令和 2 年度で報告書の刊行が完了する見込みです。

一方、南三陸町大久保貝塚（縄文時代晩期：河川堤防復旧）、中沢館跡・石森城跡（縄文時代・中世：県道）、多賀城市山王遺跡（弥生時代～古代：ほ場整備）のように、今年度にも本発掘調査を実施した遺跡や、気仙沼市波怒棄館遺跡（縄文時代前～晩期：高台移転）、山元町合戦原遺跡（古墳時代後期：高台移転）のように多くの遺構や遺物が発見された遺跡は、市町主体で報告書を作成する遺跡がほとんどであり、報告書の刊行になお時間を要すると見込んでいます。これらの市町は専門職員数も少なく、あわせて通常事業の調査も実施していることから、調査と報告書刊行に向けた整理作業の両立は厳しい状況です。県も協力し、早期刊行に向けて迅速に報告書作成を進めていきます。

Ⅲ まとめ

1. 三陸沿岸道路、常磐自動車道、JR 常磐線建設、土地区画整理事業・防災集団移転促進事業に伴う大規模な調査や試掘確認調査は今年度中にほぼ終了する見込みです。ただし、土地買収の遅れ等から調査に着手できない遺跡や工区、個人住宅や零細・中小企業の再建等に伴う事例については、令和 3 年度も調査が実施されることが想定されます。
2. 今年度にも本発掘調査を実施した自治体や、過去に大規模な本発掘調査を実施した気仙沼市、多賀城市、山元町では、多大な報告書作成業務が継続しています。これらの早期完了が大きな課題となっています。
3. 文化庁スキームによる宮城県及び沿岸市町への職員派遣が平成 28 年度で終了したことにより、各市町における調査・整理体制の充実が必要となっています。当教育委員会も協力し、復興調査及び報告書作成を迅速に進めていきたいと考えています。

[考古学で使われる用語のいろいろ]

遺跡（いせき）：昔の集落跡、城跡、^{かいづか} 貝塚、^{こふん} 古墳など、過去の人々が作ったものや生活の跡です。地面の下に残されたもの（^{まいぞうぶんかざい} 埋蔵文化財）のある場所のことを示す場合もあります。

遺構（いこう）：^{たてあな} 竪穴住居跡、建物跡、^{どこう} 土壌（＝大きな穴）、^{みぞ} 溝跡など、地面に残された^{こんせき} 痕跡をさします。

発掘調査で個別の^{いこう} 遺構を呼称・記録する際は、記号化した^{いせき} 遺跡の種類に数字番号をつけた^{いこう} 遺構番号を使用しています。（例えば「第1号^{いこう} 竪穴住居跡」は「SI-1」など）

記号と^{いこう} 遺構の種類

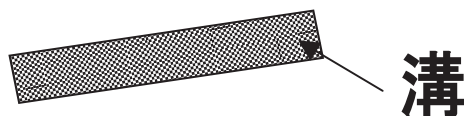
SA	^{へい} 塀・ ^{さく} 柵・ ^{どるい} 土塁	SM	盛り土・ ^{かいづか} 貝塚
SB	建物(^{たてあな} 竪穴建物以外)	SN	水田・畑
SC	^{ろう} 廊	SP	柱穴・ピット
SD	^{みぞ} 溝	SS	^{そせき} 礎石・ ^{ふきいし} 葺石・ ^{はいせき} 配石
SE	井戸	ST	墓・埋葬施設
SF	道路	SU	^{いぶつ} 遺物集積
SG	池	SW	石垣・防護壁
SH	広場	SX	その他
SI	^{たてあな} 竪穴建物	SY	^{かま} 竈
SJ	^{どき} 土器埋設 ^{いこう} 遺構	SZ	^{こふん} 古墳・ ^{墳正墓} 墳正墓・ ^{しゅうこうぼ} 周溝墓
SK	^{どこう} 土壌(土坑)・ ^{たくわん} 貯蔵穴・ ^{おとし} 落とし穴	NR	自然流路
SL	^ろ 炉・カマド		

※ 上記^{いせき} 遺跡記号は、「発掘調査のてびき」（文化庁文化財部記念物課、平成22年発行）より引用・作成したものです。調査機関によっては、異なる記号を使用している場合もあります。

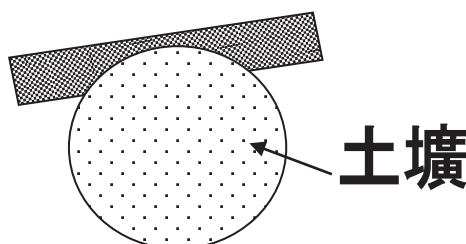
切り合い（きりあい）：2つ以上の^{いこう} 遺構が重なっている場合、どちらかの^{いこう} 遺構が先に作られ、もう片方が後から作られたと考えられます。この「先後関係」（＝新旧関係とも言える）を「切り合い」と呼んでいます。発掘では^{いこう} 遺構の切り合いを正確につかむことが大事です。

【切り合いの例】

①ある時代に、細長い^{みぞ} 溝のような^{いこう} 遺構が作られたとします。



②^{みぞ} 溝が埋まった後、^{みぞ} 溝に重なるように^{どこう} 土壌（大きな穴）が掘られたとします。



ポイント！

このとき、^{みぞ} 溝の一部分を壊して^{どこう} 土壌が掘られています。

発掘調査で、②のような状態の溝と土壌が発見された場合、「溝が先に作られており、土壌が後から作られた」と判断します。なぜなら、先に作られた遺構を後の遺構で壊すことはできませんが、その逆はありえないからです。ですから、壊されている方が先（＝古い）、壊している方が後（＝新しい）と考えます。（壊されている遺構を「切られている」、壊している遺構を「切っている」と呼びます）

例えば、土壌の年代が平安時代の初め頃だと確定できれば、溝はそれよりも古い時代（奈良？飛鳥？古墳時代？もっと古いかも）のものだと判断できます。

このように、「切り合い」を判断しながら、発掘調査を進めています。

攪乱・カクラン：近年になって工事などで一度掘り返された場所をさします。ここにあった遺構は壊されてしまっているので、発掘ではカクランの調査にはあまり時間をかけません。

遺物（いぶつ）：過去の人々が作ったり使ったりした“モノ”で、遺跡の中から見つかった物を遺物といいます。土器や石器、勾玉、古代瓦などがあります。遺跡の年代や性格を特定するために、とても重要です。

形式（けいしき）・Form：一般に、遺物の機能や用途をおもな基準として分類した「かたち」ごとのまとまりで、器種ともいいます。土器では、壺や鉢、椀、皿、甕などにわけられます。

型式（けいしき、かたしき）・Type：遺物をさまざまな形式に分類する中で、ある程度の時間的・空間的なまとまりや変化が認められる場合、型式として区別します。

一般には、型式の基準となる遺物を出土した遺跡名や土層名などから型式名称が付けられています。例えば、七ヶ浜町にある大木田貝塚では縄文時代前期から中期にかけての良質な土器が出土したことから、大木1～10式といった名称の型式が設定されています。

編年（へんねん）：形式や型式などで分類された遺物を、出土した遺跡の状況なども手がかりとして時間軸にならべ、まとまりや変化の指標とすることをいいます。

土師器（はじき）：一般に赤褐色か黄褐色の土器で、古墳時代から平安時代の中頃（約1700年前～1000年前）にかけて一般的に使用されました。

須恵器（すえき）：灰色をした土器で、土師器と異なり窯で焼かれた硬い土器です。古墳時代から平安時代にかけて使われました。丈夫なため大きな甕なども作られました。

令和 2 年度 宮城県遺跡調査成果資料集

発行日：令和 2 年（2020）年 12 月 12 日

編 集：宮城県考古学会企画幹事会

発 行：宮城県考古学会

郵便振替口座 02210 - 1 - 41729

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1

東北大学大学院文学研究科考古学研究室気付

e-mail info@m-kouko.net

印 刷：佐藤印刷株式会社

〒981-2501 宮城県伊具郡丸森町大内字石神 57

